ト工4G-3
43
241

毎月二回發兌　第壹拾編　正價金拾五錢

高橋雄峯譯述

ロビンソンクルソー

絶島漂流記

上卷

東京博文館藏版

トエ4G-3
43-24

例言

此書は世界三大奇書の一にして而して亦實に三大奇書中の最大奇書たり歐米諸國に於ては人として之を讀まざるなく家として之を備へさるなし故に刊本數十種に上り發行部數前後幾千百萬なるを知らず各國の學士競ふて飜譯し書肆爭ふて發行し今や世界各國到る處此飜譯書なきはあらず亦以て此書の如何に奇絶妙絶なるを知るべし今譯して世界文庫の一部分となすもの豈夫れ偶然ならんや

此書凡て自叙躰を用ゆ故に書中「余」若くは「余等」の文字を使用すること多し他人との問答中に於てもロビンソン自身に關する事は間々第一人稱を以てす此書を讀むものゝ豫め注意すべき一要點たり

原本は全部を大別して二卷となし其間に章を設けず故に卷末に至るまで筆意脈々絶ゆることなし今分つて三卷數十回となすものは何ぞや他なし只分つて三卷數十回となしたりと云ふに過きさるのみ善讀の士女は連ねて誦了するを要するなり

明治二十七年二月

譯者識す

ロビンソンクルーソー 絶島漂流記卷一目次

第一回
ロビンソン年十九にして海上冒險を企つ。父母の訓戒。斷然乘船。
暴風波に愕く。難船。助命。船長の苦言。

第二回
商業航海の成功。第三航海の難船。神の祟り。海賊に捕はる。逃走。

第三回
逃走中の冒險奇談。獅子及び豹の捕獲。海岸に野蠻人を見る。

第四回
商船に助けられてブラヂル國に着す。該國に於て富農となる。
又々冒險航海。又々難船。ロビンソン獨り助かる。

第五回
絶島荒漠の地に漂着す。難破船より種々の必要品を獲來る。島地の視察。

第六回
野蠻人及び猛獸の防禦策を講ず。住所の撰定。墻壁を築く。
恰好の食料品山羊を獲。既往の無謀を悔ゆ。
第七回
日誌を付け始む。暦を製造す。農具を製す。稻及び大麥の生出を見て大に喜ぶ。
第八回
恐ろしき地震恐ろしき暴風雨。大龜を捕ふ。難破船より多くの物を得。
瘧病を煩ふ。恐ろしき夢を見て發心す。懺悔。聖書を發見す。
第九回
病氣快癒。島地探檢に出づ。煙草葡萄其他種々の植物を發見す。
生籬を造る。籠を製す。
第十回
再び島地を探檢す。鷄、鵝を捕ひて之と談話す。聖書の難有に感ず。
日課を定む。農具及陶器を製す。
第十一回
獨木舟を製造す。總ての煩惱を解脫す。神罰の恐ろしきを悟る。
自から衣服、帽子、傘を作る。
第十二回
獨木舟を沿海に浮ぶ。又々殆んど溺死せんとす。我名を呼ぶものあるに驚く。
沙上に人の足跡あるを見て恐怖す。

ロビンソンクルーソー 絶島漂流記卷一

高橋峰雄譯述

第壹回

ロビンソン年十九にして海上冒險を企つ。父母の訓戒。
斷然乘船。暴風波に愕く。難船。助命。船長の苦言。

余は千六百三十二年ヨーク町に生れたるもの。父は素とブレメンの產にして、始めヒユルに殖民した る外國人なりしも、現にヨークに移住して、相當の生活を營める一良家たり。元を尋ぬれば父は商賣に依て多大の資產を作り、其後故ありて商を廢め、ヨーク町に移りて余の母なる人を娶れり。母の家は此國に於て頗ふる良家門に屬し、姓をロビンソンと稱せしかば、余も亦ロビンソン、クリウツアーと呼ばれ、然るに英國人に珍らしからざる訛の爲めに、何時の間にかクルーソーと呼ばれ、自からも爾かく名乘り、朋友も亦余を爾か呼ぶに至りしぞ、是非なき次第なる。

余は二人の兄を持てり、其一人は以前彼の有名なる大佐ロックハルト氏の麾下に屬する步兵隊の中佐なりしが、終にスペインに干役してタンカールの戰に殺されたり。次の兄は如何に成しか余全く之を

知らず、而て其知らざるは宛も余の父母が、余の遂に如何になりしかを知らざるに異ならず、余は則ち第三男にして少小より嘗て一の商賣を習ひたるとなく、從て早くより心中竊かに浪遊の考を生じたりき、父は極めて實着なる氣質なりければ、先づ余に世間一般の家庭教育則ち田舎小學の課程に相當するだけの學問を授け。さては余を法律家となさんとしたれども、余は海に浮んで冒險をなさんとするの外何事をも好まず。此心は遂に余をして父の意志命令に背き、母の懇諭朋友の勸告に背きて、性癖の犧牲となり、一身の不幸直ちに身の上に生ぜんと見ゆるばかり、強く余を危道に導きたりけり。余が父は性來賢く且つ實着なる人なりければ、夙に余の心の程を看破し、是に對して精嚴なる忠告を與ふることもありき。一日痛風症の爲めに惱まされて、己が部屋に閉籠りたる父は、突然余を膝近く呼寄せて、余が事に就き熱心に諫められたり。徐ろに問ふ樣生國に在ればこそ相當の位置も得らるべく、事業任務を執りて財産を作り、以て安樂愉快なる生活をも遂げ得べけれ、今父母の家、生れ故郷の國を見捨てゝ外國に行くとは、何たる理由ぞや。と更に懇々余を諭して云ふ、險を冒して外國に行き大膽事業を起して、常規に外れたる幸運に際會し、以て一身の名利を握りたるものゝ如きは、此世に失望したる必死の破戸者か、若くは天の冥助を受けたる非常幸運の人のみ。斯の如きは余の現在の位地に比すれば、遙かに上なるものか又は遙かに下なるものなり、而して余が地位は中等の家に生れ

所謂下等生活の上流に位するものにして、此階級は下等社會の貧苦艱難勞働苦惱を冒すの必要なきと共に、上等社會の驕慢奢侈非望嫉妬の爲めに心を擾さるゝことなく、世に最も好良の地位にして、亦人間の幸福に最も適當なる地位なるとは、彼が長き經驗によりて發明したる所、誤りあるべからず。更らに中等の位地の幸福なるは下の一事にても知り得べし、則ち此中等階級の生活は上下を通じて、總ての人の羨む所にして、彼の至尊なる帝王と雖、往々皇家に生れたるの不幸を歎き、寧ろ賤と貴との中等社會に生れたらんとを望み給ひ。聖賢も亦此階級を以て幸福の中點となせりと論じ、猶余に熟考を命じ給ひたり。余は之を聽く毎に人生の苦惱は、上下兩階級に等分せられて、中等社會は殆んど之に與らず、且つ其變化最も少きものなるを信じ。又中等社會は父の論ずる如く、一方に於ては腐敗せる生活、贅澤放蕩の爲めに身心の惡癖を助長する憂なく、他方に於ては下等社會に避くべからざる勞働の困難衣食の欠乏、榮養の不充分の爲めに、身心を苦しむるの憂あらず。而して凡ての品行、凡ての德操、及び凡ての怡樂を有するものは則ち中産者にして、安心と物に不自由なきの樂は、常に伴て離るゝとなく、適宜、安靜、健康、交際等のあらゆる娛樂、あらゆる愉快は、專ら中等社會に附着するものなるを感じ。此階級にある人々は世を靜かに、滑かに渡り、敢て甚しく腕力腦力を勞するとなく、且つ日々の食物の爲めに奴隷の境界に陷るとなく。將た精神の安慰、身躰の安逸を害する所

の、煩雑なる事情に苦めらるゝとなく、又は妬心の爲めに心を刻み、大望の欲の爲めに精神を焦すとも無く、安樂に温和に世を渡りて人生の甘味を味ひ、日々益々此世の快感を喫賞するものは中等社會の外に求むべからざるを感じたりき。

爾後父は益々熱心に最も信實に余を諭して、中等人士の宜しく求むべからざる不幸の境に馳せんとを防ぎ。且つ余は險を冒して食を求むるの必要なきこと。父は余が爲めに盡力し以て安らかに、中等生活を遂げしめんことを約し。斯くて余若し猶此世に幸福と安樂とを得る能はずんば、こは先天の命運なるか、若くは余が過失ならずんばあらずと戒め。斯まで世難を避くるの方法を敎へたる上は、父たるものゝ義務も盡きたれば、又と不足を唱ふる所なかるべきを告げたりけり。則ち父の言ふ所は之を約言すれば、余實に彼の言ふ通り家に留らんには、有らん限りの助力を與ふべきを以て、他日不運に遭遇して、寧ろ意を決して外に出づるが如きとはあるべからずと云ふにあり。最後に父は余が兄の例を引き、往きには兄にも熱心に下國の戰に出づべからざるを諭したりしも、若氣の至りに之を聽かずして軍隊に飛び入り、遂に殺されたるなり。而して余亦若し兄の如く父の言を聽かずして外國に冒險することあらば、一切余が爲に神に祈らざるべしと云ひ。猶余にして斯かる愚計を取らば、神は決して幸を下さゝるべしと警め。且つ相談すべき親なき後に至りて、乃ち親の敎に背きたるを悔ゆるの日あるべきを歎げきたり。余は實に父の最後の一言に感動すると共に、父が老眼の中より潸々として涙下り、殊に死したる兄の事に及んで、はら〳〵と老の涙を絞りたるを見、又余が後悔の時あるべく而かも其時は既に助くる親もなからんと云ふて、父は音聲を曇らし、感迫りて復た言ふこと能はざるの風あるを見き。余も流石に此懇諭に感激して斯かる眞實の言葉を與へ呉るゝものは、親の外に又とあるべからずと思ひて、是より全く外出の念を擲ち、父の望通り家に在らんとぞ決したりける。

然るに亦二三週間の後に父に計らずして、竊かに抜け出づるに決し。先づ母の機嫌よき時を見計りて心の程を打明け、一旦思ひ込みたることをなさゝる上は、落附きて物に取掛ること能はざるを歎き、且つ父も余を其承諾なくして出さしむるよりも、寧ろ快く許諾するの優れるを說き。加之ならず余も今や既に十八歳に達したれば、商家の見習となるに晩く、辨護士の書生となるにも年老たり、好し今に至てさるものとなるも、余は決して年期を務め上ぐること能はずして、年明け前に主人の家を逃げ出し、好める航海に赴くに極まれり。若し母上にして幸に唯一回の航海を余に許す樣、父上に歎願して其許を得ば、余復び歸り來りて復た航海を欲せざるに於ては、最早出でざるべく、斯くて既に失ひたる時間を回復せん爲め、二倍の勉勵して御目に懸けんと口說きたるに。母の驚き一方ならず、此事に就ては父に談ずるも効なきのみならず、父は深く余の利害を察して承諾を與へざるものなるに、過ぐ

る日の懇なる說諭は早や忘れしか、箇程に眞情と愛憐を込めたる言葉を如何に思ふやなどゝて叱り附け。若し一旦聽かずして遠出し、一身を奈落するも其時は誰ありて助くるものなかるべく、之に反して父母の言に從ひ家に在らば萬安泰なるべしとすかし。終りに母の意見に於ては、余が外に出づるも左迄心配に及ばずと信ずれども、父の好まざる事を母獨り贊成したりとは云ふべからずと注意しけり。斯くて母は余が爲めに父に願ふを辭せりと雖、後にて聞けば母は或日余が主張の一分始終を密かに父に告げ知らせしに、父は大に心痛の色を表はし太息つきて。困つたものなり、彼の兒は內に在れば之こそ幸なるべけれ、外に出でなば世に見る影もなき不幸憐れのものとならん、許諾は與へられませぬと言ひたりとぞ。

此後一年程の間、父母は余の擧動に注意して、氣盡に戶外に出づることをも許さいりしが、余も亦頑として一定の業に就くを辭み、時に觸れては父母が余の好む所をなさしめざるの無慈悲なるを論じたることもありて、空しく月日を過したりけり。一日何氣なくヒウルに行きたるに、一人の朋友將さに其父の船に乘りて、英京倫敦に出帆せんとする折に會し。余にも同行すべき樣、例の船人の誘ひ口上もて煽ぎ立て、船賃は一厘も要する所にあらずと云ふに惑はされて、直に行く氣になり。父母に一言の相談なく、手紙すら送らずして、消息は凡て出帆後の傳聞に一任し、更に神の冥助父上の祈願を乞

はざるは勿論、前後の考もなくして、一千六百五十一年九月一日倫敦行の帆舞船に打乘りて出發したり。嗚呼此日は余に取りて何たる惡日ぞや、世に少年冒險者の不幸に遭遇したるものは數あれども、未だ余の不幸の如く速に來りて、而かも長く續きたるはあらざるなり。船がパンバル港を出つるや間なく、風は頻りに吹き起りて海上凄ましく暴れ。さなきだに海に慣れざる余のことなれば、船暈の苦言語に絕し、恐怖の念言ふばかりなし。今に至りて始めて愚なることしたりけるを悔ひ、父母の說諭を蔑にして慢りに家出したるを罪深く感し、父の愛淚、母の歎求、今あり〳〵と心に浮ひ來りて遺る方なく。余が良心は切りに胸をせき立てゝ、兩親の訓戒に背き、神と親に對する務を破りたるを嚴責せるも及ばず。風は益々吹き暴れ海は益々波高く、未だ余が數日後に見たるが如き慘狀を呈するに至らざりしも、年猶ほ若く海事に暗き余の心は、是にて充分に嚇されたり。大波の寄する每に吾等は爲めに飲み去られんかと想ひ、船か波と波との間に落つる時は、早や沈沒して復た浮む瀨なきかと訝り。憂苦の中に種々の誓をなして、神樣若し此航海に於て余が命を救ひ安全に陸地に揚げ給まわらば、余は直ちに父の家に歸りて生涯再び船に乘らざるべく、從順に父の敎に從ひ最早決して斯かる憂目を復ひせざるべしと祈れり。余は今益々明かに中產者に就ての父の意見の正しきを覺り、父の如何に安樂に、如何に愉快に、其日を暮し、決して余の如く海上の風波に苦しむことなきを想ひて、余も

今後は真に後悔したる放蕩兒の如く、父の家へ歸るに決心したり。

斯かる賢く實着なる思想は、風波の暴るゝ間と、其後暫時の間は續きたれとも、翌日に至て風歇み濤稍々靜まりたれば、余は聊か海に慣れたる心地したりしが、未た全く船暈の苦を脱せさる爲め終日沈んて物案じしたりけり。然るに夜に至ては、一天水の如く霽れ渡り、風亦全く收りて、大陽輝きつゝ西に落ち、翌朝又輝きつゝ東に昇り、彩光平波に映する景色得て言ふばかりなし。余は最早船暈を感せす、前日まで怖ろしきばかり、暴れに荒れたる海上か、暫しの間に斯くまで愉快に平穩になりたるを見て、寧ろ奇異の想をなし、只何となくうれしき心地して此夜は能く眠れり。余を始め船に誘ひたる一友、余か變心を防がんために、來りて余が肩を打ち。如何にクルーソー君よ、僕は君が昨夜の小風に驚きしと想ふは癖目か。余云ふ、君は昨夜の荒れを以て小風と云ふか、怖るべき暴風波にてはあらさりしか。友答て曰く、あれしきのものを荒れとは馬鹿を云ひ給ふな、君は苟旦にも暴風波と思ふか、若し吾等に良き船と船室とあらば、かほどの風位は何ともなきものなり、併し君は猶新參の水夫なれば、或は而か思ふも無理ならざるべきか。兎に角僕と共に來れ、快く數杯の美酒を擧げて、近日の辭苦を忘れん、今日は如何にも好日和にあらずや。とて水夫ともの群に交りポンス酒を飲んで余はほろ酔に酔ひたり。端なくも只此一夜の放逸の爲めに余は過去の悔悟を忘れ、改善の決心に戻り、且

つ未來の方向を誤まりたるぞ口惜しき。風衰へて海面滑かに、波浪靜寧に歸すると同時に、余の心の周章は消えて痕なく、海神に呑み去られんとの恐は早や既に忘却して、年來の素志又蘇り。昨夜怒濤船を簸弄したる折、神に向てなしたる誓も、約束も、今は全く忘れたりし。尤も余は聊か顧慮して、以て再び歸家の念を發揮するの時間なきにあらざりしも、今や一切斯かる退却の怯心を抛ち、勇み立ちて飽まで痛飲快談したりければ、眞面目なる悔悟心は、復び胸中に浮び來ることなかりき。果して神は斯かる場合に於て一般に祟るが如く、余をも容赦することなくして、更らに一の罰を下し給へり。而して其罰は吾々同志中の最も艱苦したる遭難者が、話す所の危難悲慘と、殆んど優劣なきものなりしなり。

海上に在ること六日にして、漸くヤルマウス碇泊所に着せり。是れかの大荒の後は、風逆に吹き、且つ日和も靜なりければ、緩々と進行したるが故のみ。此後七八日間は依然西南の逆風にして、船を出すに便りなければ、余等は少時茲に碇泊しけるに、ニューカッスル發の大船巨船も數多入り來りて、同じく順風を待合へり。固より余等は、長く此處に碇船する積にはあらずして、逆風さへ稍々衰へたらば、速かに壯潮に乘りて出帆せんの心得なりしが、穴悪く四五日後は風益々荒く、容易に出發すること能はず。唯此碇船所は頗ぶる安全の所にして、殆んど港に異らずとの評あり、且つ余等は善

き錨、強き鏈を有したれば、かばかりの風には無頓着にして、毫も危險の思をなさず、例の如く船中に逸樂惱戯して以て日を暮したり。然るに八日目の朝に至りて風俄に增し、余等も安んずると能はざれば、先づ總掛りにて第二梔を切斷し、凡ての物を取り外し、卷き收めて、以て成るべく船を安靜ならしめたるも。正午頃に至りて海上益々暮れ、波浪愈々高く、船は幾度か、山なす大濤の爲めに前甲板を沒せられ、錨も激浪に弄されて、ふら〳〵と浮びしと想ふと啻に一二回のみならず。此に於て船長は、急に大錨を下すべき旨の命令を發し、且つ並錨の鏈と共に、大錨の鏈を弛めて、聊か長く結び付けしめけり。此時や風濤の暴威實に甚しく、海に慣熟したる水夫等すら、恐怖戦慄の色を面に表はし。勇悍なる船長を以てして猶、其船室の出入りに蕭々として私語する言に「神様よ吾等を救ひ給へ、余等は將さに海底の藻屑とならんとす、救ひ給へ」と念ずるを聽くこそ哀れなれ。斯かる急場の混亂に、余は只貌然船尾の一室に閉籠るのみ、爲す所を知らず、當時余が心情の如何は今將た記述すること能はざるなり。余が數日前大荒の時に際して、神に誓ひたる懺悔、祈願を故なく破りたるを、今又之を繰り返すも正しき業にあらず。唯今回の艱苦も、前回の端なく溺死を免かれたりしと同じく、終に何事もなくして濟むべしと、强て慰め居けるが。圖らずも船長の私語を聞きては、今更らに怖ろしくて堪ゆべからず。先づ部屋を出でゝ海面を見渡すに、果して激浪怒濤山の如く、三四分時間

毎に襲ひ來りて、其凄ましき樣言はん方なく、滿目悲哀の種ならざるはなし。現に吾等の船に近く投錨したる二隻の充分荷積たる船は、風濤の爲めに檣梔を折られ、又吾等の前き一里程の場所に碇したる一艘の船は、無慘にも沈沒したりと叫び傳へらる。此他の二船も錨其用をなさずして、碇泊所より冲合に吹き流され、帆は破れ、檣は折れて大危險の地位に陷り。又かの積荷少なき輕船は總して航海に安樂なるが如く、斯かる際に於ても概ね安全なりしが、其中二三艘は端なく吹き流されて余等が船に接着し、尋て風のまに〳〵流れ走れり。斯かりし間に日も漸く暮れ、風益々切りなれば、水夫及び水夫長は船長に向て、斷然前檣を切り棄てんとを願ひけるが、船長は兎角之を喜はず。然れども斯くするにあらざれば、船は覆沒するの外なしと論ずる水夫長の言に、餘義なく承諾せられ、人々は先づ前檣を切り去りぬ。前檣は既に切り去られたれば、風は直接に大梔に當り、自然に弛みを生じて、船躰の動搖殊に甚しく、是をも亦切斷するの已むを得ざるに至り、終に甲板上に一本の梔なきに立至りしぞ是非もなき。

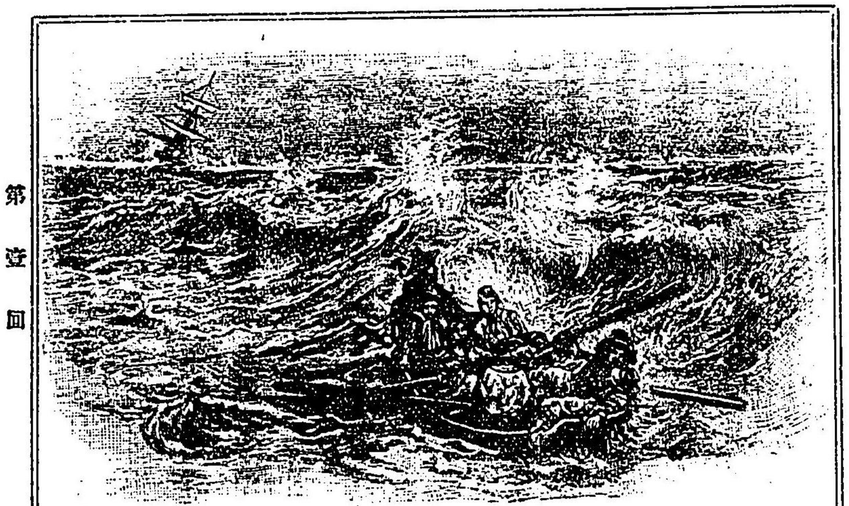
何人も、一少年水夫たり且つは僅かに數日前之と同一なる恐怖に惱みたる余が、此時如何なる有樣なりしかは容易に察知せらるべし。若し余にして前後幾千日を經ざるに、曾て一度破りたる誓を再び繰返し、復た歸家の決心を發せりと言はば、神を愚にするの甚しきものにして、寧ろ死亡其物より十倍

の恐あり。而して此恐懼心は、余をして一言、喫驚の摸樣を說くと能はざるの地位に陷らしめたり。然れども此時は海上猶未だ最惡の度に達せずして、水夫等は只是より惡しき風波に出逢ひたるとなしと言ひたるのみ。尤も余等の船は堅固なるものなりしが、積荷多き爲め、船底深く海水に浸り、水夫等は時々難破すべしと叫破したる程なりき。玆に余の利益なりしは、難破とふ言の、何の意味なるやを知らざりしと是なり。故を以て余は難破すべしと云はるゝも、後に至りて之を聞き知る迄は、何等の危懼を感せざりき。さりながら海風益々暴れ來り、余は船長水夫等が頻りに神に祈り、船の沈沒は今か〳〵と侍設くるの樣を見、更らに夜半の頃に至て、周章てゝ船底に一の裂口を生ぜりと叫ぶものあるを聞き、次で他の一人は侵入したる海水、深さ既に四尺に達せりと叫びたれば、すわとて皆々ポンプを取るべしと命ぜられたり。之を聞きたる余は、早や既に生きたる心地なく、嗒と余が部屋の寢臺の側に倒れたり、去りながら人々は爰に來て余を引起し、且つ告ぐる樣、今迄は何事をも善く爲し能はざる余と雖、ポンプは他人と同く使用し得ん、速に來て働くべしとの言に、余も飛起きてポンプの場所に到り、熱心に働きつゝありし間に、船長は二三艘の積荷輕き、石炭船とも覺しきものが、風波を蹴破ぶるには力足らずして、風のまゝに吹き流され余等の船に近つくを見て、銃砲を放ち之に向て救助を求めよと命ぜり。余は斯かる場合に、銃砲を放つの何の意味たるを知らざれば、輕卒

にも船の破れたるに因ると思考し、否らざれば、何か恐るべき事の起りたるに因るものならんと速了し、一聰魂消して打倒れ、少時氣絕してけり。此時や人々皆自己の生命に關して顧慮する際なりければ、誰一人余を介抱し呉るゝものもなく、或は余が如何になりしやを注意し呉るゝものなかりしが、偶々ポンプの場所に行く人あり、余の臥し居るを見て、死したるものと思ひたるか、足もて片隅に推除けたり。而して余は是より多時を經て、漸くに蘇りたりしなり。

余等は力を盡して働きたれとも、海水は次第に船艙に增加して、船の沈沒到底免かるべからざるが如し。此時風は稍々減したれとも、猶船は何れかの港に漕き付く迄、浮ひ得べしと思はれず。左れば船長は斷へず發砲して救助を求めしが、幸に積荷輕き一艘の船、余等の前を通り掛りて、敢て余等を助けんが爲めに、一葉の短艇を遣はしたり。然れとも小舟は、余等の船に接近すると頗ふる困難にして、從て余等は之に乘り移ると能はず、遂に救助船の人々は、余等の生命を救はんが爲めに、彼等の生命の危險を侵して、熱心に漕き來り。余等は亦浮標を附したる纜を、船尾より投け懸け、彼等をして之を取らしめ、船尾の欄柱に結ひ付けて、以て短艇を引き寄せ、皆々漸く之に打乘りたり。既に短艇に乘り移りたる余等を始め、救助の爲めに來りたる人々も、更らに救助の本船に漕き付けんと欲する者なく、皆此小舟を海岸に漕き寄せんと一致し。余等の船長は亦爲めに救助の人々に約すらく、若

し此短艇の海岸に於て破損するが如きとあらば、彼等の船長に相當の償を與へん、とて彼等の心を安んし。斯くて或は漕き、或は帆の力によりて北方に走り、遠くウヰンタートン、チッスの海岸の方に漕附けたり。是より先き、余等が船を棄て去りて、僅かに十五分時計り經ると覺しき頃、墓なくも余等の船は海底に沈み、余は始めて所謂船の難破とは、如何なる事なるかを事實に了解したり。然れとも余は水夫等が、船の將さに沈没せんとする旨を告けたる時は、眼を擧けて之を注視すると能はさりき、蓋し水夫共が前きに余を救助船に乘移らしめ呉れたる時より、余は只管驚愕、恐怖、後悔の爲めに、心は其儘身躰の中に死し居たるか故なり。斯の間に於て水夫等は切りに櫂を勞して短艇を岸に達するに力め、漸く舟の高波に乘りたるときに、ちらりと海岸を認むるを得るに至れり、濱邊には亦多くの人集まりて余等の舟が到着したらは、助力を與へんと待構ふるを見たりき。然れとも余等の舟は風の爲めに遮られて行くと遲く、ウヰンタートンの燈明臺の邊り、山の蔭になりて、聊か風威を殺くに至る迄は、海岸に到ると容易の業にあらさりしか、遂に此邊に漕付けて多くの困難を經たりしものゝ、先つ安全に海岸に上るを得たり。依て余等は陸路ヤルマウスに向て徒歩し、該市に赴けば、市民は手厚き親切を以て不幸なる余等を遇し、市の吏員も亦余等を以て尋常ならざる商人、及び船の持主として、善良なる避難所を供與し、且つ倫敦なり、ヒユルなり、行かんと欲する所に赴くたけの旅



費を惠まれたり。

是時に方り余若しヒユルに戻り家に歸るの心を起したらば、一身の幸福なりしなるへく。且つ余が乘り込たる船のヤルマウス碇泊所に難破したるとは、兼て父の傳聞する所となり、而かも余が溺死を免れたる事は長く知れさりければ、余が當時の歸家は、一方ならず父を喜ばしめたるべかりしに。如何なる惡魔の誘引か、余は頑固にも依然船に生活するの決心をなし、時に中心の理性より警醒を受、家に歸れとの正當なる判斷を得るとありしも、猶余は斯く決心すると能はさりき。元來余は何物が果して余に斯る思想を起さしむるを知らず、且つ余は余等を危險に陷らしめ、而かも余等は開ける眼を以て知らすと之に投するは、天の秘密なる規約なりと論ずるものにあらずと雖、天の爲せる禍は到底避くる能はざるものなれば、寧ろ退却的思案を抛却して、突進するに如かさるを認めたりしなり。

嘗て余を勵まして船中の苦艱を慰めし彼れ船長の子息たる余が友は、今や余よりも却て臆病者となれり。ヤーマウス市に歸着したる以來、避難所を殊にしたれば、二三日間は會談するとなかりしも、一日彼等を訪ひたる折には、其言葉の氣勢早や既に前日に殊なるものあり。彼は如何にも悲歎の面色を現はして、余の近狀如何を問ひなどし顧みて余が名を其父に告げ、余は更に遠洋に航するが爲め、今回は單に試驗的航海をなすものなるを告げれば、彼の父は肅然心配相の音調を以て余に諭して云ふ樣、

少年よ、汝は決して又と再び海に行くべからず、此度の危難こそ汝が宜しく船人となるべからざるの明かなる徵候なりと思ふべけれ。之を聽て、余は何故に貴下は然か曰給ふか、貴下も最早再び海に行かざる御決心乎と詰りたれば。そは別問題なり、航海は吾が職業にして亦吾が義務なれば廢すべからず、然れども汝は試驗的の初度の航海に於て早や既に、天意の如何に汝の希望に反するを知れり。依て見るときは今回の遭難も、或は汝が吾船に在るによるものにして、宛も彼のヨナがタルシスの船に於ると同一般なるも亦未だ知るべからず。請ひ問ふ抑も汝は如何なる身分のものなるか、將た汝は如何なる故を以て海には乘出せしかと曰ひぬ。是に於て余は身の上話しの大躰を說示しければ、彼は俄に一種の惡感情を生したるものゝ如く、叫んで曰く嗚呼吾過てり、斯かる不幸者を吾が船に乘せたりしは、汚らはしきとなりき。千磅を貰ふも汝か如きものと、再度同船するを好まずと。是れ實に彼が難船の爲めに受けたる損失の殘念さに攪き亂されたる精神の錯亂よりて發出せし言葉にして、平常の言語とも思はれず。然れども彼は此後如何にも余につれなくして、只管歸家の得策なるを勸告し、神意に叛ひて徒らに一身の零落を求むるの愚なるを戒しむるのみ。且つ曰く少年よ、若し汝が家に歸らずは、何地に行くも非運失望に逢はんのみ、汝が父の訓戒を實行せざる間は、不幸の外何物にも逢ふとなかるべし、再思して可なりと。余はろく〳〵の答もなさゝりければ、間もなく相別れ、其後再び彼を見たるともなく、又彼は何方へ行きしやも知らざりき。唯余は今懷中に多少の貨幣を有したれば、先つ陸路倫敦府指して出立したりしが、陸上に於ても海上に於けるが如く、多くの困難に出會ひ、生活の途那方に出つべきを知らず。寧ろ家に歸らんか、將た海に出て、再び運命を試みん乎。

第貳回

商業航海の成功。第三航海の難船。神の祟り。海賊に捕はる。逃走。

家に歸るは好けれとも恥辱を如何せん、近所合壁の隣人共に嘲笑せられんと必せり、左れば何の顏ありて父母を始め其他の人々に見んや、歸らざるに如かざるなり。然れども亦熟々考ふるに人間の常識、殊に少年の常識は、不完全不慧敏のものにして、斯る場合に一身を處するの明を欠き、罪過を犯

すを恥ちすして、却て之を悔ゆるを恥ち、愚なる行をなすを恥ちすして、却て之を改めて賢人となるを恥つるを常とす、然らば則ち寧しろ家に歸るを最上の得策となす乎。など種々に想ひ煩ひて暫し意の決する所を知らず、身を處するの途を知らざりしが、兎角家に歸るの一事に對しては、打ち勝つ可らざる反對、心の中に存續して消すべからず。彼是する間に、船中遭難の苦き記憶も次第に薄らき、從て歸家の情も亦次第に消滅し、遂に全く家に歸るの考を拋ちて、再ひ航海に熱心するに至りしぞ愚なりける。蓋し最初余をして父の家を脱走せしめたる悪き了見、則ち外に出て〻一身の富榮を攫まんとの未熟粗放なる思想に余を早まらしめ、父の勸戒懇請命令に背きて、敢て余を空想虚望の事業に推附けたる悪き了見は、今又余を最も不幸なる淵に沈めんとするなり。余はふと亞弗利加行の船、則ち俗に所謂ギヂア行の船に乘込むととなりたるなり。

此航海に於て余の最も不幸とする所は、自ら水夫として乘込まざりしと是なり、水夫たらば他の航海よりも此度は多少骨折り多かるへきも、同時に余は前梔番長の職務を習ひ、好し船長となる能はざるも、他日副船長たるの資格を得べかりしに。愁に懐中多少の金あり、肩に美服を懸けたれば、余は常に紳士振りて船に在り。遂に船に關する何等の事務をも習はず、又何等の職務をも執らさりしぞ遺憾なる。是より先き余か倫敦に滞留するや、不思議にも、斯かる大都會に於て、余の如き年若き者に有

り勝ちなる悪友の誘惑に罹らずして稍々良き友の仲間入をなし。初めて先年ギヂアに航行したりし一船長と知り合ひしが、此人嘗て該所に於て大利益を得、今復た再度の航行を爲さんとする所なりき。此船長は頗ふる余が快活なる談話を好み、且つ余が世界回覽の希望を抱くと聞き、余に告くるに、若し余が彼と同行すへくんば、航行に一錨半錢の失費を要せざる旨を以てし、其資格も亦彼れ船長の同輩として待遇せらるへく。又若し余が或る商品を持ち行かば、運賃其他の失費を要せずして、利益丸取りなるべく、其中に該所に於て又別に旨き事もあらんと云はれたれば。余も其氣になりて同行を約し、益々此正實にして質朴なる船長と親密の間柄となれり。依て余は彼の勸めに任せ、金四十磅を投して小見の手遊品及小間物類を仕入れ、以て船中に乘込みたるが、此金四十磅は余が常々消息を絶たざる親戚より得たるものにして、該親戚は多分余が父若くは母より請求して送付したるものならんと思はるゝなり。そは兎まれ、此航海は余か凡ての冒險事業中、成功したりと稱し得へき唯一の航海にして、一に余が友なる船長の義氣と、正實の德に歸せずんばあらず。加之ならず余は亦彼に依りて算數及航海法の充分なる智識を得、航海會計の處理方、航路視察の方法を學びたるなど、畧言すれば航海者の知るとを要する事は、概ね今回の航行に於て學び得たりしなり。是れ船長は余に敎ゆるを樂み、余は學ぶを樂みたるの結果にして、此航海は余をして水夫たるの智識を得せしめたると同時

に、又商人たるの智識を得せしめたるものなり。見よ余は蹄航の折、投機的に沙金五封九オンスを買入れ、之を倫敦に賣捌きたるに、殆んど金三百磅となりて余が手に戻れり。抑も此意外の利益は余が心を勵まして益々海洋に向はしめ、而して此心こそ遂に全く余を零落の中に陷らしめたるものなれ。

斯く此航海は多くの利益を余に與へたりしと雖、猶余は數多の不幸に遭遇するを免れさりき、就中氣候の酷熱は激烈なる熱病を生し、余は斷へず之が爲めに惱みぬ、蓋し主たる貿易場は北緯十五度の沿岸に在るを以て、是れ亦避くべからざる事に屬するなり。

余は今一のギチア貿易商となれり、此に至て余が爲めに最大不幸の生したりと云ふは、余が友なる船長の歸來、間もなく死亡したる事是れなり。然れども余は再度ギチア行をなすに決し、幸ひ前航に於て副船長たりし一人の知人、代て船長の職位に就きたれば、余も共に前と同一の船に乘込みたり。抑も此回の航海は世に最も不幸なる航行にして、好し余は曩に一攫したる利益金の中、一百磅を持參し、殘餘の金二百磅は、余の友なる船長の寡婦に預け置きたれども、猶余は恐るべき不幸の毒手に懼れり。

其事實は余等の船がカナリ群島と、亞弗利加海岸との間に航行する頃、一日拂曉サリー港邊より來れる一隊の土耳其海賊に襲はれたること是なり。彼等は帆を充分に張りて切りに尾擊するが如くなれば、余等も亦有らん限の帆を張りて走りたれとも、海賊等は刻々余等の船に近き、二三時間の内に追

付かれんず模樣なれば。茲に余等も意を決して戰鬪の用意をなし、現に余等の船中には十八名の剛の者あり、且つ備付の十二挺の小銃もあれば、寧ろ斯くは用意したるなり。其日午后三時頃、彼等海賊は愈々余等に追付き、船尾より聯て入らんの心組なるが如くなりしも、誤て横桁に接着したれば、余等は手早く八挺の小銃を取て賊船の横側を射擊せり。彼等も流石に堪へ得ずやありけん、余等に報ひ擊つ所ありて、一先づ離れ去り、更らに船中の賊徒凡そ二百名銃先を齊へて擊て掛れり。然れども余等は一所に群集せしに拘らず、一人も殺傷せられたるものなし。依て彼等は再度射擊の準備をなし、余等は亦只管防禦の準備をなせり。然るに彼等は間もなく余等が船の一方を打破ぶりて、六十餘名ペラ〳〵と推し入り、先づ急ぎ帆及び纜を切斷したりければ、余等も必死となりて散彈、手槍、船用火藥等を以て拒き戰ひ、遂に能く再び賊徒を擊拂ふを得たりき。然れども余等の船は既に帆なく、纜なく、進退自在ならさる上に、殺されたるもの三名あり、傷けられたるもの八名ありければ、一同降伏するの已むを得ざるに至り。遂に皆々俘虜となりて、黑人國の一港サリーに連れ行かれぬ。

初め余は海賊等の家に到らは、恐るへき待遇を受くへしと想像したりしが、實際は然らずして想ふ程にはあらさりき。又余は他の人々の如く、内地に於ける帝王の廷に引き附らるゝことなく、只賊船の船長の家に在りて其奴隷となり、彼の爲めに年少穎敏なる小童、使事に便なりとて、專ら其使役に供

せられたり。斯くて余が身分の驚くべき變化は、深く余が心を壓屈し、今や復た坐ろに父が往きの日の豫言的訓諭を想ひ出せり。父は余が可憐の身分となるも、一人として助くるものなきに至るべしと云ひたるは、實に今の境遇に適切にして、余は贖金を出さゝれは、自由の身となると能はざる、世に最惡運のものとなれりと思考し、非運は一ならざるも今や其極度に陷りぬと信じたるなり。然るに何んぞ斗らん、是れ唯後日に到來すべき艱苦辛酸の試味に過ぎさらんとは。

余が新主人たる賊魁に拉られて其家に赴きたる時、余は彼か他日海に出つる折は、余をも携ふるなるべく、而して何時か一度は西班牙軍艦、若くは葡萄牙軍艦の捕ふる所となるは、彼か命運なるべければ、其時こそ余も自由の身となるべけれと、覺束なくも望を屬したりしが。爾後彼れ賊魁の海に出つるときは更に余を連行かず、只家に在りて其小庭園の番丁となし、徒らに奴隷の賤役に服せしむるのみ。又其歸り來るときは、余を船番として船内に起臥せしむるのみなりければ、余の最初の希望も今は水の泡と消へ去りぬ。猶余は日夜脱走の外何事をも思考せず、如何なる方法によりて首尾よく逃走せんかを思案するのみなりしも、兎角其機會を得ざりしのみならず、此企を實行する手段すら見出すと能はざりき。其故は船に番するものは、余のみにして外に仲間の一奴隷もなく、英吉利人、愛蘭人、

蘇格蘭人なとは一人もあらねば、相通して事を計るに由なく、唯在るものは賊徒等のみなれば。余は二年の歳月間、空しく想像に耽りしのみにして、實際逃去の望を遂くるの機會を見出すこと能はざりし。然るに凡そ二年を經過したる後、復び余が逃走の蓋希望を復活せしめたる奇妙の事情こそ起つたれ。そは余の主人たる賊魁が金の欠乏の爲め、常よりも長く船を出さすして、家に歸休し居り、退屈なればとて、一週に一二回乃至三回宛、好き日和に乘して小舟に乘り、釣を垂るゝを樂とせしが。其度毎に余と年若きマレスコとを其舟手となし、余等も亦彼を樂ましむるに力め、特に余は魚を捕ふるに巧みなる技倆を示したれば、彼の喜び一方ならず、時々其親戚の一人なる黒奴某及びマレスコとをして、余と共に彼の爲め魚捕に出すともありき。或る日天氣の穩なる朝、余等は例の如く遊漁に出たるに、海上霧深ふして前後を分たず、海岸を去ると僅かに半海里なりしに拘はらず早や既に之を見ず。是に於て余等一同出づべき途を知らずして、其日終日、其夜終夜、無暗に漕ぎ回り、翌朝に及んで漸く余等の、海岸に漕ぎ歸らずして却て外海に漕ぎ往きつゝあるを覺り、現に少くとも海岸より二海里の距離に在るを知れり。依て辛ふして舟を漕ぎ戻すに、穴惡く此日は朝より風さへ吹き暴たれば、余等は多少の危險、多くの勞苦を侵し、且つ皆々甚しく飢渴に苦みたり。

之に懲て我主人は後來其身の爲めに、一層の注意をなすに決し、以來は羅針盤と多少の糧食とを備

へずしては、釣に出でざるとなし。且つ其船大工なる一人の英奴に命じて、嘗て余等より掠奪したる英國船附屬の大脚艇の中央に、遊船の室の如き小なる寢室と、艇の方向を指揮する場所と、帆索を上下する場所、及び帆掛りの坐する室とを造らしめたり。而して此舟は所謂三角帆を用ゐ、帆桁を寢室の上に懸け、又其寢室の中には食卓一脚を置き、傍らに二三の小棚ありて酒類、麵包、米、珈琲を置く所となせり。既にして船は出來上りたれは余等は數々此舟もて捕漁に出遊ひ、而して余最も魚を捕ふるに妙なるが故、主人は決して余を伴はずして出てたることなかりし。或る日彼は此地に有名なる二三の黒人を招して、捕漁の樂をなさんと欲し、乃ち此舟に乗して出漁するに決定したり。依て爲めに盛んに待遇の準備をなし、常よりも多くの食料品を積込みて、夜もすから種々の趣向に忙はしく、彼は又捕魚の間に捕鳥の娯樂をなさんとて、三挺の小銃と之に要する彈丸、火藥の用意を余に命ぜられたり。余は事毎に命の如く用意を整ひ、又旗を掲げ裝飾物を排列して、舟の掃除をも終り、客待ちの仕度殘る隈もなくしをわりて。さて翌朝を待ちしに、明くれば早朝主人のみ急ぎ舟に乗りて、客人は今日他に餘義なき用事ありて、來遊を辭したれば、汝は常の如く、黒奴一人と少年一人とを伴ひて、舟を出し魚を捕へ來るべし、尤も客人は今夕我が家に於て、晩餐の饗應を受くる筈なれば、汝魚を捕へて成るべく早く家に持歸るべしと命ずるを、余は一々に敬承し、而して此時余は竊かに亡命の

宿志を再發せり。幸ひ此度は一舟の命令役を命ぜられたると最も好き潮合なり、即ち主人の舟を立去るや余は捕魚の用意を打棄てゝ、先づ航海の身仕度をなし、海の那方へ行けば何地に着するを知らざれとも、兎に角賊魁の手を脱するが余の希願なれば、心私かに好運を祝したりけり。

余は先づ等一に同行の黒奴を欺き騙りて、若干の食糧品を得んと欲し。何氣なく、余等は嘗て主人の爲めに供したる此舟中の食物を食するは宜しかるまじと思ふが如何に、と談りたれば、彼は至極尤なりと答へて、乾麵包を入れある一の大なる籠と、清き飲料水を入れたる三本の德利を持ち來れり。余は亦主人が壜箱の在る所を知り居る故、同行の黒奴が陸上へ行きたる留守中、竊かに之を舟中に持ち來りて、宛かも昨日主人の爲めに供ひ置きたるものゝ如く見せ懸け。又別に五十匁計りなる密臘付の大ランプ一個と、綯索、絲とを入れある包一個と斧、鋸、槌各一挺を携へ來れり。皆是れ余等の爲めに必要なる品にして、特に蠟燭は明を取るに欠くべからざる要具なり。余は又モイレー（同行の黒奴）が本船の鐵砲方なるを知るが故に、騙して云ふモイレーよ、主人の小銃は備へて此舟に在り、汝は少計りの火藥と彈丸とを得る途はなきか、若し之れ有らば余等の食用の爲め、海上に鵠を捕獲し得べし。モイレーは事の企を知らざれば、無邪氣に「然り余は少計り持ち來るべし」と答へて早速火藥一封半餘を入れある大なる革囊と、銃丸五六封の外に若干の散彈を藏する他の一の革囊を持ち來りて舟中

に置けり。同時に余は亦舟の部屋の内に主人の火藥若干封を發見したれば、之を前きに運び込みたる大壜の中に入れ、壜の中にありしものは、他の壜に入れ替へて、萬事の準備全く整ひ、余等は帆を揚けて港を出てたり。港の入口には見張の堡塞ありたれども、番人は善く余等を知るを以て、毫も怪み問ふとなかりき。斯くて余等は港を距ること一英里ばかりの所に到り、帆を引卸して釣魚に着手したりしが、此時風は北東より吹き來りて余が望の如くならず。若し南方に吹かば、余は慥かに西班牙の海岸に着し得べく、少くともカヂズの灣に達するを得るものを、此風にては仕損じたりと想ひしが、まゝよ風は那方に吹くにもせよ、余が決心は此恐ろしき場所を免るゝにあれば漁には心入らず、暫しの間絲を垂れしも魚一尾も上らず。或は余が鉤に付くことあるも之を引上げず、反て傍らの黑奴に魚の懸りしを覺られさらんが爲め、此所は到底駄目なり、斯ては主人の用にも立たぬ事、寧ろ今少し遠く出て試みさるべからず、貴公は如何に思ふやと云ふ。黑奴は何氣なく一致し、舟の首に赴きて帆を揚げたり、余は舵を司どるを以て急に舟を進行せしめて、凡そ一海里程沖合に走り、茲に至て宛かも漁する爲めの如く舟を止め。余は舵を同舟の少年に司らしめて黑奴モイレーの傍に行き、何事をか彼の後に爲すまねしながら、突然其腰部を推して彼の驚愕するをも顧みず、力を極めて海中に突き落したり。突き落されて海水に沒したるモイレーは、流石に塞子の如き泳きの名人なれば、間もなく浮き上りて聲を限りに余を呼び、何くの國までも余に從ひ行くべければ、救ひ上げ呉れよと歎きぬ。時に風至て弱く、舟の進行遲緩なりければ、泳ぎに強き彼は、舟を追ふて速かに余に到達せん摸樣なるを以て、余は舟部屋にある鳥銃を引き寄せて彼に示し、強て舟を追はゝ發射すべしと脅かし。且つ告ぐるに、海も靜なれは汝が力能く海岸に泳ぎ着くを得ん、宜しく力を極めて海岸に向へ、余は敢て害を汝に加へざるべし。然れども若し汝余が舟に近かば余は汝の頭を碎ち透さん、余は今や自由の身となるに決したるなりと云ひたりければ、彼は身を轉じて海岸の方に向て泳ぎ行きけり。思ふに彼は熟練なる游泳者なれば、容易に彼岸に達したるなるべし。

第三回

逃走中の冒險奇談。獅子及び豹の捕獲。海岸に野蠻人を見る。

余は既に黑奴を追放てり、次に殘れる一人の少年をも溺死せしめば安心なるべしと思ひたりしも、未だ彼が爾來余に忠實なるべきや否やを試みずして、計此に出づるは無慘の至りなれば。顧みて少年を呼びヂュリー(少年の名)よ、汝若し余に忠實なるならば、余は汝を助けてエラキ人となさん、然れども若し汝余に信實なるべき旨を神父に誓はずんば、余は又汝を海中に投ずべしと云ひたるに、彼は孤

笑を呈して最も無邪氣に答ふる樣、飽迄も君に忠實なるべく、明かに之を神に誓はん、而して君に從て何くの處までも行かんと。依てジュリーと共に余は未だ泳きつゝある黑奴の見ゆる間に風の方向に從て帆を揚げ舟を發したり。是れ實は黑奴等をして余が海峽の方に向ひたるべしと思料せしめ、果して南方に走らば蠻民國の海岸に漂着すべく、終に該地の黑人種の爲めに取圍まれて打殺され、若くは猛獸の嗜殺す所となりて、到底海岸に上る能はざるべしと、思料せしむる臨機の策略なりしのみ。

故に暮色漸く暗きや否や、余は方針を變じて少しく途を東方に轉じ、直に東南に向て走りしが、幸ひ都合好き海風吹き來りて、而かも海波滑かなりければ、翌日午後三時余が始めて陸地を認めし頃は、既にサリー港より南の方百五十英里計りも走れりと思ひぬ。陸地には一人の人とて見へざりしも、此處は全くモロッコ王若くは其附近の王の領域以外なりと見えたり。然れども余は黑人等の捕らる所となりて、復び彼等の手に落ちんとを深く恐れて、敢て舟を止めず、錨を下さず、或は海岸に上陸せざりき。風は相變らず快くて、余は其儘五日間進行したりしが、是に至りて風位漸く南に變じ、且つかの海賊等の船若し余を追索するも、最早及ばざるべしと信じたれば、海岸を求めて暫時休泊することに決し、とある小河の河口に錨を投ぜり。然れども余は此所の何地なるを知らず、幾何の緯度に當れるを知らず、如何なる國、如何なる國民、若くは今碇泊する河は何河なるをも知らざるなり。余は素

より此に或る人民を見ず、又見るを望まざりしが、唯切に飲料水を要するが故に、余等は薄暮浦邊に到り、夜に入らば岸に泳ぎ着きて、以て國の有樣を視察せんと決しぬ。然るに夜色全く暗黑となるに及んで、如何なる種類の猛獸なるかを知らざれども、咆哮の聲凄ましく聞へければ、少年は息絶へんばかりに恐れ怖ひ、余に向て翌日迄岸に登る事の猶豫をと切望したりけり。余云ふジュリーよ、好し、然らば余は行かざるべし、然れども畫に至らば、彼の獅子の如く猛獰なる人間を見るとなきを保せずと、ジュリー云ふ樣、然る時は余等は彼等を射斃すべし、直ちに逃げ去らんのみとて打笑へり、余は頗ふる此小童の快活なるを喜び、爲めに一壜の燒酎(賊魁の壜箱より)を取出して共に愉快を買ひたりけり。而してジュリーの諫言は一理なきにあらざれば、余は之を採用し、其夜は錨を卸して靜かに休泊したり。然れども終夜眠らずしてありしに、朝の二三時と覺しき頃、名も知らざる多くの種々の大なる動物、岸邊に下り來りて海水に飛ひ入り、冷浴して樂しむものゝ如く、時々余が未だ曾て聞きしとなき最と恐ろしき咆哮をなしぬ。ジュリーは云ふまでもなく大に怖れ、余も亦實に大に恐れたり。余等は此等の猛獸が舟に向て泳き來る物音を聞きては、一層恐ろしくて耐ゆべからず。尤も實地其形躰を見されば、正確に知る能はざるも、其鼻息を聞くに非常に大なる猛獸と推せられたり。ジュリーは個は獅子なりと言ひ、余も亦然るべしと想へり。ジュリー云ふ速かに錨を拔て此所を漕去らんと、

然れども余は否ヲユリーよ、まさかの時は錨索に浮標を附して切り放ち、冲合に走らば、獸類如何でか余等に及ばん、漫りに立躁くべからずと戒しむる言葉未だ終らざるに、猛獸は早や櫂も屆かんばかりに近づきたれば、余は驚きながら急に小銃を取て發射したるに、猛獸は直ちに振り返りて再び岸邊へ泳ぎ去れり。左れども余等の恐怖は猶去らず、今余が此等猛獸の曾て聞きたることもなき銃の音を發したれば、岸邊にあるものも、陸上にあるものも、皆怪み哮へて其聲の凄ましき事云ふ計りなし。是に至て余は益々夜中海岸に登るの不可なるを察し、又晝間陸に上るの頗ふる考物なるを感せり。蓋し蠻民の手に落つるは猶獅子、若くは虎の手に落つると同く危險の極にして、晝間も夜間も、危險の度を異にせざるべけれはなり。

遮莫余等は舟中既に一合の飲料水をも餘さゞれば、之を得る爲め、一度は是非海岸に登らざるへからす。唯此に考ふへきは何くの岸に登り、及び何時登るべきかの問題是のみ、ヲユリーは云ふ、若し余が一本の徳利を與へて彼を岸に登らしめ、而て岸上實に水あらば、余の爲めに若干を持ち來らんと、余は試に彼を詰りて、何故に汝のみ行かんとするか、何故に余をして行かしめ、汝は舟に止まらさるかと云ひしに、可憐なる此少年は以後益々余をして彼を愛せしむる底の答をなしぬ。曰く蠻民若し來らば彼等は余を食はん、君は逃れ去るべしと。余云ふ然らば二人して行かん、蠻民來らば之を打殺さんのみ、彼等の食ふ所となるの憂あらすとて。余は先づ乾麵包と燒酎とをヲユリーに與へ、之を飲食せしめたる後、さて夜の明くるを待て舟を適當と思ふ邊に漕き着け、手に二本の徳利を拽て岸に登れり。然れとも余は野蠻人が獨木舟に乘りて河を下り來るを恐るゝが故に、敢て我舟の見へずなるまで遠くは行かじ。唯りヲユリーのみは一英里程先きに低き塲所あるを見て、逍遥し行きしが、何事ぞ余は彼が急ぎ歸り來るを認めぬ。彼は野蠻人に追はれしか、或は猛獸に驚きしか、何は兎まれ余は彼を救はんが爲め馳せ行きしに、漸く近づけば何物か其肩に懸れる如し、個は彼が撃ち取りし動物にして、色は殊り脛は少し長けれども形は兎に似たるものなりき。相見て大に相喜び、其肉も亦甚だ上等なれば、余等の喜悦一方ならざりしに加へて、ヲユリーは又該所に一の蠻人なく、而して好良なる水は充分に之れ有りしとを告げゝり、余等の喜知るべきなり。且つ余等は後に至て、舟を泊せる河口の少し上に清水ありて、潮退くときは充分に飲料水を得べきを知り、行て敷本の徳利に水を盛り貯へ、又捕獲したる兎を料理して之を食ひ、さて陸上に人の足跡なきを奇貨として、内地遊歩の用意をなせり。

熟ら考ふれば余は嘗て一度此海岸を航行したるとありき、さればカナリー群島もケープ、ド、ウベルド島も、此處より程遠からぬを善く知れり。然れども余は測量機を有せざりしかば、何緯度に當るやを知らず、又記憶せざるを以て、何れの方向に於て此等の群島を見得べきや、將た此等の群島に近づく

には幾許の日子を要するやを知るに由なし。余にして若し測量機を有すば容易に此等の島を發見すべかりしに、其之なきは殘忍なるとなうけり。猶余が希望は若し此海岸に沿ふて遠く浮び、以て英人の貿易の場所の邊に到らば、或は其商船に救ひ上げらるゝ機會もあらん事なりしが。遂に千思萬考の末余が今在る所は、モロッコ王の領地とニグロー國との間に横はる一國にして、猛獸の外棲むものもなき荒地なるを覺りぬ。蓋しニグロー種族は、ムールと稱する黑人種の攻伐を恐れて南の方に移り、ムール種族は亦此處を住むの價値なしとて打棄てたるが抑も此國の荒れたる所以なるべし。斯く兩種族は此地を棄てゝ顧みざれば、虎、獅子、豹其他種々の猛獸のみ所得顏に逍遙し、而してムール種族は單に此地を獵場に用ゐ、時としては二三千人一隊となりて出獵することありと云ふ。實に余等は沿岸一百里の間、盡は荒漠たる不毛の地の外何物をも見ず、夜は猛獸咆哮の聲の外何物をも聞ざりしなり。

斯くて舟を進めて行き行くまゝに、余は一二回、カナリー島に於けるテテリヒ山の最高峯たるピコ嶽と思はしき高山を認めければ、之に達せんが爲め敢て舟を外海に出さんと欲したれども、穴惡く風は逆に吹き、波亦高ふして余が小舟の堪ゆる所にあらざれば、二度まで企てゝ、遂に望を果さず、已むなく余は是迄の如く海岸を沿ふて進むに決しぬ。

先きに余等が水を取りたる場所を去りてより、又々飲料水の爲めに、數々上陸せざるべからざるの必

要に迫られ、特に一度の如きは朝早く小高き陸の一小點の下に錨を卸し、潮の滿つるを待ちて猶一層陸地に近づかんとしたりしに、常に余よりも繁く四方に眼を注げるジュリーは聲を竊めて余を呼び、反て岸邊を遠かる可しと告げ、見よ彼處の丘の蔭に恐ろしき怪物の睡りて臥し居るに非ずやと云ふ。依て余はジュリーの指す所を見れば、實に恐ろしき一の怪物あり、そは大なる一頭の獅子にして、海岸の小丘の蔭に横はれるなり。余はジュリーに岸に登りて之を殺せよと命じければ、ジュリーは驚きたる顏色して「余に殺せとな、余は反て一口に喰ひ殺されん」とて戰慄ひぬ。余は乃ち最も大なる銃を取りて充分に火藥を塡め、二個の丸を込めて側に置き、更らに他の銃に二個の散彈を裝藥し、又今一つの銃に五個の小なる散彈を込めさて狙を定めて、腕を鼻の上に置きつゝ眠れる獅子の膝を擊ち、其骨を碎けり、擊たれたる彼は俄かに飛び上り、唸り立てしが。其脛の碎けたるを見て再び仆れ、尋て三本足もて立上り最と凄まじく哮り狂へり。余は射て頭に當てざりしを遺憾に思ひ、直ちに第二の銃を取りて逃げんとする彼を擊ち其頭に當てければ、どつと仆れて、低く唸りつゝもがきて息絶けり。ジュリーは此時初めて我に返りしが、余は彼に命じて岸に上り、斃ちたる獅子を持來れと云ふ、是に於てジュリーは恐る〳〵水中に飛び入り、一手に銃を握り他手もて泳ぎ、動物の側に行きて、更らに一丸を其耳の中に擊ち込み、復た其頭を擊ちて全く之を殺せり。是れ實に余等が珍らしき獲物なりしが、獅子の

肉は食ふべくもあらざれば、余は寧ろ無益に火藥と銃丸とを失ひたるを悔みぬ。併しヲユリーは何かの用に立つべしとて、舟に來りて斧を貸せよと呼ひ請ひぬ。何の爲めにするかと問ふに、獅子の首を斬るなりと答へて、復た岸に登り力を極めて首を斬らんとすれども能はず、纔かに一本の足を切りて持歸るを見れば、如何にも驚くべき大なるものなりき。因て思ふに獅子の皮は何かの用途あるべし、全く無益なるにはあらじ、とて余は能ふべくんば其皮を剝ぎ取るに決せり。乃ちヲユリーと余とは岸に到りて此事に掛りたりしに、余は皮剝ぐ事の方法に暗く、ヲユリーは反て余よりも良き職工なりき。實に余等は皮剝ぐ爲めに其日終日を費やし、纔かに能く之を剝ぎ取り、舟部屋の上に張りて二日間乾し暴せしに、恰好の敷皮となりたれば、其後余は之を坐臥の用に供しぬ。

斯る事の爲めに暫時滯泊したる後。余等は更に引續き十一二日間南方に進行し、萬已むを得ざるにあらざるよりは、水の爲めに岸に登るともせで、只管進みしが、食物漸く乏欠して、得るに所なければ成るべく之を節約したり。余の心組は元來ヘルト岬近傍のガンビア川、若くはセチガル河に到着するにありて、該所に歐羅巴船の救助を得るの望みなりしも、若し不幸にして歐羅巴船に遭はずば其邊の島に上陸して、或は異人種の爲めに殺さるゝも亦是非なしと斷念したり。尤も余はギニア、ブラジル若くは東印度に往來する歐羅巴船は、凡てベルド岬又は其群島邊を通過するを知るが故に多分救助せらるべきを信ずれども、是とても固より確ならず。要するに余は運好ば船に出逢ひ、拙くば死せざるべからずと斷念したりしなり。

斯く凡そ十日間程も斷念の心を續けたりしが、と見れば余が沿ふて帆かけし陸地は人の住みありて、二三の場所に於ては、岸上に立て余等を見るものさへあり。而して其人民は黑條々にして裸躰なる黑人種なるを認めぬ。依て余は一度岸に上らんと欲したりしに、注意深きヲユリーは、行く勿れ行く勿れとて止めけり。然れども余試に此等の人民と談ぜんとて、舟を岸邊近く漕ぎ寄するに、岸上の黑人等は亦舟の行く所に沿ふて走れり。熟視するに彼等の手には一の武器もなし、唯其中の一人は細長き棒樣のものを持ちしが、ヲユリーは個は投鎗にして、彼等は狙を過たず能く遠く物に當ると云へり、依て余は少しく岸を遠ざかり、彼等と手眞似の談話を試み、特に食物を要むる躰を示せしに、彼等は亦手眞似を以て或る肉類を余に與へんと答へき。是に於て余は帆を收め、舟を止めて待ちしに、彼等の中二人急ぎ內地に走り行きて、凡そ三十分時間に歸り來り、干肉二塊と、此地の產物と思はしき穀類とを齎らしたり。余は曾て其何たるを知らざれども、兎に角喜んで之を受くるの心なりしが。茲に一問題なるは受取の方法なり、余は岸に行くを欲せず、彼等亦甚しく余等を恐るゝもの丶如し。依て彼等は彼我共に安全なる一方を案出し、與へんとする食糧を岸上に置きて立去り、余等をして舟中に持運

ばしめたる後、再び近づき來りしぞ最と可憐なる。余等は之を償ふべき物を有せざれば、單に感謝の意を表したり、斯くて彼我の猜忌漸く解けんとしたるに際し、突然彼等を驚殺せる一事こそ起りたれそは余等が岸邊に休泊せる間に、二頭の猛獸相追ふて山より海に向て突進し來りしことなり。是れ蓋し雄雌を逐ふ爲めか、將た遊戯に出づるか、憤激に出づるか、或は又斯かる事は此地の常事なるか、珍事なるか、皆余等の知らざる所なれども、然れども元來此等の猛獸は、夜の外現はれ出づること稀なるべきものなるのみならず、現に土人特に其婦女子等の驚き恐るゝを見れば、此の如きは此地に於ても寧ろ珍事なるか。彼の投鎗を持てる人は泰然として動かざりしも、他のものは凡て逃げ隱れて見へずなりぬ。然るに二頭の猛獸は敢て黒人の一人をも求めんとはせで、直ちに水邊に走り來りて海中に飛び入り、宛かも游戯に來りしものゝ如く、水中を泳ぎ回りて、其内の一頭は遂に余が舟に近づき來れり。余は手早く一挺の銃に裝藥し、猶ヨリに命じて他の二挺にも丸込めし、程近に來るを待て正しく其頭部を射擊したれば、何かは以て堪らん、水中に沈みては復た浮み、苦みもがく躰にて海岸に泳ぎ去らんとせしが、其負たる深創と水の呼吸を塞ぐにや堪えざりけん、將さに岸に達せんとして死んでけり。然るに余が銃の音響と發火とを見て、獵民の驚怖一方ならず、或者は絶倒し、或者は戦慄して生躰なかりしが、今猛獸の斃れて水中に沈めるを見、且つは余が手もて招けるを見て漸くに

生氣付き、濱邊に來りて動物を搜索し始めぬ。余は海水を染むる血痕によりて其在る所を發見し、細を之に結び付けて土人に引かしめければ、彼等は容易に岸邊に引揚げ、其斑點異常に美麗なる珍しき豹なるを見て大に喜び、且つ余が何を以て斯く容易に打殺せしかを勘考し、暫し腕組して感歎したりけり。又今一頭の動物は余が發したる銃火の閃めきと響きとに驚き、岸邊に泳ぎ着き一目散に元と來し山へと逃げ去りぬ。余は隔りて一寸之れを見しのみなれば、遂に其の獸の何なるを知らざりき。と見れば土人は早や、余が斃したる豹の肉を食はんとを欲し、余に向て之れを請ふか如く見ゆれば、余も聊か彼等に對する報酬の熨までに、之を與ふるを喜び、手を以て相圖しけるに、彼等は頗ぶる感謝の躰なりき、斯くて彼等は豹の死骸に寄集り一挺の小刀をも持たざれども、猶其鋭利なる木片もて、余等が小刀を以てするよりも容易に皮を剝ぎ去り、さて其肉の若干斤を余に呈しぬ。然れども余は之を受くるを辭して全く彼等に與ふる由を告げ、其代りに皮を申請けたく通じければ、彼等は速かに承諾し更らに多くの食糧を加へて贈り呉れたり。余は其食糧の何たるを知らざりしも兎に角之を納め且つ多少の飲料水を得ん爲め、一本の德利を取出して之を倒にし空虛なる由を示して、之に水を盛り呉れんとを通ぜしに、彼等は直ちに其友を呼び余が要求を通ずと見る間程なく、二人の婦人土製の大瓶を齎らし、前の如く之を岸に置きければ、余はヨリに德利を携へて彼處に赴き、三本の德利に

充分水を盛らしめたり、彼の婦人は男子と同しく皆裸躰なりき。

今余は穀物と樹の根の如きものを食糧に得、且つ飲料水を貯へたれば、此親切なる黒人に別れて、更らに十一日間舟を進め、遂に凡そ四五海里の距離に於て、長く海中に突出したる陸地を見出せし迄は、復た海岸に登らざりき。此時恰も海上至て靜かなりければ、余は此地に達せんと欲し、遂に陸地より二里許り突出したる海角を回航しけるに、又端なくも他の一方に於て陸地あるを見出せり、慥かに是れ所謂ベルド岬にして、其邊に碁布する群島は遠くの距離に在るを以て、余は此陸地に登るを可とするか、若くは寧しろ彼の群島に向ふを可とするかを決すると能はざりき、何となれば若し一朝風位の變ることあらば、余は陸地に歸ると能はず、又彼の島に達すると能はざるべければなり。此進退困難の場合に於て、余の憂慮極まりなかりければ、舵をヨユリーに取らしめて、暫し舟部屋に默座しけるが、幾許もなくヨユリー不意に高聲揚げて、見よ〳〵我主よ、一隻の帆舞船沖合に見ゆと叫びぬ。而して此少年は彼の賊魁の船、今余等を追跡し到れりと速了し、狂氣となりて驚き恐るゝぞ愚なる、然れども余は既に遙かに落延びたれば、到底賊船の及ばざるを知りしなり、兎に角余は急ぎ舟部屋を飛び出て、見渡すに、成程一隻の船は見へたり、而して個は嬉しや余が待ちに待ちたる葡萄牙の船ならんとは、蓋し此船は黒奴を積みてギニアに行くものならんと思ひしに、熱ら該船の進路を察すれば、

左はなくて他の方向に向ふものゝ如く、海岸に近寄るべくも見へず、依て余は有らん限りの帆を滿張して之を追ひ、能ふへくんば船中の人々と言語を交へんと欲せり。

第四回

船商に助けられてブラヂル國に着す。該國に於て富農となる。

又々冒險航海。又々難船。ロビンソン獨り助かる。

余は力を極めて走りしと雖、到底彼の船の航路に赴き難きのみならず、余が暗號もて救助を求むる旨を通ずるに先ち、彼等は早や過ぎ去るを認めければ、余は更らに充分帆を揚げて疾走し、遂に能く彼等の知る所となりぬ。蓋し彼等は望遠鏡に依て、余の舟を難破したる歐羅巴船に屬する短艇となしたるものゝ如く、帆を縮めて余の漕ぎ着くを待ちたりけり。是に勵まされて余は先づ旗を立てゝ不幸漂流の暗號となし、又哀銃を發して切に彼等の視聽を惹くに力めぬ。後にて聞けば彼等は旗を見しと共に銃の烟をも見しと云ふ、此等の暗號に依て彼等も近寄り來り、余も馳せ行き、凡そ三時間内に彼我相逢着するを得たりき。是に於て彼等は葡萄牙語、西班牙語、及び佛蘭西語を以て、交々余の何物なるかを問はれけれども、余は一も此等の國語を解せざれば、遂に蘇格蘭生れの一水夫來りて應接し呉

れたり。乃ち余は元と英國人なること、嘗てサリーに於けるムール種族の爲めに、捕はれて奴隷となりしこと、今逃走する途なる事等を告げしに、然らば本船に上るべしとて懇切に余を介抱し呉れ、并に余が凡ての品物を引上げ呉れたり。此時の余の歡喜は譬へんに物なく、余は斯くの如くにして、世に不幸絶望なる奴隷の境遇より救ひ出されたるなり。依て余は凡ての所有物を船長に呈贈して、聊か報酬の意を表さんとしたるに、彼の船長は一物をも受取るを肯せずして、優しき言葉を余に與へ、ブラヲルに到着したらば盡く余に引渡し呉れんと云ひぬ。船長曰く余が今汝を救ひたるを喜ぶは、猶余が他船に救はれたるを喜ぶに異ならず、豈に他あらんや、余も亦今後或は汝と同一なる有樣に於て、救助せらるゝことなきを保せず。且つ汝是より、遠く本國より隔りたるブラヲル國に赴くものゝ、余若し汝が所有品一切申請けなば、汝は該地に於て餓死せざるべからざらん、然らば則ち余が今汝に與へたる生命を再び奪ひ去るに均しと。又曰く否々船賃としても決して受領せず、余は單に慈惠の心を以て汝を送るものなり、此品物は到着地に於て、汝が食物を得るの料に充て、將た汝が歸國旅費に充つべしと。彼は其言の情深きが如く、實行に於ても細末の事まで正當なりき。水夫等に命じて品物には誰も手を觸るべからざらしめ、自ら取りて一々に調査し、余が十三本の德利壜まで盡く目錄に記載し、余をして着港の砌に至り、受取に惑はしめざる樣注意し呉れたり。尤も余が小舟は製造頗ふる

上等のものなりしを、船長は見て取り、其本船の備付の用に之を余より買取らんと云ひ、代價幾何なるを尋ねぬ、余は萬端に遜からざる懇情を受けたれば、全く無代價にて讓渡さんと答へしに、彼はそは理なしブラヲルに到らば八十イード（貨幣の名）を拂はん、若し又該地に於て、他に猶多くの代價を供するものあらば、余も亦其代價にて買はんと云ひて、無代價の讓受を肯はず。彼は又余が奴僕たるヲユリーを、六十イードに讓受けたしと申出でしが、余は固く之を辭せり。是れヲユリーを船長に與ふるを好まざるにあらざるも、長途の間親實に余を助けたる可憐の少年を賣るは、余が忍びざる所なればなり。之に依て余は事の由を船長に申し明したるに、彼は余が正實なるを賞し、且つ調和を試みて曰く、彼の少年若し基督教信者とならば、十年後に至て自由の身となさん如何にと。ヲユリーは之を聽きて船長に從ふを欣諾し、余は乃ち彼を船長に與へたり。

余等は海上安全にて其後廿二日間の航行の末、ブラヲル國のチールセンツ灣に到着したり、茲に於て余は初めて最も困難なる不幸の境遇を脱しぬ。さて次に考慮すべき事は如何に身を處すべきかの一問題是なり、余が船長より受けし親切懇到なる待遇に向ては、殆んと謝すべき言葉を知らず、彼は一錢の船賃を徵せざるが上に、豹の皮の代價として二十ヲユカッ（貨幣の名）、獅子の皮の代價として四十ヲユカッを與へ、其他船中に積みたる余の貨物は嚴正に余に渡し、就中余が賣らんと欲するもの、則

ち墨の箱、二挺の小銃、密蝋付のランプ一個は、亦相當の代價を以て買取り呉れ、余は依て以て總計二百二十ィートの貨幣を得たり、而して余は此財嚢を以てブラヅルの海岸に上りぬ。

尋て幾日を經ず船長は余を善良正直なる一製糖家に紹介し、萬事余が爲めに依頼し呉れたれば、余は暫し此人の家に寓居し、因て亦砂糖を栽培し、及び之を製するの法を習得したりき。而して余は此地の砂糖栽培家が皆好き生活を遂げ、且つ彼等が俄かに富を得たるを見て、余も亦此地に移住するの許可を得ば、變して栽培家となるに決し。斯くて余が嘗て倫敦に貸付け置きたりし金を取寄するの法を案しぬ。依て先づ歸化證書を得て金力の及ぶ限り土地を買入れ、以て栽培の準備、殖民の用意をなしたり。

余が隣人に一人の葡萄牙人あり、此者はリスボン産なりしも純然たる英人の子にして、名をウヰルスと呼び、太だ余が身分に似たるものなりき。而して其栽培場は宛も余が畝に隣りしを以て、余は之を隣人と呼び做し、最と親密に往來しけり。申す迄もなく當時余が資金は、此隣人の資金と同しく薄少なりければ、余等は二年ばかりの間、單に食物に供するものゝみを植え、他物の耕作に及ぶと能はざりしが、資金漸時に增加して余等の土地も亦他の注文に應するを得るに至れり。則ち第三年目には多少の煙草を植付け、且つ來るべき年には砂糖を栽培する爲め、廣き土地を求めぬ、茲に至て余等は各

補助の農夫を要し、余は今更にジュリーと別れたるの愚かなりしを思へり、然れども過ぎにし事は詮方なければ此儘進むの外なし。蓋し余は今や自己の力に不相應なる職業に從事し、幷に余が往きに父の善良なる忠告に背きて家を出で、以て遂に己れが好んで求めし生活とは、全く反對なる職業に從ふ事となりしも、反て嘗て父が薦めし中等階級、則ち下等生活の上位を占るに至るべき望あり、而して余若し後來此儘に進み行かば、本國に止まりしと同じく、一身の苦難を免かるべかりき、然れども熟ら顧れば斯かる事は英吉利の本國に於て、朋友知己の間にも容易くなし得べかりし事にして、敢て五千里外の荒野に來り、特に四面知る人もなく、全く異國人野蠻人の中に於て、爲すを要せざる事なりと思へば、余の現在は最と悔ゆべき境遇なり。共に談話するものは隣人の外一人もなく、勞働は則ち自己の手を以てするの外助くるものもなし、宛かも絶海の孤島に棄てられて孤棲するものに異らず。然り然れども亦想ふに現在の有樣を以て、他の一層惡き有樣に比すれば、寧ろ滿足すべきが如し、若し他の境遇と交換せば、今の位地の太だ幸福なるは、何人も容易に知り得る所ならんのみ、猶余が漫りに孤島の生活を以て、現在の有樣則ち此儘に進み行かば、慥かに富と繁榮とを得べかりし、現在の有樣に比するが如きは、遂に實際余が運命の、遂に荒廢せる孤島の寂寞たる生活に陷へる前兆にあらざるなきを得んや。

兎に角余は依然栽培業に從ふ事と定めしが、時に宛も余が親切なる友、則ち嘗て余を海上に救ひ呉れたる、船の長ブラヲルに再來して、貨物の待合せ、航海の準備の爲めに、殆んど三ヶ月程滞留したりければ、余は倫敦に殘し置きたる金の事を談じ出でしに、英吉利さん（彼は常に余を斯く呼べり）、汝若し手紙と代理狀とを余に付托し、且つ倫敦に於て汝の金を預り居る人に向て、此國に適當なる商品を買求め、リスボンに於ける余が指圖する人に送るべき旨の談判一件を余に委任するならば、余は歸航の節、屹度之を汝に齎らすべし。然れども人事往々變事不幸に遭遇するの常なれば、先づ預け金の半額を以て此般の危險を侵さしめよ、而かも若し安全に到達しなば、殘りの半額をも同一の方法に處置すべく、若し又過て到達せずば他の半額を以て、回復の方法を講ずべしなどゝ、最と親切丁寧なる助言を與へ呉れぬ。余も是は十全なる忠告にして、最も便利なる方法と思ひしかば、余は金を預け置きたる婦人に遣はす手紙と、葡萄牙船長に付托する代理委任狀とを用意したり。而して該婦人に遣はす手紙には余が奴隷となりし事、之を遁れし事、海上に葡萄牙船長に逢ひ、其人の親切を被むりし事、余が今の狀態、預金に關する依頼等を遺ちなく書き收めぬ。さて此正直なる船長がリスボンに着するや、或る英國商人の紹介によりて、倫敦に在る一商人に依頼し、預金に就ての事と、余が一身に關する總ての談話を彼の婦人に通じ呉れたれば、婦人は預金を渡したる外に、自己の財嚢を開き

て、余に惠與する爲めの美麗なる贈物を、葡萄牙船長に囑托し越したり。是に於て倫敦の該商人は受取りたる百磅を、曩きに船長が依頼したる英國雜貨に注入して、品物は直ちにリスボンに滞留する船長に送り越し、船長は亦之をブラヲルに在る余に齎らし呉れたり。而して此中には余が注文なきも（余は當時猶事業に未熟にして注意到らざる所あれば）、船長の隈なき注意を以て、余が栽培業に必要なる諸器具、鐵具外種々の農具を購求し呉れたりき。

此貨物の到着したるを見て、余は驚喜措く能はず、早や既に富有者となりしが如き心地したるに加へて、船長は又其贈物として金五磅を費やし、六年間一人の雇人を購ひ來り呉れ、而して爲めに何等の報酬をも受くるを欲せざりき。唯煙草は余が自作の品物なれば強て彼をして受取らしめたるのみ。且今余が受取りたる貨物は凡て英國製にして、反物、服地、毛布以下、此國に於て特に價直あり、望者多き品物も多かりければ、余は之を賣て大に利益するの途あり、凡そ原價に四倍以上の儲ありと思へき。此に至て余は最早隣人の貧なるが如くならず、栽培事業の進歩に於ても數等の上に在りしなり、余は今船長がリスボンより連れ來りたる雇人の外、一人の黑奴と、一人の歐羅巴勞働者を雇入れ、家業益々繁昌したりけり。

然れども漫りに繁榮に誇るときは、往々にして大困難に陷る事あるは人事の常なるが、余も亦實に此

兎に角余は依然栽培業に從ふ事と定めしが、時に宛も余が親切なる友、則ち嘗て余を海上に救ひ呉れたる、船の長ブラヲルに再來して、貨物の待合せ、航海の準備の爲めに、殆んど三ヶ月程滞留したりければ、余は倫敦に殘し置きたる金の事を談じ出でしに、英吉利さん（彼は常に余を斯く呼べり）、汝若し手紙と代理狀とを余に付托し、且つ倫敦に於て汝の金を預り居る人に向て、此國に適當なる商品を買求め、リスボンに於ける余が指圖する人に送るべき旨の談判一件を余に委任するならば、余は歸航の節、屹度之を汝に齎らすべし。然れども人事往々變事不幸に遭遇するの常なれば、先づ預け金の半額を以て此般の危險を侵さしめよ、而かも若し安全に到達しなば、殘りの半額をも同一の方法に處置すべく、若し又過て到達せずば他の半額を以て、回復の方法を講ずべしなどゝ、最と親切丁寧なる助言を與へ呉れぬ。余も是は十全なる忠告にして、最も便利なる方法と思ひしかば、余は金を預け置きたる婦人に遣はす手紙と、葡萄牙船長に付托する代理委任狀とを用意したり。而して該婦人に遣はす手紙には余が奴隷となりし事、之を遁れし事、海上に葡萄牙船長に逢ひ、其人の親切を被むりし事、余が今の狀態、預金に關する依頼等を遺ちなく書き收めぬ。さて此正直なる船長がリスボンに着するや、或る英國商人の紹介によりて、倫敦に在る一商人に依頼し、預金に就ての事と、余が一身に關する總ての談話を彼の婦人に通じ呉れたれば、婦人は預金を渡したる外に、自己の財嚢を開き

て、余に惠與する爲めの美麗なる贈物を、葡萄牙船長に囑托し越したり。是に於て倫敦の該商人は受取りたる百磅を、疾きに船長が依頼したる英國雜貨に注入して、品物は直ちにリスボンに滞留する船長に送り越し、船長は亦之をブラヲルに在る余に齎らし呉れたり。而して此中には余が注文なきもの（余は當時猶事業に未熟にして注意到らざる所あれば）、船長の隈なき注意を以て、余が栽培業に必要なる諸器具、鍬具外種々の農具を購求し呉れたりき。

此貨物の到着したるを見て、余は驚喜措く能はず、早や既に富有者となりしが如き心地したるに加へて、船長は又其贈物として金五磅を費やし、六年間一人の雇人を購ひ來り呉れ、而して爲めに何等の報酬をも受くるを欲せざりき。唯煙草は余が自作の品物なれば強て彼をして受取らしめたるのみ。且今余が受取りたる貨物は凡て英國製にして、反物、服地、毛布以下、此國に於て特に價直あり、望者多き品物も多かりければ、余は之を賣て大に利益するの途あり、凡そ原價に四倍以上の儲ありと思へき。此に至て余は最早隣人の貧なるが如くならず、栽培事業の進歩に於ても數等の上に在りしなり、余は今船長がリスボンより連れ來りたる雇人の外、一人の黒奴と、一人の歐羅巴勞働者を雇入れ、家業益々繁昌したりけり。

然れども漫りに繁榮に誇るときは、往々にして大困難に陥る事あるは人事の常なるが、余も亦實に此

苦き經驗を嘗めたり。余は翌年煙草裝培に於て大成功をなし、自己の所有地の收獲のみにて、近隣の自用者の求めに應じたる外に、一卷百貫目餘の束五十卷を得たれば、善く之を乾してリスボンより來る船を待ちたり。斯く事業の繁盛、富の增加を來すがまゝに、余が心は漸く張り來りて、分外の計畫企圖を始むるに至り、世上往々にして之れが爲め零落の淵に沈みし前例あるをも顧みざりしは遺憾なり。蓋し余は現在の職業を續けたらんには、猶生じ來るべき多くの幸福あるは明かにして、往日父上が熱心に諭告したる安穩の生活、中等階級の生活を遂げ得べかりしに、余は執拗にも猶不幸の奴隸となるの傾ありて、特に自己の過失を增し、後悔を重ぬる所以を避けざりしことの愚さよ、斯かる失敗は皆是れ余が海外に遍歷せんとの馬鹿らしき心の傾より生じ來るものにして、栽培事業の如き簡易平穩なる生活を以て、福利を一身に得んとの心は正反對のものなり。蓋し險を冒して艱苦を嘗め盡すは、天と神とが一致して余に差し向くる方案にして、是れぞ余が義務なるか、嘗て一度父母の訓戒を破りて家出せし如く、余は今又現在の地位に滿足すると能はずして、敢て外に出つるの心止み難く、爲めに栽培事業に依りて富を得、繁榮の人とならんとの最と善き意見を捨てさるべからざるに至れり。是れ他なし、余は只人事の許さゞる底の不相當に、且つ急速なる立身をなさんと欲したるによるのみ。斯くて余は反て古今人の陷りたるとなき深淵に陷り、殆んと生命と兩存せざるが如き、不幸の

慘境に一身を棄て去りしなり。

余は今此話說を始むるに先て、言はずも讀者諸君の想像し得へき事あり。則ち余は今に至るまて殆んと四年間、ブラヂルに生活し、且一身の榮え、家計の豐かなるに至りたれば、土語に習熟したるは勿論、仲間同志にも、又は輸出港たるセントサルバドー市の商人間にも、懇親のもの多く出來り、而して彼等と談話の折節、余は數々ギチアの海岸に二回の航海をなしたる事を談し、さては該所に於ける奴隸賣買の摸樣、及南京玉、手遊品、小刀、鋏、斧、硝子の欠屑等の如き些少の價の物を以て、容易に砂金、象牙、若くはブラヂル出稼の黑奴を買取り得へき由を話したる事あり。彼等は幾時も余が談話に傾聽したりしが、特に當時賣買品の一たる黑奴買入の一段に注意したるが如し。蓋し黑奴は未だ多く此國に入り來らず、偶々之れ有るも、西班牙王及葡萄牙王の許によりて賣買し得るものにして、概ね公金を以て買占めれば、其數僅少にして、代價極めて高かりしか故なり。或日例の如く知己の商人、及び栽培家と圍坐して、互に熱心に此等の事を談したるに、彼等の中の三名、翌朝余が家に來訪して、昨夜の談話太だ愉快なりし由を謝し、且つ今日は秘密の相談ありて來りし旨を告げ、余の口止をなしたる後、さて言出つる樣、這度彼等はギチアに向て一艘を纖するの心あり、其故は彼等は余と同く栽培を業とするものなるに、最も困難とする所は、雇人を得るにあれば、寧ろ黑奴を得んと

欲するに在り。尤も奴隷賣買は此國に於て公然行ふ事能はざるを以て、航海は只一回を限りとし、連れ來りたる黒奴は、之を密かに銘々に分配する計畫なる事を陳し。結局の問題はギヰアに到りて黒奴買入の周旋旁船の監督役として、余に乘船し呉れよと云ふに在り。然ずるときは些少の資金を供せざるも、黒奴の分配を余にも平等に與ふる旨を申出てたり。

實を言へば此申出は頗ふる利益ある上乘の申出にして、手離し難き多くの栽培場、則ち多額の資金を注入して漸次に盛大に赴かんとする事業を有せざる人に取りては、恰好の申出なれども、今や余が事情は則ち然らず、事業次第に繁盛に赴き、今後三四年間續て之を勤め、且つ英國に預けある殘金を得なば、少くとも三四千磅の資産を獲るを過らず、加之ならず此資産は又漸次に自から增殖すべきは明かなれば、今更斯の如き航海を企つるは最も奇怪の至りなれども。元來余は自家の破壞者として生れたるものゝ如くにして、此申出を排斥する能はざる事、宛かも往きに父上の懇諭ありたる時に當り、兎角浪遊の思を絶つ能はざりしに殊ならざりき。依て余は敢て船に乘りて盡力すべき旨を答へ、同時に彼等に對て、留守中の世話を頼み、若し又過て歸省すること能はさらば、余が指圖の通り、栽培所を賣却し呉るべき由を要め、彼等は一々之を承諾し盟約書を渡せり、余は又別に正式の遺言書を作りて、萬一余が變死の場合には、所有の栽培場を始め、總ての財産を賣却して、嘗て余が生命を救ひた

る葡萄牙船長を包括財産の受遺者となし、盡く之に引渡すべき事、尤も船長は遺言書に指圖するが如く余が財産の賣得總金額の半額を取り、他の半額は英國の親元へ送附すべき旨を記したり。署言すれば余は財産の保管方及び栽培場の監督向に付ては、能ふ限りの注意を盡したりき。熟ら顧みれば、余が當時財産上の利害に注意したる半分の注意を、一身の利害に加へて以て宜しくなすべき事と、宜しくなすべからざる事とを判斷したらんには、決して現在の盛大なる事業繁榮の途を去て、危險なる航海には出てさりしものを、かへす〳〵も悔多き事してけり。然れども當時は心偏へに急き立ち、胸中の理性の忠告に從ふよりは、寧ろ嗜好の命令に盲從したりき。是に於て早々出帆の用意をなし、貨物を積込み、其他萬端豫期の如く準備を整へて、余は愈〻千六百五十九年九月一日を以て船に乘込めり、此日は八年前余が兩親の訓戒に背き、一身の利害を忘れてヒュルに於ける父母の家を逃げ出しと同日にして、余に取りては一の悪日なりしなり。

余等の船は容積殆んど一百二十噸にして、六挺の銃を備へ、船長、其奴僕、及び余の外十四名の水夫を載せたり。而して船貨と稱すべきものは、黒人種族と貿易するに適當なる、數種の手遊品の外、多くの貨物なく、則ち南京玉、硝子の片屑、貝殼、小き鏡、小刀、鋏、斧等の類を積みたるのみ。斯くて余等は乘込の當日直ちに帆を揚げて出發し、海岸を北方に馳せたり、是れ盖し當時の航海針路に從

ひ北緯十度乃至十二度に到て、方針を亞弗利加海岸に向けるの趣向なり。海岸の氣候は非常に熱くしてセントヲーガスチの岬に至るまでは、頗ふる困却したれども、日和極めて穏にして風なく、波なく、最も安全なりき。オーガスチノ岬より遙かに遠洋に出て亦陸地を見ず、針路を北東に變して宛かもフイルナンド、ト、ノロンナ島に向ふものゝ如くし、是に至て該島を東の方に見捨て進行したり、余等は此針路によりて十二日間航行したる後、さて緯度を計るに正さに北緯七度二十二分の所に在りき、唯夫れ此後は極烈なる颶風の襲ふ所となりて、經緯は全く知るに由なかりし、風は東南より西北に吹き、終に東北となりて靜まれり。此恐ろしき颶風に逢ひて、余等は十二日間追ひ回され、驅り立らるの外致方なく、只天運と風威の命する所に任したるのみ。而して此十二日間は毎日海神の爲めに飲み去られんとを思ひ、船中の者誰一人として生命を全ふせんと思ふものなかりしなり。此不幸のあるに加へて一人の水夫は船暈の爲めに死し、又一水夫と船長の奴僕は水に落ちて溺れぬ。十二日目に至て風少しく減じたれば、船長は辛ふして觀測を試みたるに、船は今や殆んど緯度十一度にあり、經度は則ち二十二度にしてセント、ヲーガスチノ岬より遠く西の方に在るを發見したり。依て余等は今正にギアナの海岸、則ちブラヲルの北部に近づき、既にアマゾン河口を通過して、ヲルノク河の方に向ふを知りぬ。是に於て船長は那方の針路を採るべきかを余に相談し、遂に獨斷を以て船に損所を生し進航に適せざればとて、直ちにブラヲルの海岸に歸航する事となせり。然れども余は全く之に反對の意見を有したりければ、船長と共に亞米利加海岸の海圖を精査し、遂に余等の歸航の途に於ては、カリビー群島の境域に到るまで、人類の住める國なきを悟り、乃ちペルパトースに向て出帆するに決しぬ、斯くて墨西哥灣の難場を避けて、遙に沖合を通過せば、今より十五日間には容易に目的の地に達するを得べしと信じたりしなり。然るに事案外に出て、終に亞弗利加海岸に達する事能はざりしぞ是非もなき。

兎に角余等は此趣向を以て針路を一變し、先づ英吉利の或一島に着して扶助を求めんと欲し、西北に向て馳せたり、然れども余等は遂に此に達すると能はざりき。其故は緯線十二度十八分の邊に在りし頃、又々暴風の襲ふ所となり、急性の西風に驅られて、人類交通の途の外に推し流され、海に死せざれば必ず野蠻人の食ふ所となりて、再び故國に歸ると能はざる場合に陷らんとせり。此不幸慘憺の中に於て、風は益々吹き連り、人々活る心地もなかりしに、翌朝早く一人の水夫、高聲にて陸地よと叫び出しければ、皆々陸地を見て安堵せんとて船室を駈け出るや、此時遲く被壞車、船は忽ち淺瀬に乘り上げたり。此瞬時に於て船は止り波は激し、余等は一同直樣溺死すべかりしが如し、先づ飛び來る泡沫水烟を避けん爲め、一室に群集して暫し貌然爲す所を知らざりき。

未だ一度も斯かる悲境に陥りたるとなきものに向て、此急場の驚愕苦難の實を了解せしめん事は、容易の業にあらずと雖、且つ聞け、余等は此時身の那邊にあるを知らず、又は今驅り付けられたる所は如何なる陸地なるを知らず、將た島の本洲か、住民ありやなきやを知らず、尤も風は稍々減じたるが如しと雖、猶猛烈にして此風忽然方向を轉ずるにあらざれば、船は暫時に破壞すべく見へぬ。事爰に至ては一同互に顔を見合せ、死を待つの外なく、人々只他界に往生するの用意をなすのみ。而して茲に余等が暫時の安慰を來せしものは、案外にも船の猶破壞せざりし事と、船長が風次第に衰ふと言ひたる事是なり。成程風は少か減せしが如く思はれたれども、猶船は沙の上に坐して復た浮ひ出つべくもあらず、余等の現況は實に悲慘の態にして、能ふべくんば生命を救ふの途を思考するの外詮すべもなし。然るに暴風波の起る前まで船尾に載せ置きたる短艇は、本船用の梯子に撞突して破壞し、次て流れ去りて木片もなし。猶船中に他の一艘ありたれども、以て能く海を渡り得べきや否や疑はしき限りなりき。然れども船は時々刻々に破れ行くものゝ如く、亦實に或者は既に破れたりと云ふにより、議論推究の遑もなし。

此危難死生の秋に於て、一人の水夫辛ふして短艇を取下し、船側に浮べたれば、皆急ぎ之に乘移り、總數十一名の生命は之を上帝の慈悲と荒海の憐愍に任せたり。此時風は稍減じたれども、波濤猶海岸

に激して凄まし き事言ふばかりなく、荷蘭人の所謂大暴れなりしなり。左れば余等は實に薄命の慘境に陷り、短艇は激浪の爲めに覆されんとし、同舟の者皆々溺死を免れ難く見へぬ。帆を作らんとするも余等に布なく、假令之あるも籏弄せらるゝ舟中に在りて何かせん、仍て余等は一に擢によりて海岸に漕付くの外致方なく、而して海岸に近づかば、短艇は激浪に嚙まれて千々に破碎するの悞あるを以て、人々皆死刑執行場に赴くが如く、悲歎の情に滿つると雖、強て氣勢を鼓して櫂を取り、只管救を神に祈りき。斯くて風は海岸に向て余等を驅り立て、余等は力の及ぶ限り速かに海岸に着かんと欲し、自からの手を以て溺死の途に急ぎしぞ無慘なる。素より余等は此海岸の何と名くるものなるを知らず、那邊に暗礁あり淺沙あるを知らず、將た危巖は何くに立つを知らざれば、短艇の安否亦豫め料り知るべからず。此時に當り唯一の望は、若し或る灣、入江、河口にても見出し得べくんば、覺束なくも此に漕き入り、又は陸地の蔭に風を避けて、波なき場所に至らん事是のみ。然れども此邊には絶て斯かるものあるを見ざるのみならず、海岸に近づくに隨ひて、陸邊は更らに海よりも恐ろしきを認めたり、則ち余等が凡そ一海里半漕寄せたる頃ひ、山の如き怒濤短艇の尾を襲ひ來り、あわやと言はせも果てず、終に介錯の斷苦刀を余等に加へぬ、換言すれば波は直ちに短艇を覆へし、余等をして短艇と分れしめたると同時に、人々を各別に分れしめ、ヲー神よと云ふ間もなく、一瞬時間に人々盡

く海に呑まれ去りぬ。

余が海水に沈みたる時の心の周章は、譬へんに物なく得て記すべからず、尤も余は水練に熟したれども寄せ來る涙に掩はれては、息吐くこと能はず、遂に涙に驅られ半死半生の體にて砂の上に推上げられたるまでは苦悶遣る方なかりき。猶余は心を確かと持し、起き上りて陸上に駈け去り、再び歸りの波に奪はれざらん樣力めたりしが、間もなく山の如く高く、敵の如く慘忍なる大濤、余が後に馳せ來りて呑み去らんず勢逞ふして當るべからず、余は脆くも再び引去られたれば、先づ力めて呼吸を保ちて水の上に浮び、能ふべくんば泳て以て身を海岸の方に嚮けんと試みたり。是れ其來るときは濱の上に遠く余を運ぶが如き大濤は、其戻るに當て復た余を引き去ると能はざるべしと思ひたるが故に、海岸に向て乘ずべき涙の來るを待たんが爲めなり。果して次の涙は來れり、而して余を二十尺

乃至三十尺の深さに沒せり、案の如く強き力と疾き勢を以て、遠く岸の上に余を送るが如くなれば、余も亦力を極めて助け泳げり。此時余は殆んど絶息せんばかりなりしが、忽ち身は起き上げらるゝが如き感ありて、頭と手は水の上に出で、ホット息つき蘇生の思をなしぬ。此間僅かに二秒時間に充たずと雖も、余に呼吸と新なる氣力と與へき、直ちに復た波の被ふ所となりたれども、コは暫しにして引去りたれば、力を極めて引き波に抵抗し、再び足を地に觸るゝを得たり。依て余は起き上りて呼吸を回復し、涙の全く引き去るを待ちて、急に力の有らん限り岸の上に走り行けり、然れども此濱地は至て平なりければ、更らに別個の大濤倏忽に襲ひ來りて、又復た余を奪ひ去り、前と同く遙か向ふに運びぬ。此度は余も殆んど生命を失はんとせり、波は相變らず余を急き立て、砂上に推寄する途端、強くとある岩石に撞き付け、余が半身と胸膈とを痛打したれば、一時全く氣息を絶ち、感覺を失ひ、到底助かるべくも見へざりき。然ども幸に波の再來に少し先つて蘇り、復た海水に被はれんとするを見て、今度は岩の端に取付き、能ふべくんば涙の引去るまで呼吸を保んと欲しぬ。此時波は初めの如く高からざりければ、余は豫期の如く岩を放たず、次て他の涙に乘りて岸邊に漂ひ着けり。而して其次の涙は重ねて余を追越したれども、遂に余を攫み去ると能はざりき。是に於て余は又前の如く一目散に走り、愈々陸上に駈けつき、海岸の巖の上にはひ登りて草の上に坐し、最早や波涙も達せず、危險

の恐もなきに安堵したり。

余は今安全に海岸に登りたれば、天を仰て神に謝し、僅かに數分時間前には殆んど助かる望なき命の難有くも救ひ得たるを喜べり。是に於て余は如何に驚愕悲慘の境に陷るも、一旦助かるときは早や之を忘れて、余が身躰は結局墓の外のものと信じ、今は慣れて困難の境に驚かざるに至れり。宛かもかの重罪犯者が、繩を首に掛けられて絞首場に到りし時、俄かに宥免の沙汰ありしと同時に、案外にも首切の入り來るを見て驚かざるに異ならず。何ぞや曰く不意の驚愕は未だ人の動物的氣象を奪ふて、慴伏せしむる事能はざればなり。

突然の喜びは悲みと同じく始めは人をして亂れしむ、斯くて余は頭を擧げて海岸を逍遙し、せめて助かりしは、不幸中の幸福なるを思ひ、樣々の想像種々の感念に沈み、さては溺れたる仲間の事に想ひ及びて、余を除くの外助かりたるもの一人もなかるべしと悲歎に暮れぬ。尤も其後三個の高帽と一個の大黑帽子と二個の靴とを發見したれども、コは是れ彼等の片身にして、彼等の生ける證據にあらざるを如何せん。又顧て眼を砂上に坐する本船に注げば、遙かに海上に横はり、高浪に遮られて明かに見得ず、思へば余は能くも海岸に着き得しことよ。

第五回

絶島荒漠の地に漂着す。難破船より種々の必要品を獲來る。島地の視察。

兎に角余は生命の助かりたるを喜び、さて熟ら四方を見廻し、余は今如何なる場所にあるか、此後は如何になすべきかなど考ふるに、喜びの心も俄かに消ゆる思ありて、轉た恐ろしき心地しけり。其故は衣は濕りたれども着換の品なく、腹た食ふ物、飲む物一としてある事なければ、餓えて死するか、猛獸の餌となるか、二者其一を待つの外致し方もなく、殊に猛獸の襲來は余の最も恐れたる所にして、身に一の武器を帶びざれば、食用の爲めに禽獸を狩るにも、若くは余を食用に供せんと欲する猛獸に對して防ぎ鬪ふにも、手段の探るべきなきに困じたり。當時余が所持せしものは僅かに一挺の小刀と、一本の煙管と、及び少々の煙草のみ、是れ實に余が心痛の已み難き所以にして、一時は狂人の如く走り廻れり。兎角する間に夜となりたれば心の苦み益々甚しく、若し此地に猛獸ありて夜間食を求めん爲め、山より出で來ることあらば、余が運命は遂に如何ならんと思ひ煩ひけり。苦しまぎれに偶々思付きたる避害法は、面あたりに茂生する荊棘の密藪に入りて一夜を明かし、翌日に至りて綬々死方を考んと決しぬ。是れ余は猶も未だ生存の望を有せざりければなり。依て先づ喉を濕すに足る

べき一掬の清水を得んとて、岸上より百餘間探り行き、幸に之を發見して大に打喜び、充分に喫し終りて、口に少計の煙草を含み、以て暫時の飢を防ぎ、さて一夜の宿たる森林に分け入りて眠るも熟睡せざるの計をなせり。先づ第一に短き棍棒を作りて護身用となし、傍に置きて眠りけるに、身躰非常に疲れし爲め、直ちに熟睡し、奇妙にも安らかなる一夜の夢を結び、斯かる境遇にあるにも拘はらず、身心俄かに快活を覺へたり。

翌朝目醒たれば、既に白昼にして、天晴れ風收り、海上も亦前日の如く荒るゝことなかりき、而して最も意外なりしは、余等の船が、夜中嘗て其乗上げたる砂上より浮み出して、余が初め打付られたる岩の邊に漂ひたることとなり。かの岩石は海岸より一里許の近間に在り、且つ船は猶依然として直立するを見て、余は復び船に立戻り、せめて一身の必要品たけも取り歸らんと欲せり。依て余は森林の宿を出でゝ再び見渡すに、最も初めに眼に觸れしものは短艇なりき、個も亦昨夜風と浪とに驅られ、陸地に漂着したるものにて、正に余が右方二里計の所に在り、余は則ち先づ此短艇を得んとて海岸を傳ひ行しが、圖らずも余と短艇との間に凡そ半里計りの入江あるを見出しぬ。實は中に必要品を得んと欲する船に着するを以て、最も急務とすれば、余は短艇を見捨てゝ歸り來れり。

正午の少し後に至りて海は至て靜かに、潮は遙かに退き、余は船と一里の四分の一近くに相對するを

得るに至れり。是に於て余は更らに憂愁に沈みぬ、其故は若し余等前きに船中に止まりたらんには、一同皆安全なるべく、余も亦友なく食物なき今の悲境に陷らざるべかりしに、周章て短艇を浮たるとの口惜さよ。之を思へば涙は雙眼に溢れて禁ずべからず、然れども船中に食を求むる望、亦最も切なりければ、決然船の内に行くに定め、暑氣の酷烈なるを奇貨として衣を脱ぎ水に投ぜり、斯くて遂に船に達したれども宛かも潮干に際したれば、船は淺瀬に高坐して船室水面より最と高く、之に登るの手段なきに弱したり、依て已むなく二回

まで船の四側を泳ぎ廻りて、何がな縋るものを求めしに、不圖細き纜の下りあるを見出し、辛ふして之に取り付き、以て船首に登るを得たり。上り見れば船底は漏りて海水夥しく侵入し居れり、然れども砂の上に坐するまゝ船尾は高く、船首は低く傾き居りて、水夫室は水の犯す所とならず全く乾きてありき。余が穿索せんと欲する所は何品が汚れ何品が安全なるかを第一とするを以て、最初に此室に注目せしをば、何人も無理ならず想はるべし。就中最初に發見したるは食用品の乾きありて、曾て水に當らざりしことにして、而かも好く食用に適する樣蓄へられたれば、打喜びて先づ麵包部屋に行き、菓子麵包と共に食麵包を充分懷中に收め、時間の餘裕なきを以て之を食しながら他の物の穿索に急げり。次て又糖木酒の壜を見出して一飲グット飲み干し、依て以て大に勇氣を鼓しぬ。今は余は既に充分に必要品を得たれば、他に何物をも要せずと雖、此等の物品を運ばんに最も必要なるは小舟なりき。

靜かに坐して到底能はぬことを思考するも無益なり、然れども別に爲んすべなければ少時貌然たりしが、斯かる場合には人の心一層の働をなし、忽ち一計を案じ得たり。船中に多くの細き帆扛と、二三本の大なる長材木及び細き一二本の檣とありたれば、一々繩を結び付けて流失を防ぎ、余が力の持扱ひ能ふ限り、此等の船材を水中に投げ出し、次で自から船を下りて引き集め、四本を縱木となし、二三

本を横木となし、首尾兩端を結びて以て筏の形に組立てければ、余は其上に歩して浮ぶを得たりき。然れども猶未だ多くの重量に堪ゆると能はざるを以て、余は更らに鋸を以て一本の細き檣を三つに切り斷ち既成の筏に加へぬ。之をなすには多くの勞力と苦心とを要したれども、斯くて生活の必要品を得るの望は、余を勵まして平常に倍する働をなさしめたり。今や筏は愈々完成して相應の重量に堪ゆるを得るに至れり、さて次に考ふべきは如何にして物品を之に積み移すべきか、將た如何にして波の侵涵を防ぐべきか是なり。此事に付ては長くも思考せず、忽ち一計を案出せり、則ち所在板を取て筏の上に置き、次に空虛のまゝ開き放ちて棄てありし、水夫の用箱三個を取りて之に麵包、米、荷蘭乾酪三壜、山羊の干肉五塊（余等多く之を常食とせり）及び少々の歐羅巴雜穀の殘り（余等が先きに船中に飼養したる鳥の食なり然れども鳥は既に殺されてあらず）を容れ、又少々の大麥と小麥とを容れたりしか、個は後に至りて鼠の爲めに喰暴されたるを發見して大に失望したりけり。此他余は又船中に於て船長の所有に屬せし數壜の酒を見出せしが、中には强壯劑もあり、五六ガロン計りの亞歷酒もありき、而して此等の物は特に箱に入るゝの要なく、又箱の中には容るゝ餘地もなければ、其儘筏の上に載せたり。

此等の事を爲す間に潮は滿ち來り、波は至て靜なりしも見る〳〵余が濱邊の砂の上に脱ぎ置きたる上

衣、シヤツ、チヨツキを流し去れり。尤も股引はリンチル製にして膝切りのものなりければ、個は靴下と共に着のまゝ船に泳ぎ來りて現存すれども、既に此他の衣類を失ひたる上は、亦之を船中に求めざるべからず、而して船中には用ゆべき衣類許多ありしと雖、他に目欲しき品物特に海岸に登りて後、細工の用に供すべき諸道具を要するが故に、衣類は現在に要用なるだけを取りしのみ。斯くて諸所捜索の後、遂に一個の大工道具を容れ在る箱を見出せり。是れ實に余に取りては頗ぶる要用の獲物にして、斯かる時には船一杯の黄金よりも貴かりき、余は則ち一々點檢するの遑もなく、同じく筏に載せたりけり。さて此次に要する物は火藥と武器となり、船中の大廣間に頗ぶる上製の鳥銃二挺と短銃のありたれば、先づ之を收め、兼ねて携帶用の火藥入と、小さき銃丸入の革嚢と、及び二本の錆びたる古刀とを得たり。猶余は船中に三パレル（凡そ我一斛九斗餘）の火藥あるを知れども、鐵砲方は何くに之を置きしや明かならず、然れども諸所捜索の上遂に之れを發見したり。尤も其中一パレルだけは水に浸たれども、二パレルは乾きありて用ゆるに堪へたり、乃ち此二パレルを武器と共に筏に移し、是にて要用品略々整ひたれば、さて岸邊に歸らんと欲すれども、筏には素より帆なく、櫂なく、又舵なく、實に進退に窮したりき、然れども余は此時に於て三つの奬勵に出逢ひぬ、其一は海面の滑かなる事なり、其二は潮の海岸に向て推し行し事なり、其三は微かに吹ける軟風の海岸に向ふ事是なり。加ふるに本船に屬する三本の壞れたる櫂を得たれば、余は先に積みたる諸物品の外、後に發見したる斧、槌の二品を併せて筏に積み、敢て本船を離れて漕き出でぬ。斯くて一英里許りの間は至て都合好く進行したりしが、昔て余が上陸したる場所の近邊に到りて、端なく海水の流れ少しく變りたれば、余は此邊に川ある事を想ひ、即ち其川を以て貨物を上陸する港となさんと望めり。到れば果して小川ありて、急潮勢強く此に入り込むを認めぬ。依て余は筏を導き以て流れの中心に嚮けんとせしに、此時復た余は難破の苦を嘗めんとしたり。若し果して難破したらんには、余が心も亦實に破れて復び爲すあるの勇氣を亡ひしならん。元來余は此邊の海岸に暗らければ、圖らず筏を淺洲に乘上げ、一方は高く一方は低き姿となり、貨物の轉げ落ちざるもの僅かに寸分の間に在るに至れり。此危急の場合に於て、余は先づ急に自己の背を物容れある箱の支となし、以て其位置を移ざる樣にし、又全力を注で筏を浮べ出さんとせしも動きもせず、依て已むを得ず力を極めて半時間程箱を擔て立居しが、此に至て滿ち來れる潮水、少しく筏の姿勢を直ふし、又少時にして水量の增加したりければ、筏は再び浮み出せり。余は則ち撓を取りて之を進め、潮流に投して其勢に乘り、遂に能く小川に入るを得たり。然れども余は遠く河流を逆ぼる事をなさず、早く適當なる場所を見出して上陸せんと欲せり。是れ他なし或は海上に船を見る事あらんを望むによるのみ、故に余は成るべく海岸に近く居を設くるに

決しぬ。斯くて余は河の右岸に小さき入江あるを見出し、辛ふして此に漕ぎ着け、直ちに筏を推し入れんとしたるに、此に復た總ての貨物を浸さんとしたり。其故は河岸傾斜にして上陸すべき場所にあらず、若し知らずして此に入らば筏の一方のみ高く上り、地の一方は低く沈みて、前きに淺洲に乘上げたる時と同じく、貨物を失ふの惧あるべければなり。此に於て余は又一策を案じ、潮の最高度に達するを待ちて、其退き去る時は平地となるべしと想はるゝ所に橈を衝き立て、以て錨の如く筏をつなぎ留めんとしたり。軈て潮は充分に滿ち來りければ、平地と想ふ所に筏を進め、二本の橈を首尾兩端に打ち立て、堅く筏に結び付けて以て潮の去るを待ちしに、案の如く筏は間もなく地上に遺され、貨物は盡く安全なるを得たり。

余が次の仕事は土地を視察して住居に適當なる場所を見出し、幷びに如何なる事の生ずるも、安全に諸物品を置き得る所を探くるにありき。余は未だ此地の如何なる所なるを知らず、大陸か島地か、住民ありや、なきや、將た猛獸の危險ありやなきやを知らざるなり、唯前面に當りて一の嶮岨なる高き山あり、他の群巒を壓して聳へ、他山は皆之より山脈を引いて、北方に走るものゝ如きを見る。而して此山僅かに一英里以内に峙つを以て、余は一挺の鳥銃と、一挺の短銃及び火藥を携へて護身し、先づ該山の嶺に登りて、此地の概觀を視察せんとて出發したり。愈登りて見れば、あな要てや、此地

は四方海に取卷かるゝ一小島ならんとは、傍らには岩石の外一の陸地なく、微に二小島を見たれとも西の方凡そ三海里の距離にあり、加之ならず余は又此島の荒地なるを知りて、慥かに猛獸（余は未だ見されとも）の外住むものなきを信じぬ。尤も此地には多くの鳥あるを見、其種類の何に屬するか、又食用に供し得べきや否やを知らずと雖、啣か安堵の思をなし、歸りがけに試に大なる森の木に留れる、一の大鳥を擊ちしに、森の諸方より種々の類の鳥數多飛び出で、今放ちし銃の音を聞き驚愕の躰にて叫び哀み、樣々の聲を發して泣き廻はりしが、余は一も其名を知るものなかりき。思ふに鐵砲の音は此地に於て、開闢以來今始めて聽きしならん乎。余が打殺せし鳥は、其色其嘴能く鷹に類するを以て、余は其一種なるべしと思ひしも、普通の鳥より鋭き爪なければ、さては鷹にもあらざるか、肉は臭ふして食ふべくもあらず。

先づ此地の概觀を視て島地なる事をも明かにしたれば、復た筏の所に歸來て貨物の取片付に從事し、其日の殘晷を費せり。扨夜は如何にすべきか、休息は何處になすべきか、猛獸に襲はるゝの惧あれば空地に臥する事も能はざるべし。尤も後に至りて實は此地に猛獸なく、斯る恐れの要なきを知しも、此日はなか〳〵に心安からさりき。依て余は船より持ち來りたる箱と板とを以て圍とし、其夜の宿りの爲めに、一種の小屋を作りぬ。獨り食物の一點に於ては、未た何くより之を得べきを知らず、纔

かに森の鳥を驚ちし時、駈け出したる兎の如き二三の動物に想を掛けしのみなり。

思ふに本船には猶余の爲めに要用なる多くの物あり、特に纜及び帆の如きは最も然るものにして、其他の物品と雖皆多少の要あるべければ、能ふ限りは持歸らんと欲し、余は復び本船に漕き行くに決せり。且つ若し一度風波の荒るとあらば、船は必ず片々に破壊する事明かなれば、萬事を差置き、先づ本船の諸物品を引き取るの計を急くに決しぬ。然るに茲に困難なるは筏の最早あらさる事なり、前の筏は既に變して小屋の材料となれり、今更ら之を解く譯に參らず。乃ち又前回と同しく潮の退き去りたる折に泳き行く事とし、衣服たけは小屋に脱き置きて、再び流失の失策を蹈まさる用意を加へ、身には盲縞のシャツと、リンテルの股引を着、薄底の短靴を穿きて水に投せり。斯くて船に達するや、先づ筏を作り、這度は前の經驗もあれば、成るべく輕便に仕組みて、且つ貨物も餘り重くは積まざりき。猶大小の鐵釘を盛りたる二三の嚢、一の大なる螺旋起重器、數十挺の斧及砥石等の如き要用なる品物を載せたる外、鐵砲方の手にありし、種々の物品、就中二三の鐵挺、二ペンルの彈丸、七挺の小銃、一挺の鳥銃、多少の火藥、大嚢入の小銃丸及び大なる鉛の丸棒を獲たり。然れども鉛の丸棒は餘り重くして、船より持ち運ぶと能はざりければ、個は遺し置きぬ。此外船員の衣類、薄き前梔棚の帆、吊床、寢具等をも得たれば、余は之を盡皆筏に乗せて、安全に海岸に着し大に打喜べり。

不在中或は余が物品の失せむ事を危ぶみたれども、歸りて見るに何者も來りたる樣子なく、唯一疋の野猫箱の上に坐し居りしのみ。余が歸り來るを見て五六間走り去りしが、又靜かに立止まり、癪て悠然として坐し、宛かも余に親まんと欲するものゝ如く、余が顏を見詰めぬ。試に銃を示すに嘗て之を知らずと見へ、全く無關係にて動きもせず。依て余は惜しけれどもビスケット少々を投げ與へしに、一應嗅ぎて之を食ひ、願くは今少し呉れよと乞ふものゝ如し、然れども余は之れを謝絶せり、余が蓄とても多くはあらぬものなれば、最早與ふる事能はず、尋で猫は立去れり。

余は海岸に貨物を運び、先づ欣々然として火藥の大樽を開き、其重ふして一度に持運ぶこと能はざる故、數包となして取仕舞たる後、帆布と棒とを以て、小かなる天幕を作る事に從事せり。而して此天幕の中に、雨又は日光の害を受けんと思はるゝ品々を運び、次に空樽を天幕の周圍に積み重ねて、以て人若くは獸の不虞の襲撃に備へ、更に板を天幕の内側に列ね、箱を外の支となして入口を塞ぎ。扨一臺の寢臺を延べて、其上に二挺の短銃を懸け、小銃を側に立てゝ、此夜始めて寢臺に上り、終夜安心して善く眠れり。是れ前夜の睡眠甚だ少く、且つ此日は日を終ふるまで、船より貨物の運送に勞れたるを一方ならざるによるなり。

余は今や一個人としては甚だ多くの武器を有せり、然れども未だ以て滿足せず、本船の彼處に直立す

る間は力の及ぶ限り、其中にある總ての物を得んと欲し、毎日潮の退く頃ひ、船に行きて多少の物品を持ち歸れり。特に其第三回目に於ては多くの纜、細纜、綯索、帆布の切片、濕りたる火藥數斗を得たり。是に於て船中に在る帆は盡く持ち歸りたるとなれども、そは最早帆として用ゆるの要なく、纔かに帆切れとして用ゆるを得るのみなれば、余は之を片々に切り裂きて持歸りしなり。斯くて五六回本船に通ひたる後、最早取るべき價直あるものなかるべしと思ひたりしに、最後に余は一の大なる麵包の塊と、三樽の糖水酒及燒酎と、一箱の砂糖と、麪粉の一大箱とを發見して大に喜び且つ驚けり。其故は彼の水に浸れたものゝ外、食料品としては最早なかるべしと思ひしに、意外にも斯く多くの飲食物を得し事、寧ろ天幸なればなり。余は先づ速に麵包の箱を開て帆切れに包み、數箇の塊となして、又之を安全に海岸に運べり。翌日亦一回の往復を爲せしか、今は早や概ね取出して運漕すべきものは充分に持出したれば、這度は更に錨鏈に取掛り、之を片々に切りて、余の力能く移動し得る樣になし、遂に二條の錨と、一本の錨鏈と及び鐵器をも併せて筏に積み。同時に又大筏を造るの材料として、船艫及帆架等の木材を積み、凡て此等の重き貨物を以て歸り來りしが、余が幸運も今は傾き始めぬ。蓋し此筏は餘りに重くして、進退自在なる能はざれば、余が先きに他の貨物を陸揚したる入江に入るも、前の如く機活に之を導くこと難くして、遂に覆り、余と貨物とを併せて水中に投

けたりけり。尤も此所は岸邊なれば余の一身には差したる事なかりしと雖、貨物は概ね失へり、特に鐵具は余に大なる要用あるものなるに、今之を失ひたるは口惜しき限りなりき。然れとも潮の去りて後、余は水中に入り無限の勞力を以て、纔かに能く少しの鐵と、鏈の大部分を引上げしは、不幸中の幸とも謂はんか、此後余は猶毎日船に行きて、獲能ふ限り諸種の物品を持歸れり。

今や此海岸に來りてより既に十三日となれり、而して本船に往復したるもの總計十三回に上りぬ。此間に余は二本の手を以て持來り能ふものは大抵持來れり、若し靜かなる天候さへ續きたらんには、船の全躰をも片々となして持來り得んとは余の固く信する所なりき。然れとも第十二回目の本船行を準備するに當り、風の漸く吹き起るを見たり、余は之に關せすして又々本船に行き、重ねて穿索したるに、數度精索の上なれば最早何物もなかるべしと思ひの外、猶抽斗付きの棚ありて、其一つの中に二三挺の剃刀、壹對の大鋏、十挺乃至十二挺の食事用小刀及ひ肉叉あり、又他の一つには三十六磅餘の貨幣を見出せり。或者は歐洲貨幣にして或者はブラシル貨幣、又或者はイート錢にして或者は金貨及び銀貨なりき。余之を見て微笑し思はず高聲にて、テー廢物よ、汝は今何の用をかなす、現在余に取りて何等の價値なきものなり、一挺の小刀却て能く此總ての貨幣に直すべし、余は今汝を用ゆるの法なきが故に依然茲に留まりて終に海底に沈み、汝を貯蓄するの價値なき魚の腹中に葬られよと叫べ

り。然れども更に考ふる所ありて之を取上げ帆布の切れに包みて、さて筏を造り總て此等の物品を持ち歸らんとせり。然るに余が此準備を爲す間に、空一面にかき曇りて風さへ吹き始め、十分時間を出でずして疾風海岸の方より吹き來りぬ。今は筏を造るも無益なれば潮の滿ちざる前に速かに泳ぎ戻るを余の最大急務とせり、然らされば余は到底復び岸に歸着する事能はざらんとす、故に忽ぎ水中に飛び入りて船と砂地との間を泳げり。此際疾風益募りて海は荒漠樣となり、激浪斷へず襲ひ來るに加へて、身は携帶物の重量によりて思の如く自由ならず、頗ぶる困難を嘗めたり。然れとも余は幸に小さき天幕の我家に歸るを得、且つ携帶し來れる貴き品々も安全に持ち歸りて、個を眺めつゝ横はりぬ。此夜は終夜酷だ強き風吹き連りて暫しも止まず、翌朝に至りて見渡せば船は最早あらざりき。余は聊か驚たり、然れども空しく時を費やさず力を惜まずして、余に必要なる各種の物品を手早く取り歸りたるを思ふて、自から慰めぬ。實に今少しの時間あらば、持ち來り得るものは一物たりとも船中に遺さざりしならん、是れ聊か惜むべきが如しと雖も、今となりては宛かも死兒の齡を數ふるに均し、故に余は復た船の事に付ての思をなさず、又船中の物に付ての考をなさざりし。唯船躰の破碎により、海岸に漂着する物に付ては注意を怠らざりしが、後日に至り實に諸種の片々漂着したりと雖、然れども此等の物は余に取りて左程の要なきのなりき。

第六回

野蠻人及び猛獸の防禦策を講ず。住所の撰定。墻壁を築く。

恰好の食料品山羊を獲。既往の無謀を悔ゆ。

今余は專ら思考を一身の扞護方法に注ぎ、若し野蠻人出で來らば如何にすべきか、將た此島に猛獸ありて出來らば、如何にすべきかに付き種々の計畧を案し、又住居方法は如何にすべきか、則ち地中に穴を穿ちて住すべきか。或は地上に天幕を張て住すべきかの疑問を攻究し、遂に穴居と幕居の二方法を同時に採るに決せり、是れ聊か奇なるが如くなれども、其方法と摸樣とは强ち記述し難きものにあらず、兎に角余が今在留する所は海に近き低き濕地なれば、健康に適し且つ便利なる土地を見出さんと欲せり、蓋し余が住居を撰定するに付き、一身の利害に適應する要件を考ふるに、第一は前記の如く健康地にして飲料水の便ある事、第二大陽の熱を避け得る事、第三野蠻人若くは猛獸の害を扞き得る事、第四海面を見晴す事是なり。抑も海面を見晴すの要は何ぞと云ふに、余若し天の惠によりて、或る船を見得る事もあらば、依て以て孤島の閉居を脱するを得べく、而して此望は今猶余が腦裡を去らざるが故なり。斯くて以上の要件に適する場所を檢索したるに、不圖懸崖の下に小やかなる場所あ

りて、其場所に向へる懸崖の前面は家の四側の如く、峭直なる絶壁なれば、何者も其岩山の頂より、余の上に降り來ると能はざる要害の場所たり。又其岩の一側に凹める所ありて、之に通する入口の如き徑路あり、然れども此凹所は實に巖穴にあらず、亦岩石の通する路にもあらざるなり、余は丁度此凹所の前の平なる草地に於て天幕を張るに決しぬ。そも此平地は幅さ一百ヤード（一ヤードは我曲尺三尺餘）、長さ凡そ其二倍ありて宛かも余が家の前庭の如く、其端は則ち右よりするも、左よりするも、海濱の低地に降るを得べし、而して其方位は後の岩山より北北西に當るを以て、大陽の西に傾くまでは暑熱を避け得べく、特に此島地は太陽稍南方に沈むが故に、余が撰みたる場所は、酷烈なる日光を避くるに妙なりき。

扨天幕を張るに當り、先づ彼の凹所の前に岩側より半徑にして、殆んと十ヤード、一端より一端まで圓徑にして、二十ヤードの半圓形を劃し、固く二列の杙木を地中に振り付け、高さ五尺五寸餘となし、且其先を尖らせ、而して一列の丈けを他の一列よりも六寸ばかり高くしたり。是に於て余が嘗て船中より切斷し來りたる數本の鎖を以て、左右二列の杙柱を結び、前面にも亦上まで鎖を密に張りて、更らに其内側に二尺半計りの杙を駢列したりしか。此柵は頗ふる強固にして、人も獸も容易に入ると能はず、若くは飛び越ゆる能はざるものなり。余は之を造るに多くの時間と勞力とを費やせり、特に森

林より杙を切りて、又之を運搬し、又之を地中に振込むには、大困難を極めたり。斯くて落成したる余が家の入口は如何にと云ふに、個は戸を以てせず、梯子に登りて屋根の上より入るとなし、而して余が内に入りたる時は梯子を吊り上げ置くの趣向なれば、要慎堅固にして何物も入り來ると能はざるべしと確信し、爾後夜中も安心して眠りぬ、但し後日に至りて考ふれば、余が恐れたる敵の危險は毫末もあるとなきまゝに、此般の堅固なる要害の必用なかりし。

次に余は又大なる勞力を費して、此柵中に前記の貨幣、食糧、武器、及び諸道具を運び入れ、毒て雨を防ぐ爲め大なる天幕を造れり。尤も此地は年の一季中降雨甚しければ、余は更に小なる天幕を造りて大なるもの丶中に重ねて之を張り、且つ大天幕の上をも亦嘗て船中より取り歸りたる油布もて掩ひぬ。斯くの如くにして天幕を落成したれば、先づ寢臺を去りて善良なる吊寢臺を入れ、以後は其上に臥すとなし、前記の如く食糧品其他浸れ易きものを運び入れ、次に屋根上の入口を作りたる後、更らに一層の勞力を費やして、岩穴の前に土石を運び天幕の内に、高さ一尺五寸餘の土手を築きて、之を岩穴の塀となし、以て余が家の地窖となしぬ。

住居は既に堅牢に出來上りたれば、余は又更らに他の思考に移らざるべからざる際に當り、連日の降雨密雲を決して來り、電光俄かに閃めき、迅雷轟然として鳴り渡りたれば、火藥の爆發せん事を恐れ

て、心俄かに沈鬱せり。敢て電光を恐るゝが爲めにあらざれども、只火藥が之に因りて爆發するときは、余の一身の防禦の手段と、食物を得るの手段とを同時に失ふの惧れあればなり。而して火藥に電火を導かば余は其傍にありて、犬死するに極つたりと雖、自己の危險に付ては憂慮すること却て薄かりき。幸に日を經て何事もなく荒は收まりたれば、余は住家障屏などの細工を一時中止して、先づ火藥を分け置くの用に供する甕及び箱の製造に從事し、少々宛數箇に分け蓄ひ、何時如何なる事の生ずるも、盡く同時に爆發せざる樣成るべく遠方に離し置かんと欲せり。二週間の勞力を以て甕及び箱の製造は終りたりしが、火藥總計凡そ二百四十封ありしを以て、之を別つて百包餘となせりと覺へぬ。尤もかの濕りたる數斗の火藥は爆發なしと思ひしにより、個は余が新穴則ち余が庖厨に入れ置き、他は盡く岩の穴の中に藏し、濕らざる樣注意を加ひ、且つ入れ置たる場所に一々目標を付したりけり。

以上の細工をなす間にても、毎日少くとも一度づゝは樂みがてら食用に適する獲物のあるやなしやを見、兼て如何なる物が此島に產するかを知らん爲め野に出でぬ。初めて余が出でし日に早く島に山羊あるを見出して、大に滿足せり、然れども山羊は憶病にして敏く、且つ足早のものなれば、之に近づくは世に最も困難なる業なり。猶余は是に失望せず、時には射殺し得べしと信せしが、果して一日其

逸逍するを見出し、近づき來るを待ちて射斃せり。蓋し彼等山羊は澤に於て余を見るときは、其岩の上に在るに拘はらず、恐怖の躰にて北げ去ると雖、若し彼等澤に秣ひ、余岩の上に在るときは、毫も余に氣付かざるより考ふれば、其眼の付き所の工合によりて視線直ちに下方に注ぎ、容易に上方の物を見ると能はざるが如し。依て余は爾來此理に依りて先づ岩に登り、彼等の澤に出來るを待ちて。擊ちしに、何時も命中を誤らざりき。余が初めて射殺せし山羊は牝にして、傍らに小山羊を抱ひ、乳を與ひつゝありしが、之を射て余は一片の哀憐惻々として禁ずる能はざりき。其故は親山羊の斃るゝに小山羊は猶依々として其傍に在り、余が往ひて親羊を取上げ肩に懸けて持歸るに、小山羊は余の後を追ふて天幕の外まで來れり、餘りに可憐なれば余は母山羊を地上に置きて、小山羊を兩手に抱き、養ひ馴れしめんと欲して、之を内に入れ置きしが、食物を食はざれば余は遂に之をも殺すの已むを得ざるに至り、余自から之を食せり。此等二頭の羊肉は多時の間余が食料となり、大に貯蓄食料を節するを得たり。

住居も既に定まりたれば、茲に火を熾す爐と薪を焚やす竈を供ふるの必要を生じたり、是に付き余は如何になせしか、又如何に穴を擴げ、依て以て如何なる便利を感ぜしかは、後に詳說すべしと雖、今聊か余が一身に就ての話說、及び心事の物々を說かざる能はず。

余一日熟ら身世の轗軻なるを思ふて、一の悲しき想像を浮べり。蓋し余は敢て暴風波の爲めに驅られて、人間交通の航路の外に數百里を距てたる絶海の孤島に棄られずとは雖、余を此寂莫たる無人の地に於て、孤獨の生涯を送らしむるは、天の決定なりと信ずるの理由ありと思ひば、涙は雙眼に溢れて顏に注ぎ、悲歎極まる所なし。依て亦謂らく、何故に神は斯くまで余を助けなく見棄て、壓抑して、生活するも之を感謝するの理なきに至らしむかと、自から胸中に議論するとも往々なりき。然ども斯かる悲觀は常に他の理論によりて打消され、心機忽ち快活に復する事あり、特に或日の如きは手に鳥銃を以て海濱を歩しつゝ、余が現在の有樣を想ひ回して、憂愁に沈みしが、忽ち別箇の理論子（理論を人と見て）余に對て曰く、ヨシ汝が今寂寥の悲境に在るは眞に然り、然れども願くは記憶せよ、汝の同僚は今何くにあるや、汝は嘗て合せて十一名にて短艇に乘じ來りしにあらずや、而して他の十名は今何くにあるや、何故に彼等は助からずして、而かも汝は獨り助かりしか、此島に在るは海底に沈むに孰與ぞと。是に於て余は海上を見て感慨措く能はず、顧みて不幸中にも幸あり、悲中一層の悲あるを覺れり。更に又謂らく余は如何にも好く食物を得たり、若し船が其乘り上げたる場所より漂ひ來りて、彼程まで海岸に近づき、且つ船中より多くの物品を得來るに充分なる時間なかりしならんには、余の境遇は如何なるべきか、則ち余が初め海岸に漂着したる時の如く、生活の必要品なく、又之を獲る爲めに必要なる品物なくんば、余が境遇は如何なるべき乎と。思ふて此に至り、覺えず高聲を發して、獨り自から言て曰く。特に若し余に鐵砲なく火藥なく、又以て細工すべき道具なく、衣類、寢蓙、天幕及び被物なくんば、余は如何にすべかりしぞと。而して今や總て此等のものを充分に所有し、且つ他日火藥盡きて鐵砲を用ゆる能はざるに至るも、食糧を得るの途に乏しからずして、余が生活する間不自由なきを得るの望あるは、余が初めより不慮の事に備ひ、及び他日火藥の盡きたる後、若くは健康衰ひ躰力衰ひたる時の用意を怠らざるによると雖、抑亦天の惠める幸と云はざるべからず。

余は今嘗て世界に聞きたる事なき程、最と寂寞なる生活の悲しき舞臺を寫さんとするに當り、初より順序を追て記述せんと欲す、顧みれば余が初めて此不快なる島に足跡を印せしは、九月三十日にして、時正に秋分に入り、短景人を催ふして昇りたる大陽晋時に傾く候なりき。余が觀測によれば、此島は北緯二十二度に横はるを以て、特に然りしものゝ如し。左れば此地に在ること十日乃至十二日の後、或は日曆を忘れ、安息日すらも忘るゝの惧あるを思ひ、手控書もなく筆墨もなくして、記憶に便するの方に乏しきが故に、何かの法を以て之が忘却を防がんとせり。依て大なる柱を作りて大十字架となし、上に大文字にて「千六百五十九年九月三十日を以て余此に上陸す」と書記じ、且つ柱の二面に毎日一の刻目を作り、七日毎に之を少しく長く刻み、一月毎に猶一層長く刻みて、日月の記憶とな

し、依て以て週、日、月、年の計算をなしぬ。

次に讀者の注意までに一言すべきは、余が嘗て船より種々の物を持ち歸りたる中に、格段の價値なきも、余に取りては非常に必要なる物にして、前に畧し記さゞりし夥多の物あり。就中ペン、インキ、紙、及び船長、水夫、鐵砲掛、大工等の荷包、三四本のコンパス、算術器械、日時計、望遠鏡、海圖、航海日記帳等は其著るしきものなりしが、至急要用なきを以て束ねて片隅に置きたるまゝ多時忘れぬ。又余は前年英國より到着したる貨物の中に入り來りし、三冊の美なる聖典を余が荷物中に見出し、幷びに葡萄牙語を以て書きたる天主教の祈禱書二三冊と、外數部の書籍を獲たれば、丁寧に之を保存したりき。又茲に忘るべからざる事は、嘗て余等が船に一頭の犬、二疋の猫ありて、犬は余が始めて貨物を船より持ち歸りたる翌日、自から泳で海岸に着し、猫は筏に乗りて同じく余が許に來り、爾後數年間親實に余に奉侍し、或は余が爲めに物を取寄せ、或は余の膝下に圍坐するが故に、幾分か余の寂しき心を慰めたり。唯此等の生類は余と談話すること能はざるを憾とするのみ。猶其面白き傳記は後に、記述する時あるべし。既に前に記したるが如く、余は這度ペン、インキ、紙を見出したれども、成るべく節儉して之を用ゐ、漫りに書き付くることをなさず、而して其インキの有りし間は事物を明詳に記し置くの便ありしも、一度盡きたる後は復び之を製するの方法を知らざれば、最早何事も記す

る事能はざるに困じたり。

以上述べたるが如く、余は多くの物品を堆積せるに拘はらず、猶心中種々の物の不足を感せり。インキの如きは則ち其一にして、地を堀るに用ある鍬、鶴嘴、耡等も亦其中たり、此他縫針、留針縫絲も暫時にして欠乏し、麻布は多くの困難を要せずして得るの道ありしも、針、絲なければ用をなさず。斯く諸道具を欠乏する爲め、事をなすに困難を來す、少々にあらず、例へば住所の周圍に小なる籬を作るにも、殆んど一年を費やし、重ふして持ち扛げ難き底の柱を得るには、切り旦枝落し等に長き時間を要するのみならず、之を居所に運搬するに更に多くの時間を要せり。故に一本の柱に二日を費やし之を地上に振込むに更に三日を費やしぬ、尤も柱を植ゆるには始め重き木材を以て地をくぼめしも、後に鐵挺を使用せしが、其之を使用するは却て力を勞する事多かりし。然れども余に充分の閑暇あればとて、斯くも勞力を費やして自から苦むも何等の要用なく、且つ爲す事も殆んど無くなりて、毎日一二回宛、食物の穿索に島を見廻るの外、身は全く閑暇となれり。

今や余は一身の艱苦に陷りたる事情を回顧し、併せて現在の境遇を考察し始め、尋で筆を取て事の概略を記しぬ。固より余が死後と雖斯かる蠻島に來るものあるべしとも思はれざれば、記して後日に遺さんとにはあらず、亦毎日感得したる思想出來事を記して自から傷むの種となさんにはあらざれど

も、偶〻胸中に浮べる理論が失望落膽を慰むるに足るものあるを以て、試に幸不幸を對照し、余の現況よりも更に一層不幸なるものを擧げ記して、聊か安慰の種となせり。蓋し余が此對論は宛かも債務者と債權者の辯論の如く、受けたる苦痛を輕ふして、感じたる安慰を大にするの傾あり、公平なるものとは言ひ難し。

不幸

余は恐ろしく寂しき孤島に棄られて、
全く歸來の望を絶たれたり。

* * *

余は不幸の者となるため、特に世間より撰み出され、且つ放ち出されたり。

* * *

余は人間界より別たれて、獨居の人となり、人間社會を追放せられたるものなり。

* * *

余は人若くは、獸の暴虐を防ぎ、又は之に抵抗すべき手段を有せず。

* * *

余は共に談話して、打興ずる一人の友をも有せず。

* * *

斯くの如く列記し來れば、余が境遇は世界に稀なる不幸のものなりと雖、亦聊か神に向て、感謝せざるべからざるものあるを見るなり。世人請ふ以上の一文を以て、此世に最も愍れなる經驗を嘗めたるものより呈したる鄙訓として存せよ。而して此を以て自家境遇の安慰の參考となし、奮勵して以て益

幸

然れども余は幸に生きて、他の仲間の人々の如く溺死せざりき。

* * *

然れども余は亦死より助かる爲め、特に船の乘組員中より撰み出され、而して神は余が生命を救ひ給ひ、此境遇に放免し給ひり。

* * *

然れども斯かる荒地に於て食物を得る能はざるも、敢て飢ひず又死ざるを幸とす。

* * *

然れども余は今幸にして嘗て亞弗利加海岸に見しか如き猛獸は、一も在る事なき島地に置かれぬ、若し彼處に難船したらば其不幸如何ぞや。

* * *

然れども神は不思議にも海岸に近く船を送り、余をして必要品を得せしめ給ひ、生涯中充分なる食物を得せしめ給ひぬ。

* * *

々幸福の域に進まれよ。

余は今聊か安慰の思を得て、失望の中より奮ひ、新なる希望を以て海上を見渡し、船はなきかと點檢し。又此等の事を止めて、更らに生活方法を整へんと欲し、能ふだけ容易に必要品を得るの方法を講せり。余は既に岩側に天幕を張りて、周らすに杙、鏈の堅固なる圍障を以てしたる余が住所の事を記したり、此住所は寧ろ胸壁とも言ふべきものにして、外側は厚さ凡そ二尺の芝土を積みたり、其の後(一年半後と考ふ)余は又天幕の中より桷を出して、岩に懸け木の枝を以て之を葺き霖雨期の雨水を防けり、

余は又如何にして此構内と、家の後にある岩穴に總ての貨物を運び入れしやを記したり。始め此等の貨物は只雜駁に積み重ね置きしのみにて、秩序なく散らばり、坐するに所なく、坐すれば身動きもならざる躰なりしが、是に於て岩穴を取り擴ぐるの必要を感じ、從前より稍深く堀りぬ。穴は軟かなる砂岩なりければ、思の外に勞力を費やさず、速に出來たり。次で又猛獸の害は稍安全に扞護したれば と思ひ、横に右方の岩を穿ち、更に右に屈折して外部に堀り出で、余が胸壁と外部との通路を開り。而して此穴は外より入るときは、天幕の奥に出つるを得るものなれは、内外住來の便にするは勿論、貨物を置く納戸ともなれり。

次に余は日常最も必要を感ずる、器具、就子椅子卓子を作らんと欲しぬ、此二品なければ余は世界に有する快感の一般を欠くものにして、心地好く書くと能はず、食ふと能はず、諸々の務を執ると能はず、故に余は速かに此二品の製作に取掛れり。因て思ふに道理は數學の根原なれば、道理に依りて事物を定規し、以て其正しき判斷を下すときは、何人も時に數學師たり。現に余は曾て器具を用ゐたることなしと雖、猶勞力、注意、考計力を以て何物をも製作し得たり。況して器具あらば天下作り得さるものなかるべし。故に余は僅かに一挺の手斧、同く一挺の斧とを以て、種々の物具を作れるの事實なるが、斯かる事は曾て世間に例なきことなるべく、余も亦爲に非常の勞を犯すを免れざりき。例へば一枚の板を要する時は、先ッ木を切り倒し、斧を以て平たく兩面を削り、相當の薄身となるまで截りもて行き、終りに小斧を以て、滑らかに之を削りて、漸くに出來するなり。斯くする時は一本の木より僅か一枚の板ほか出來されとも、亦致方なき次第にして、一枚の板を得るにも實に莫大の勞力と、多くの時間を費やさゝるべからざるのみならず、一に忍耐の力に依らざるべからず。然れども時間と勞力とは余の惜む所にあらざれば、今椅子を製作するに當りても亦實に同樣の困苦を嘗めたり。尤も板は船より持ち歸りたる短かき片々を用ゐぬ。斯くて椅子卓子も出來たれば、余は更らに大なる數枚の板を取出して、深さ一尺五寸ばかりの大棚數階を岩穴の一側に懸け設け、諸道具、釘、鐵器類を置

く所となし、品物を區別して、秩序正しく銘々の場所に蓄へ、入用の節は直に見出し得る樣にせり。又岩壁に數本の釘を打ちて、鐵砲其他の物を懸くる所となし、事物整然として各其所を得たれば、余が岩穴は、宛も必要品の陳列場の如き觀あり、而して何にても要する所の物は手に應じて取出すの便を得たり。是に於て凡ての物品の秩序を整ひたるを見、特に所有の必要物品の夥多あるを見て、余が快感言ふべからず。

此頃より余は日誌を付け始めぬ、是より以前は勞働の爲に忙はしきと共に、精神も錯亂し居たれば、日誌を記さず、ヨシ之を記するも味なく哀しきとのみなりしならん、例へば

九月三十日。余が溺死を免れて海岸に上りし後、神に向て感謝する間もなく、飲みたる多量の鹽水を吐き、僅かに生きたる心地したれば、兩手を打振り頭と顏とを擦しつゝ苦し苦しと叫びながら海岸を走り廻り、疲勞極りて地上に打倒れしと云ふが如き位ならん。

此後數日を經て小さき山の巓に登り、船を見んと望みて海上を見渡すに、此時心の幻像かは知らざれども、遙か沖合に一帆を見る心地したれば、大に打喜びて瞳のぼけるまで確と見詰るに、端なく消え失せたり。由て力なく打倒れ、小兒の如く高聲を擧げて泣き叫び、己が愚痴より自ら悲哀を增したりけり。

然れども斯かる悲哀の情は間もなく薄らぎ、特に椅子卓子も出來して家具一式奇麗に齊整ひ心地清々としたれば、是より日誌を記し始めたり。今左に有らん限り其寫しを讀者の閲覽に供せん、(前の記事を重複するの慨はあれども)後はインキの欠乏したる爲め已ことを得ず廢絶したり、讀者豫め諒せよ。

第七回

日誌を付け始む。曆を製造す。農具を製造す。
蠟燭を製す。稻及び大麥の生出を見て大に喜ぶ。

日誌

千六百五十九年九月三十日。憐れに薄命なるロビンソン、クルーソー則ち余は、海上の暴風雨に逢ふて破船し、乘組員悉く溺死せし中に獨り殆んど危き處を免れ、此寂寥荒寞たる不幸の島に漂着したり、余は此島を名けて「失望島」と云ひぬ。此日は海岸に登りても猶種々余が薄命の境遇を嗟嘆して夜に至れり。則ち今や余は食物、住家、衣服、武器を有せざるのみならず、亦之より往く可き處をも知らざる身の、今更ら助かる途もなしと思へば、余の前途に横はる者は唯一死あるのみ。或は野獸に食はれん、或は蠻族に虐殺せられん、幸に此等の危難を免るゝも、食物の欠乏より餓死を免る能はざる

べし、など眼前に横はる不幸の事情を想ひ續けて此日を徒消し。夜に入りては猛獸の來襲せんことを慮りて樹木の間に眠りぬ。此夜終夜雨降り、蕭々として絶間なかりしが、余は快よく眠れり。

十月一日。朝、昨日難破したる船の潮流の爲めに浮み出で、泛々として此島の方に流れ來居るを發見し、其意外なるに驚きたり。余は又船の依然舊躰を存し、大に破損せる狀なきを見て、風さへ少しく穩にならば、吉ちにかの船に入りて食物及び其他の生活に必要なる者を得べきを想ひ、心頗る愉快を感ぜしが。又忽ち乘組員の悉く溺死したるを想起し、憂愁の情禁ずる能はず、想へらく、かの時若し余等乘組員が總て船中に止まりたらんには、或は破船に至らず、少くも乘組員悉く溺死するとなかるべく、而して若し數人にても助かりしならば、此破れたる船躰を以て別に一隻の小船を作り、余等の欲する所に行き得しならんと。斯くの如き想ひに多くの時間を費やし、既にして船の漸く近付たるを看、先づ能ふ限りは水を渉りし、更に泳ぎて船に達したり。降續きたる雨は此日も尙止まざりしが、唯風は全く穩かになりぬ。

十月一日より同く二十四日に至る。此間は船中より物品を取出して陸上に運搬するに費やしたり。余は總ての物品を筏に載せ滿潮毎に之を陸に運びしが、天氣は概して雨降り、晴天の日は至て稀なりき。蓋し此間は此地方に於ける陰雨の季候にやありけん。

十月二十日。筏を顚覆し其上に積載したる物品を水中に落せしが、幸にして水底淺く、且つ其物大概重きものなりしが、多くは潮の退きし時に引上げたり。

十月二十五日。飈々たる狂風に和して、雨は終日終夜降り續きぬ。一段强く吹き出したる風の爲めに船躰悉く打碎かれ、其紛々たる片屑の波間に出沒する外に、瀰々たる海面更らに一物の眼界に入るものなきに至れり。余は此日終日船より取り來りたる物品の雨に濕ふを防ぐに忙はしかりき。

十月二十六日。余が住所を定めんが爲めに終日海濱を逍遙し、野獸又は蠻族の夜中に來襲せざるべき場所を探求せしに、晩烟朦朧たる頃に至りて、漸く一の巖崖の下に適當なる場所を發見したり。乃ち此所一帶半圓形の地を限りて、之を余が陣營と定め、壁を築て之を固め、壁の構造は二重塀となし、內塀は錨索を以て作り、外塀は泥土を塗らんと決定したり。

二十六日より三十日に至る間は、此新住處に總ての所有物品を運搬し、盆を覆すが如き猛雨の日にも、決して怠るとなく、非常なる勉勵を以て之を務めぬ。

三十一日。朝、食物を求め、兼ては此地の樣子をも見んとて、鐵砲を携へ島內を巡遊しけるに、幸に一頭の牝山羊を獲たり、然るに其子山羊は、余に尾して住處迄來りぬ、飼ひ置かんとしたれども食物を食はざりければ其後終に之を殺しぬ。

十一月一日。此日巖壁の下に杙を打ち振りて天幕を張り、成るべく擴げて吊床を設け、今宵始めて此中に眠れり。

十一月二日。箱板及び筏を造りたる材木の切片を集め、之を家の周圍に立てゝ垣を結び是より内を以て余が城郭と定めぬ。

十一月三日。鐵砲を肩にして出で、鴨に似たる鳥二羽を獲て歸る、誠に甘美なる食料なりき。午後は食卓の製造に從事す。

十一月四日。今朝より日課を定め、時間割を作りて業を執る、則ち左の如し。

第一、毎朝雨天の外は二時間乃至三時間、鐵砲を携へて郊外を漫歩逍遥す。

第二、郊外より歸りて後十一時迄業務を執る。

第三、食事。

第四、此地は非常の熱氣なれば十二時より二時迄睡眠。

第五、晩景再び業務を執る。

此日課に從ひて此日及び翌五日全日を儘かに一箇の食卓製造に費したりき。蓋し余は此時未だ甚だ憐むべき職工なりければなり。左れど年月と必要は、此後ち間もなく余を完全なる天成的職工となし、

余をして如何なる人も此二者に依て、余の如くなり得べきを信ぜしめたり。

十一月五日。鐵砲を携へ犬を率て獵に出で、一匹の野猫を得たり。野猫の肉は何の用にも立たざりしかとも、其皮は柔軟にして用ふるに堪へたり。余は爾後捕獲したる動物の皮は、悉く保存したり。此日海濱に沿ふて歸る中途、未だ曾て見しとなき幾種の水鳥を見ぬ。又二三頭の海豹が余の注視する間に遁げて海に入りしを見て、寧ろ驚き怪しみたりき。

十一月六日。朝の散策を了りて再び食卓製造に從事し遂に之を完成す、素より未だ余の嗜好心を滿たすに足らず、且つ間もなく修繕の要を感したりき。

十一月七日。今日より天氣漸く定りて晴天となれり。七日、八日、九日、十日、及び、十二日半午(十一日は日曜日故休業す)の業務時間を費やして一箇の椅子を作る、種々の苦辛に依りて稍々完全の形とはなりしが、未た以て余の心を喜ばすに足らず、製作中と雖も幾度か打毀ちて、更らに改作したる者なり。

附記す、此以後日曜日も休業したるとなし。是れ蓋し誤て日曜日の記號を柱に印するを忘れてより、何日が日曜日なるやを辨する能はざるに至りたればなり。

十一月十三日。此日雨降る、心氣甚爽快を覺え、乾燥したる地上亦爲めに濕ふを得たり。左れど恐ろしき雷鳴電光の之に伴ふて來りたれば、火藥の爆發せんとを恐れ、幾度か悚然として戰慄したり。

故に雷電の收まるや否や、蓄へたる火藥を成るべく多くの小包に頒ち、以て其危險を免れんとを務めたり。

十一月十四日。　十五日、十六日。此三日間に小さき方形の箱數箇を作る、之に大約一ポンド多きも二ポンドに過ぎざる火藥を頒ち入れて、成るべく安全なる場所へ箇々の間を遠くして頒ち置きぬ。此三日の中一日、名もしらぬ大なる鳥を獲しが其味殊の外美なりき。

十一月十七日。　此日更らに家居の便利を增さんが爲めに、天幕の後の巖崖を堀りて室內を擴張せんとを企てたり。

附記す、此工事に付て最も不自由を感せしは三種の道具の欠乏なり、第一は鶴嘴、第二は鋤、第三は運搬車又は籠なり。仍て余は暫らく手を止めて此等の道具に代用すべき者を造らんと思ひ、先づ鶴嘴に代ふるに少し重けれども鐵挺を以て最も適當とし、第二の鋤は最も必要なるものにして之れなくんば何の働きをも爲す能はざる位なるにも拘らず、遂に代用すべき物を考え出すこと能はざりき。

十一月十八日。　此日木材を得んとて外に出でしに、偶々森の中に一株の適當なる木を發見したりしが、其材質の非常に硬くして恰もブラヂルに於て「鐵木」と稱するものに異ならず。されば之を伐り倒すに烈しき勞力を費やし、殆んど斧を毀たんとして漸く目的を達しぬ。而して更らに之を小片に切り割きて家に運ばんとせしに、其材量の著しく重きが故に一方ならざる困難を感じたり。左れどかく迄に堅硬なる木材を得たれば、先づ多くの時間を費やして漸次に之を鋤の形に作り出し、遂に其柄の形は我英國にて用ゆる物と殆んと異なる所なき迄に削たれとも、尖端に鋼鐵を付せざるが故に永くは持續すべからず、唯一時余が用を辨するに於ては毫も鐵を付したる物と異なるとなかりき。而して余は此鋤の決して普通の鋤に非ざるを信ずる者なり、何となればそが獨り形式上に欠くる所あるのみならず、英國の鋤は之を製造するに當て、しかく永き時間を費やすとなければなり。鶴嘴と鋤は既に整ひたれば今は籠又は運搬車を要するととなれり、然れども余は籠に付ては如何に考ふるも製作の手段を知らず、且つ此の如き器具の材料に最も必要なる柔かき小枝は到底此地に見出す能はず、少くとも未だ俄に見出す能はざりしなり、又運搬車に付ては車輪を除くの外は盡く作り得べしと想ひしも、素より冒て之を造りしとなければ、如何に之を造り始むべきやを解せず。且つ最も緊要なる車軸となすべき鐵棒を得るに途なかりしかは、遂に斷然之を作るの計畫を廢め。巖崖より堀り出すべき土石を運搬するには、かの工夫等が煉瓦を積む時に、石灰類を運搬するの用に供する運搬桶を用ゆべしと考え、乃ち直ちに之を製造せしが、此器具を作るには勿論かの鋤を製せしほとの困難はなかりき。左れど此

運搬器と鋤を製造し、且つ運搬車を作らんとする無益の計畫のために殆んど四日の日子を費したり。此間と雖も余は大概鍬砲を携へて散策し、又大概食用に供すべき物を獲て歸りぬ。

十一月廿三日。　既に道具も整ひたれば、力と時間の許す限り毎日勞働し、十八日を費して物品を適宜に排列し得る丈に巖崛内を擴げ、且つ深ふしたり。

附記す、此日子間余は巖崛内を物置所、武器庫、厨房、食堂、及び地窖として用ゆるに適當ならしめんと欲し十分に之を開鑿せしが、而かも住處は天幕の中と定め、淋雨の候、大雨防ぐ可らざる時の外は大概此中に宿したり。後烈雨頻に來り堪ゆ可らざるに至ると屢々なるより、遂に一工夫を案出し長き棒を集めて筏の形に造り、之を巖に持たせ掛け、其上に船旗及び茅の如き木葉を置き、以て家の屋根を被ひたり。

十二月十日。　今や余は既に巖崛内の業務を終りたりと考えける時、不意に大なる土塊の巖穴の上方より落ち來るに會ひ、(餘り太く穴を穿ちたるが故ならん)余は之を見て驚き且つ怖れぬ。蓋し一理なきにあらず、何んとなれば余にして若し此下に在りたらんには、決して墓堀男を要せざるべければなり。是に於て余は此土塊を片付けざるべからざるのみならず、第一に緊要なる業務は此後再び落ち來るべき土塊を支ふべき天井を作るとなるを感したり。

十二月十一日。　今日より天井の造作に從事し、先つ二本の柱を作り、其上に二片の板を載せ、板の下に尙數本の柱を建て、一週間を費やして安全なる屋根を造れり。然るに其板を支へんが爲めに列べ立てたる柱は、亦自ら家内を區分するものとなりき。

十二月十七日。　今日より二十日迄室内に數階の棚を設け、柱に釘を打ちて之に物を掛くる等の用意をなし、室内漸く整理するを得たり。

十二月二十日。　今日より物品を巖崛内に運び入れ、專ら戸内を整理せんと欲し、先づ數片の板を置て之を料理檯となし、食料品は總て此上に排置するとに定め。又別に一箇の卓子を作りければ、板は漸く欠乏を告げたり。

十二月二十四日。　終日終夜大に雨降る、依て戸内に閉居して出てず。

十二月二十五日。　終日雨降る。

十二月二十六日。　雨止み天地清凉、頗る爽快を覺ゆ。

十二月二十七日。　若山羊一頭を殺し、又脚を射て他の一頭を捕へ、繩を以て之を牽き歸り、折れたる脚を醫療したり。

附記す、山羊は死せざる樣に注意したれば、脚も漸次に快癒して元の如き健脚となり、余がシカク

永く養ひたるを以て遂に余に馴れ、戸邊の青草を食ふて敢て逃げ去るの樣子なきに至れり。余は此時より始めて彈藥を用ゐ盡したる曉にも、尙食料を有する爲めには須らく馴れたる動物を養ふべきことを悟れり。

十二月二十八日。　二十九日、三十日。大暑酷熱にして微風だになし。毎晩景食料を得んが爲めに外出したる外は、常に戸內に在りて物品整列に消光したり。

一月一日。　暑熱尙減せず、早朝と晩景の涼しき時を撰んで鐵砲を携へ外出し、日中は總て閑に横臥したり。此夕島の中央部に在る澤に下りしに山羊の一群を見しが、彼等元來狐疑心深き動物なれば、容易には近付き難しと雖も、或は余の狗を驅て之を獵るを得べきかと思ひ、乃ち之を試むに決したり。

一月二日。　此日狗を從へてかの澤に赴き、先づ狗をして山羊の群を獵らしめんとせしに、彼等は頑然として頭を狗の方に向けたりしかば、狗は其敵すべからざるを豫知して、敢て一歩を彼方に出さゝりき。

一月三日。　余は尙繼族の來襲せんとを恐れ、更らに壁を厚くし、垣を強くせんとを企てたり。

附記す、此壁の事は先にも述べたれば殊更らに日誌中に略記したるが、余は此壁を築きて全く成功

するに至る迄、一月三日より四月十四日に至るの日子を費やしたるとを記せば足れりとす。壁は巖より半徑を畫きたる長さ僅かに二十四ヤルド（一ヤルドは我三尺〇一分七厘餘に當る）のものにして、巖穴の入口は其中央に在り、其廣さ又八ヤルドなり。

此壁の成就せざる限りは決して枕を高ふして眠る能はずと思惟しければ、息をも續かず打働らき、連日否時としては連週の雨にも決して避易せざりき。左れば各事各物に付て爲したる勞働の烈しかりしとは言語に絶するばかりにて、人の信ぜざるべき程なり、殊に材木を以て杭を作り、之を地中に打込む時に於て、其杭を餘りに太く作りたるが爲め非常なる勞方を費やしたり。

遂に壁は全く成就し、外側は二重塀となし、之に密接して泥土の壁を高く築き上げたれば、かくては人の若し海濱より來るとあるも。一見して以て人の住處なるとを解する能はざるべく。又後に記するが如く著るしき危難の生ずる場合のためには、余は此工事の甚だ巧みに成功したるを感じぬ。

壁を築く間も、雨天の日の外は毎日獵の爲めに林間を逍遙し、余が爲めに利益なる種々の物を發見したり。就中一種の野鳩を見出せしが、其種類は林鳩の類に屬せずして、寧ろ巖穴に棲む家鳩の類なりき。余は雛鳩二三を捕へ來て之を馴らさんと企てしか、少しく成長するや皆飛び去て復た歸り來るとなし、蓋し飼養の足らざるが爲めならんか。左れど余は此時より屢々其巢窟に至り、雛鳩を取て之を

食せしかば、彼等は遂に余が美味の食料の一となれり。

今や余は家事を取扱ふに當りて、初め製造し能はざることを想ひし、多くの器具の欠乏に依て甚しき不自由を感ずるに至れり。其第一は水を容るべき桶なきとなり。余は元來一二個の小桶を有せしが之を以て一の完全なる桶を作らんと欲し、數過間を費やして之を試みしも、余は未だ之を作るの能力なく、如何にしても水の漏らぬ樣に桶の片々の板を互ひに密着させて、之に輪を嵌めるの技術を解する能はず、遂に此事を擲ちたり。次の不自由は最初の内に蠟燭を澄費したるが爲め、近日は午後七時頃の日暮時に臥床せざるべからざるとなりき。余は記憶す、曾て亞非利加の冒險を試みたる時、蜂蠟の塊を以て蠟燭を作りしとを。左れど今此處に於ては蜂蠟の一塊だも見ると能はざるなり。然るに此不自由に應ずる一の便宜ありと云ふは曩に山羊を屠殺したる時、其脂肪を蓄へ置きしとなり。余は乃ち粘土を以て作り、日光にて燒きたる小皿に此脂肪を入れ、數條の埃絮を以て燈心となし、漸く一の燈を得たり。素より蠟燭の如き明煌々たるものに非ざりしと雖も、尙能く之を以て諸物を照らすの便を得ぬ。

かゝる業務を爲しつゝ種々なる物品を檢する中に、一の小さき嚢を見出したり、此嚢は曩に我等の船がリスボン府より航海しける時、家禽を養はんが爲めの穀類を入れ置きし者ならんと察せらるゝか、

僅かばかり嚢底に殘りし穀類は殘りなく黠鼠の食する所となり、今はモミ殼と塵の外は中に一粒の穀物ありとしも覺えねば。幸に之を利用して、かの爆發を恐れし火藥を安全に保つべしと考へ、先づ之を巖下の壁の邊りに持ち往きて、丁寧に鼠の喰荒したるモミ殼を振ひ落したり。蓋し余が之を棄てたるは前に紀したる大雨の僅々數日前なりしが、其後一ケ月も經過しけるに、巖下の壁邊に青く嫩芽を吹き出したる草あり。定めて之れ名も知らぬ植物なるべしと思ひ過ごせしに、漸く成長するに從ひ十穂餘の穂を出しぬ、是れは不思儀なるかな、此植物は實に我歐洲の、否實に我英國の大麥なりけり、余は實に言ふべからざる驚喜を感しぬ。余は從來未だ曾て宗教なるものを信仰せず、宗教と曰へる觀念を有せざりしを以て、如何なる事に逢ふも冷然として少しも怪しむとなく。唯是れ此機會なるが故に此の如き事あるのみと思ひ、若しくは只口癖に神が此の如くなるを喜ぶが爲めのみと云ひ。未だ曾て神の特別なる御意に依りて此の如き現象ありたり、若しくは神が世界の事物を秩序正しく管理し玉はんが爲めに、此の如き現象を下し玉ふなりと迄に信仰したるとなかりき。然るに今不思儀にも大麥の此處に生せるを見ては、素より此地の氣候の穀類に適せざるを知り、且つ此大麥が如何なる理にて突然此處に生じ來りしかを知らざる余が心に、不思儀の感情油然として湧き來り。是れや必定難有き神樣が特別なる慈悲を垂れ給ひ、種子をも蒔きしとなき大麥を此處に生ぜしめ、以て此荒涼寂寞たる

果敢なき余が生活を助け玉ふなるべしと想ひ始め、覺えず難有涙にぞ咽びたりける。余は心竊かに謂らく、既にかく神の御慈悲を示し玉はる上は、是れより種々なる天然の奇事續々余の周邊に起りて余を助くることあるべしと。果せるかな、又もや巖の下に數莖の新芽を生し、萎々として叢生するものあり。取て之を見るに冒て亞非利加の海濱に於て見たる米の實る稻莖なりければ、益々奇異の想に堪えざりき。余は既に此等の物の生するを見て、只管に神の我を助けんとて爲し玉ふものなりと信じければ、尙此

外に必す島の此處彼處に生じたるものあるべしと考へ、是迄毎日獵の爲めに歩みたる島の隅々、幾多の巖島の下など隈なく探り求めけるに、余は遂に又何物をも見出す能はざりき。さては怪しき事なんめりと疑ひの心晴らし兼ねたる時、忽ちハタと思ひ當り、過ぐる日囊よりモミ殼を振ひ落せしとこありしが、此等の植物を生せしならんと悟りければ、疑惑は忽ち晴れて迹をも止めずなりぬ。而して余は茲に殊に白狀せざるべからざるは、此疑惑の解けて大麥又は米の生したるは唯普通の事となりたると同時に、忽ち神に向て感謝する如き宗教心を失ふたり。然れども熟ら考ふるに、余は當時尙神に向て感謝すべきものなり、神は眞に余を惠み玉ひたりしなり。十粒乃至十二粒の穀物能くも鼠に食はれすして殘り、宛かも天より落ちたらんが如く高星の蔭に生せしは眞に神の恩惠に非すとせんや。余にして若し他の處に之を棄てんには、必すや暑熱の爲めに燒かれて、決して此の如く善く生長すると能はざりしならんに、其然らざりしは亦偶々神の冥助ならんはあらす。

此時既に六月の末つなりしが、余は最も注意して大麥の穗を培養し、實のりたるものを採て更らに之を蒔かんと欲したり。而して此の如くせんには、此次期に於て之れより多量の大麥を得て、余一人を支ふるには十分の麵包を作り得べしと想ひぬ。左れど此豫想は誤まれり、蓋し蒔く可らざるの時に蒔きしを以て、其成長繁殖豫想の如く速かならず、而して四年の後に至る迄は僅少の穀物をも食す

る能はざりき。

大麥の外に生したる二十莖乃至三十莖の稻も、亦大麥と同じ用方を以て同じ目的を達せんと欲し、同じく深き注意を與へたり。則ち麵包を作る爲め、否寧ろ他の食物を作るが爲に。蓋し余は米粉を麵包の如く燒かずして料理するの方を解したればなり。記事中の議論は姑く擱き、今や再び日誌に歸らんに。

余は壁を作らん爲め三四ヶ月間激しく勞働し、四月十四日に至て全く之を成功せしが。外面より來る人の一見して余が住處なるを悟らさらしめんが爲めに、一面に壁を築きければ、此時よりして出入は門戸に依る能はず、梯子を作り之に依て壁上を越え、以て往來するに決したり。

第八回

恐ろしき地震恐ろしき暴風雨。大龜を捕ふ。難破船より多くの物を得。

熱病、瘧病を煩ふ。恐ろしき夢を見て發心す。懺悔。聖書を發見す。

四月十六日。戸外にて梯子を作り之に依て壁上に達し、又之を引上げて戸内に入れぬ。かくて内には余が膝を容るゝに十分なる室を有し、外より來る者は先づ壁を攀躋するに非ずんば内に侵入する能はざるを以て、茲に始めて余の爲めに完全なる墻壁出來たり。然るに余は此工事を成就し了りて漸く安

堵したる翌日、俄然として襲ひ來りたる災厄の爲めに、殆んど全く余の事業を破壞せられ、余自身も亦殆んど殺されんとしたり。其事實の顚末左の如し、

余は其日巖崛の壁内、天幕の後部、崛門の入口に於て働きつゝありしに、俄に恐ろしき震動起り、忽ち巖崛内の屋上より一團の土塊崩れ落ち、窟内に立てたる二本の柱は之に當りて微塵に碎け、同時に余が背の方に在りたる小山の一端、恐ろしき轟を爲して落ち來れり。余は愕然として此光景に怖れしが未だ其何たるを解せず、曩に崛内の一隅より土塊の落ちしとあれば、定めて又此の如きとならんと思ひしが、何樣土塊に埋められんとを恐れ、匆皇梯子を攀ぢて戸外に出でしに、何ぞ圖らん震動は是れ恐るべき地震にして、余が壁上を越えて地上に下るや否や、殆んど八分時間宛を隔てゝ、如何なる堅固の建築も決して顚覆を免る可らざる程の激動三回を感じたり。余を距る半英里の處に屹立したる大巖の頂上は此震動に會て忽ち顚墜し、余が前面半英里程距りたる所に落ちて、其轟轟然落雷に異ならず、余は生涯未だ嘗て此の如き恐ろしき轟を聞きしとあらざるなり。左れど余は又海上の波瀾の激烈なるを見たれば、此時の震動は此島よりも寧ろ海上に於て、激烈なりしを信ずる者なり。余は此未曾有の激動に際會し、一時は死したる人の如く呆然として知覺を失ひ、海上に漂ふ時の如く頭りに眩暈を感せしが、巖片の海に落ちたる響に忽ち醒まされ、悚然として震慄し。又飜て天幕と物品の上

に落ちたる小山の一端が總て余の物品を埋沒せんを想ひ、覺えず茫然として再度の憂愁に陷れり。然れとも三四回の震動終りたる頃は漸く心を取り直し、大に勇氣を皷せしが、尙生きながら埋められんとを恐れ、壁土を越えて家内に入るの氣力なく、悲痛の頭を重ふして身を地上に投げたるまゝ復た爲す所を知らず。而して此間余の心裡に於ては別に宗教的祈禱心を起さず、唯僅かに「上帝よ、余に慈悲を垂れ玉へ」と言ひたるのみ。震動の既に終りたる時はそれすら再び口にせざりき。

かくて余の坐しける間に、遽かに一天墨を流したらんが如くに搖き曇り、今にも暴雨の來らん徵候を現はせしが。やがて吹き出でたる風は漸く其力を增し、三十分時も立たざる間に、早や恐ろしき暴風とぞなりにける。海上は一面泡沫を浮べ、濱邊に打寄する波の響、槃々として凄まじく、喬き木も根より割けて吹き倒され、眞に恐ろしき暴風なりしが。三時間ばかり荒れに荒れて漸く其力を弱くし、尙二時間ばかりを經て風は全く收まり、盆を覆へすが如き雨は代て來りぬ。余は此驚怖すべき天變地異に會して且つ恐れ且憂へ、尙爲す所を知らずして地上に坐せしが。忽ち過刻の地震は此暴風雨の徵候として來りたるものなれば、地震は復決して來らざるべく、然らば余は嵓内に入るを得べしと思ひ付きければ、急に氣力を快復し、恐ろしき雨を避けんが爲めに寸刻も遲疑せず、壁内に入りて天幕の下に坐せり。然るに雨は益々烈しく降り來り、天幕も亦之を防ぐに足らざるに至りしかば、陷落の懼

は競々たれとも遂に敢て巖嵓の中に入りぬ。尋で雨は執念くも嵓内に流れ入り、嵓内の洪水を來すの患を生したるを以て、余は止むを得ず墻壁に穴を穿ちて水を外に迸出せしめたり。斯くて嵓内に數時間を費やすも何等の異狀なかりしかば心大に安んじ、先つ我衰へたる氣力を勵まさんが爲めに、厨に入りて一杯の糖水酒を傾けたり、然れとも若し之を飲み盡さば復た補ふべからざるを知るが故に多くは飲まざりき。

此夜終夜雨降り、翌日に至て尙止まざれば、快々として嵓内に閉居したり。然るに之に依て心は益々安靜に赴き、是より如何にしたらば良かるべきかなど考へ始め、遂に若し此島にして必ず此の如き地震あるものとすれば、永き年月の間には終に生きなから埋めらるゝとあるへきを以て、最早此巖嵓内に居ると能はさるべし。然れは余は此巖嵓を出でゝ平地に小屋を營み、其周回に壁を築きて以て野獸と蠻族に具へざるへからずと決定したり。且つ余が天幕は直ぐ斷巖の下に在るを以て、再び地震するときは壓しつぶさるゝと必定なれは、是非他に移さゝるべからす。此考按を以て次の二日、即ち四月十九日と二十日とは住處を如何にして何處に移轉すべきやを考ふるに費やしぬ。生きなから葬むられんとを恐るゝより、巖嵓内に在りても安心して眠る能はず、左りとて又壁なき處に横臥するも同じく危險なるを以て、止むを得ず巖嵓内に眠りしが、頭を回らして嵓内を見れば百の事物、秩序整然と

して齊ひ、且つ誠に安固の家屋なれば、心中甚だ愉快を覺え、自ら移轉を拒むの念起るに至れり。且夫れ移轉すべき家屋を作るには頗る時日を要し、能く一朝一夕に落成するを得さるを以て、先づ其間は何處に住むへきかを考へさるへからず。而して愈々移轉すへき家屋を作る爲め、先づ一定の地を限り、其周回に杭と鎖索を以て壁を作り、之に天幕を張りて住するを得るに至る迄は、暫らく此巖崛内に起臥することに決したり。時に二十一日なりき。

四月二十二日。昨日の決心を實行すべき手段を考えしに、余は此時大に道具の欠損を感したり。元來余は三振の大斧と、印度貿易の爲めに携へたる澤山の手斧を有せしが、多くの堅くして節多き材木を切りてより、刃を損したると甚しく、大概は鈍りて用に立たず。而して余は之を磨くへき圓砥石を有せしも、使用法を知らさりしかば、以て刃物を磨ぐ能はさりしなり。仍て余は政治家が重要政務を考え、裁判官が人の生死を決する時の如く、最と愼密なる思慮を費やして、遂に綱を付したる一の車を發明し、足を以て之を廻轉すれば兩手を懷にしながら、刃物を磨くを得る樣にしたり。

附記す、余は嘗て英國に於て今余が發明したるが如き種類の物を見ず、尤も後年に至りて聞けば個は普通のものなりと云ふ。唯余の圓砥石は通常よりも大にして重きものなりければ、之を作りて十分に運轉する迄には殆んど一週間を費やしたり。

四月二十八日、二十九日。此の兩日はかの機械を以て砥石を廻はし、甚だ巧に刃物を磨きぬ。

四月三十日。麵包の漸く乏しきを見て、一日一箇のビスケット(乾麵包)にて堪ゆるとせしに胸甚だ重し。

五月一日。朝、海岸の方を眺めけるに潮の引きたる迹に桶の如き物の横はるあり、近いて之を見るに果して小さき桶にて、其傍には過ぐる日の暴風にて吹き上げられたりと覺しき船の碎けたる材木二三片あり。取て其箱を檢するに火藥を入れたる者にして、火藥は水に浸されたるが爲め、凝結して固きと恰も石の如し。左れど余は濱邊を轉がして之を持ち歸り、更らに頭を上げて船は何處にかあると見しに、難破船は普通の場合に於けるよりも、一層高く浮び出でたり。余は尙之を熟視せんとて歩を船の方に進めしが、船に近きて余は其奇妙に變化せるを發見したり。鬢に沙中に埋まれたりし前甲板は少なくも六英尺に增し、海水の爲めに破碎せられて船舷より離れたる舷は別に一方に横はり、鬢に水に浸されたりし部分、今は其上に堆積せる砂石を見る、先には三町ばかりは泳かずんば其難破の處に達す能はさりし者、今は潮の引きたる時に歩して之に達するを得るに至れり。余は之を見て一度は其奇異なる變化に驚きしが、又忽ち地震の爲めに此の如くなりしを想ひ當てたり。而して船は此地震の爲めに前よりも一層破碎し、風吹き波打つ毎に、幾度か物品を濱に寄せ上げぬ。是れより余は暫らく

住處移轉の計畫を差置き、先づ船中に入る方法を究めたりしが、船の內側には砂石一杯に込め入りたりしかば、遂に其目的を遂ぐる能はざりき。然れども決して失望するとなく、余が力の及ばん限りは中より物品を引き出さんと決心したり、蓋し一物にても船中より取り出すを得ば、必ず何かの用に立つべしと思ひたればなり。

五月三日。此日余は鋸を以て後甲板を結び付たると思はるゝ船梁を切り落し、以て水の上に現はれ出でたる船舷の中の沙を掻き出さんとせしに、偶ま滿ちかゝりたる潮の侵々と浸し來りければ、暫く工事を中止して歸る。

五月四日。今日漁を試み、終日勞るゝ迄漁せしに食すべき魚は一尾も得ず、將に歸らんとする頃漸く海豚一匹を得たるのみ。素より一本の釣針だに有せず、漁具は唯長き絹絲に過ぎざりしが猶食用に供する丈けの魚は、依て以て捕獲するを得たり、而して余は之を日光に乾かして食するの常なりき。

五月五日。難破船の上に働き、更らに他の梁木を切りて、甲板より三枚の松板を得たれば、之を連ねて互ひに結び付け、滿潮の時、流して濱に上ぐる樣に存せり。

五月六日。此日も前日と同じく難破船の上に働き、幾多の鐵釘と鐵片を得たり。左れど其勞働過度なりしかば身心痛く疲勞し、最早や難破船を捨てんと迄に感じたり。

五月七日。働かんが爲めにはあらざれども再び難破船の下に往く。再昨來梁木を切り去りたれば、船の重量にて自然に船舷を解き、船材の片々散々に釋け居りぬ。試に水上より船の內部を伺ふに依然として砂と水とに滿たされたり。

五月八日。難破船に往く。今は水又は沙の被ふ所とならずして水上に横はりたる甲板を扭ね取らん爲め鐵挺を携へ往き、二枚の板を扭取り、滿潮に乘せて濱に上げたり。猶明日の用に供する爲め鐵挺は船中に殘し置きぬ。

五月九日。難破船に往く、鐵挺を以て船舷の底を探りしに數多の桶の在るを感せしが、之を扭ねて打弛めたれども引上くること能はず。又英國產の鉛棒あるを探り得しが、引上けたれども貫目重くして運ふこと能はざりき。

五月十日より十四日に至る。毎日難破船に往き、夥多の材木及び板片と、二三百貫目の鐵を得たり。

五月十五日。鉛棒を切り取らん爲め二ッの手斧を携へ往き、一の手斧を鉛棒に當てがひ、他の手斧を以て之を擊ち切らんと試みしに、何分水中一英尺半ばかりの處に在る爲め、之を擊つと難く、手を空しくして歸りぬ。

五月十六日。前夜風痛く吹き、船は波の爲めに一層破られたるが如し。今朝食用に供すべき鳩を得ん

とて森林中に時刻を過ごし、早や滿潮となりて船に往く能はさりき。

五月十七日。余の所を距ること殆んど二英里許り彼方の濱に、二三の船材の切片吹き上られあるを見出し、馳は赴て之を撿せしに、船首の切れなりしかば、重くして持ち歸ること能はさりき。

五月二十四日、今日まで毎日難破船に働き、力めて鐵挺を以て種々の物を扭ね弛めしに、數箇の桶と二個の水夫用箱笥、潮に乘して浮み出せり。然れども不幸にして風海岸より吹きたれば、材木とブランデルの鹽豚肉を入れたる大桶の外は何物をも陸に漂着せさりき。尤も其大桶中には砂と泥水の浸入して肉を汚し食ふへからず。此日より六月十五日迄は、毎日潮の滿ちて何事もなし能はさる時に食用物を獵したる外、潮の引きたる時は常に船より物品を取出すに從事し、數多の材木板片及び鐵片を得たり。左れは余にして若し小舟を作るの方を知らば、能く此等の物を利用して一艘を作るを得へかりしならん、此他數多の鉛板の片々を度々に運搬して、總量殆んと百貫目を得たり。

六月十六日。海岸に出でしに偶々大なる龜を見出しぬ、是れ余が此地に始めて見しものなるが、實は余の不覺にて、龜は此邊にのみ乏しく、若し此島の他側に赴きたらんには、毎日百の龜をも見得しことは、余が後日に至て發見したる所なり。然れども之を捕ふるは勞多くして利少なきこと明かなりとす。

六月十七日。此日は龜を料理するに費やし、其腹中より六十の卵を得ぬ。此寂寞の鄕に來りてより、山羊と鳥類の外は他の肉類を食すること能はさりしを以て、此龜肉は余に取て實に八珍の美味にも增したる佳肴なりしなり。

六月十八日。終日降雨、終日閑居す。偶ま雨氣の冷やかなるを感し、此緯度に有るまじきことと覺ゆ。」

六月十九日。氣分甚た快よからず。天氣寒冷なるが如く身躰戰慄せり。

六月二十日。徹宵眠る能はず、頭腦岑々として痛み、身熱燃ゆるが如し。

六月二十一日。病氣益々悪し、殊に助なき身なれば端なく悲しくなりて、死するかと驚けり。此日雷てヒュルを出達し、初めて暴風波に逢ひてより以來顧みさりし神に祈りぬ。左れと病氣の爲めに心も亂れ、祈りし言葉さへ覺えず、將た何故に祈りしかをも覺へさりき。

六月二十二日。少し快癒に復したれとも、尙病の爲めに恐るべき妄想のみを描きぬ。

六月二十三日。病再び悪しく、寒氣を感じ、四肢戰慄し、頭痛甚し。

六月二十四日。大に快癒を感ぜり。

六月二十五日、激症の瘧となり、病むこと七時間。先づ寒氣を感し、次に發熱し、勞れたる汗は背に滿てり。

六月二十六日。稍快し、食ふべきものなければ鐵砲を以て外出せしに、我ながら甚だ衰弱したるを覺へぬ。漸くに牝山羊一頭を斃し、苦しなからも家に持ち歸り、心嬉しく直ちに之を焙りて食す、余に一の壺あらば烹て以て羹を作るべきに、其之れなきを遺憾とせり。

六月二十七日。病復た激しく發しぬ、終日臥床、飲食を絶つ。渴を覺ゆること甚しく殆んと爲めに死せんばかりなり、然れとも起て水を求むるの氣力なし、依て止を得ず再び神に祈りぬ。尤も此度は頭腦輕かりしかば横臥して呼ひたる言を善く記憶せり。「神よ願くは余の有樣を見玉へ、神よ余を憐み玉へ、神よ余に慈悲を垂れ玉へ」。二三時間は祈禱の外何事をも爲さゝりしが、病勢も次第に收まり、知らす〳〵眠に就きて中夜に及べり。既にして目醒めたるに氣分は大に輕快となりしも躰の疲勞元の如く、又渴を覺ゆること甚し、左れど余は室内に一滴の水をも貯へ置かざりしかば、夜の明くる迄は之を得べからず、遂に再び眠りぬ、而して余は此睡眠中に恐ろしき夢に驚かされけるが、今其概略を記せんに

――余はかの地震後暴風雨の來りたる折、壁外の地上に坐せしと覺えしに、忽ち黑雲の中より火の如く赤く燃えたる人の降り來るを看る。其狀貌の恐ろしきと實に言語に絶し、而して彼が足の地に達するや、宛かもかの地震の時の如くに地軸震動したるを覺えり。斯くて火焰を以て滿たされたる彼の恐ろしき人は余を殺さんが爲め其手に長き鎗を携え、歩一歩余に近つき程距りたる小高き丘に到りて一段

恐ろしき聲振揚げ、何やらん余に言ひかけたりしが、就中「斯くまで苦責するも汝は毫も悔悟せずと認むるが故に、今は汝を殺さゝるべからず」と言ひ終りて手に持ちし鎗を揮り上げ、殺さんと迫まる、其時余が夢はハタト醒めたり。

讀者は必ず余が此夢中に感したる恐怖心を明かに筆述し能はざるを察せらるべし、而して余は又夢醒めて後心に描きたる觀念を十分に記し能はさるなり。嗚呼余は未だ神學的智識を有せさりしなり。余が父より受けたる善良なる訓戒は八年間の放蕩浪遊と、及び常に自己の如く惡しく穢れたる人と交際したるによりて悉く犯し亂されたりしなり、余は未だ曾て仰て神に望み、俯して自己を反省したるとなかりしなり、唯心の欲する所に任せ、我を張り慾を恣にし、遂にかの頑迷なる無思慮なる水夫中の最も惡しき動物と墮落したりしなり。余の腦裡少しの良心なく、危難に逢ふて神を恐れ、幸福に會して神に謝する如き敬虔の心は、毫頭も余の心に存せさりしなり。若し余の過去の經歷を取て之を語らんか、余の此の如くなりし次第は明かに其中に證せらるゝなり。余は今日迄頭上に落ち來りたる多くの厄難を見て、神が余の罪を罰し玉ふものなりと悟る能はさりし。獨り余が父に背きたる罪の大なるのみならず、余の現今作りつゝある罪業は甚だ多く、而して此罪多き生涯に對して、此厄難は寧ろ輕しと謂ふへし。曩にかの荒凉たる亞非利加の海岸に於て大膽なる旅行を試し時の如き、余は毫も前途

の考なく、神に向て余の當さに往くべき所を指示し給はんことを祈りたる事なく、將た余の四邊に在る猛獸蠻族の危難を保護し玉はらんことを祈りたることもなく、唯かの禽獸の如く自然の性に從て、普通の常識にのみ依頼し、神に對する畏敬心なとは毫も之れなかりしなり。又かの葡萄牙の船長に助けられ、最と親切に慈悲に遇せられし時の如きも、余の心裡に少しの感謝する所もなかりしなり。其後船は復た沈沒し、殆んど溺死せんとして幾かに此孤島に漂着したる時の如きも、決して悔悟の情を起すとなく、是れ實は神の裁判なりと氣付かず、單に余は不運なる犬に生れ、常に厄運の中に生活するものなりと思ひたるのみ。

壘に余が此海岸に漂着し、他の乘組員悉く溺死したる中に、余獨り生きたるを見し時には、余の心實に喜躍の情に堪へざりき。若し此時少しく心を轉して是れ實に神の御助けなるを悟らば或は眞に感謝を表するに至りしならん。然るに余は唯單に其幸運を喜び、神の御手が特に余を救ひ上け給ひ神の殊に余に慈悲を垂れ玉ひしを想はず、宛かも一般水夫等か難破船より助かりて安全に海岸に到着し、一杯の糖水酒を傾けて早や其幸運を神に向ひて感謝するを忘ると同く余も忽ち神を忘れぬ。既に此島に漂着して後も一時は場所の寂寞を感し、人間社會と交通を絶するを歎き、生存の望、生歸の見込なきを歎じたりしも、一たび其生活の方法を發見してより。自己の犯せる罪によりて斯かる有樣に陷り

たるに想ひ及ばず、餓死の憂なきに安心して只管目前の生活に必要なる勞働に從事し、未だ曾て余が現在の境遇は天國に於ける裁判又は神の御手が余に反對するの結果なるに想ひ及はさざりしなり。日誌にも記する如く、穀物の地に生じたるは少しく余の心を動かし、是れ必ず神の御慈悲なるべしと考えしに、又忽ち其心を翻へし、猥りに其原因を蕞より振ひ落したるモミ殼に歸して、更らに神を想ふとなく、かの恐ろしき地震の時一旦神に祈りしも、震動の收まるや、直ちに之を忘れて又顧みるとなかりき。之を要するに神又は神の裁判なる意義は、少しくも余の腦裏に存することなく、殊に余の不幸厄難は神の手を以て下し賜はる賞罰なりとは想ひ及ぶべくもあらざりしなり。然るに今や余は病に罹り、死と云へる悲しき事實目前に近つきたれば、余の精神も流石に此の强き疾病の爲に弱り、余の元氣も激しき發熱の爲に盡き、是に於て永く眠りたる良心は漸く其眼を開きて、過去の經歷を反省するに至り、遂に此非常なる苦悶は皆神の積年の罪を罰し玉ふ者なるを悟れり。而して此悟道の觀念は二日三日と續き、熱病の激しきに加へて强き良心の攻擊來り、苦しさの餘りに唯數語を以て神に祈りぬ。されど尙此祈禱の中には冀望を有するとなく、唯苦悶の餘りに叫ひ出したる者のみ。實に余の此時の思想は甚しく攪亂せられ、自ら罪深きを想ふと同時に、此の如き果敢なき境遇に憐れなる死を遂げんとを想ふて、心は恐怖と憂愁を以て塞かれたり。余は叫びぬ神よ、余は如何に憐れむべき動物な

るよ、余既に病に罹るに於ては助くる者なき爲め確かに死すべき者なり。而して余の身は遂に如何になるべきかと涙はハラ〳〵と落ち來て其後は一言をも得言はず、昔し父が汝斯かる愚計を取らば神は汝を惠まさるは勿論、後日助くる人なき時に至て父の敎に背きたるを悔ふるも及ばさるべしと戒め玉ひし言の葉、今更らに思ひ出たされて悲しく、思はず聲を上げ、「今や我親愛なる父の言葉は當り、神の公平なる判決は余の上に落ちぬ。而して余を助くる人なく余の言を聞きて呉る〻人だになし。余は神が慈悲深き御心を以て、余を幸福なる生活に置かんとし玉ひし御聲を顧みざりき、然れども是れ實は余自から神の御聲に氣付かざりしと共に、父母より神の下し給ふ幸福の如何を學はさりし故なり。余は眞に愚なりき、今實に之を悲しむ。顧れば余は曩に父母か懇篤なる助力を辭し、今却て力の及はざる厄難に陷り、一の助力者なく、一の慰諭者なく、一の忠告者なきに苦しむなり」と叫び、更に「神よ、余を助け玉へ、余は今や苦悶に堪えず」と祈れり、是れ余が始めて祈禱と稱すべき祈禱を爲したる時なりしなり。且つ復ひ日誌に認らん。

六月二十八日。昨夜善く眠りたれば今朝稍輕快を覺え、病氣發作の徵候もなければ起上りぬ、昨夜の夢の恐ろしさ猶胸に殘りしかど兎に角沈思ばかりも出來ず、明日は再び癘の發すべき日なれば、今日輕快なるに乘じて明日の準備を十分になし置かざるべからずと思ひ、先づ方形の大德利に水を入れ、

寢床より手を伸ばして食卓の上に之を置き、水の惡しき分子を去らんが爲めに、糖水酒少々を入れ、能く之を混じたり、之を爲し果て〻山羊の肉一片を切り、火に炙りて食せしが、唯少しの外は食する能はざりき。それより散歩のため外出せしも身躰痛く衰弱したる上に、我今の果敢なき境遇を思ふて悲しく、明日は又た激しき病ひの來らんと想へば心細さ一入增して、一歩も足は前に出でず。夜に入りては龜の卵三箇を灰の中に入れて炙り、之れも神の御惠みなりと難有く食せしが、是れ余が始めて神の御惠みを謝して食事せし時なりき。食後再び散歩せんと欲し、用心の爲めに必ず携帶する鐵砲を取りしに重ふして堪へ得ず、僅かに歩んで直ちに地に坐し。前に一面渺々たる靜かに滑かなる海を眺めける中、偶〻一種の感想胸を衝て起りぬ。余が見たる此多くの陸と水は果して何物なりや、而して此等は何くより生し來りし乎、將た余の如き人類及びかの萬種の動物は果して何物なりや、而して總て吾等は何れより來りし乎、確かに吾人は或る秘密力によりて作られ、則ち此陸と水と氣と空とを作りし者に作られしなり、然らは其者は果して誰なりや。斯く考察し來るときは神は則ち萬物を作りたるものとなさゝるべからず、而して神若し萬物を作りたる者とすれば、其作りたる萬物を導き之を支配せざるべからず、何となれば萬物を作るほどの力あらん者は、亦確かに之を指導するの力なかるべからざればなり。然らば則ち神の作りたる天地間に起りし事實は、如何なるとも皆神の知る所に

して均しく神の指定ならずんばあらず。神にして若し果して如何なる事實をも知らば、渠は亦余が此恐ろしき境遇に陷れるを知るべく、若し如何なる事實も神の指定ならんには、余が此境遇に陷りたるも亦神の指定なるべし。余は此説に反する理由あるを見ず、故に余は神が此不幸の境に余を陷れたりと確信し、神は啻に余に對して斯かる最上權を有するのみならず、他の萬物に對しても亦然る者なるを信じ、由て亦謂らく、神は何故に余をかくまで苦め玉ふ乎、余は如何なる事をなして斯く苦しめらる乎、余は此疑問に對し自ら他人に答ふる如く心中竊かに嘲罵的に答へぬ。曰く咄、惡漢。爾は敢て自ら何を爲したるを問ふ乎、須らく恐ろしき過去の生活を反省して爾自から何事をも爲ざりし乎と問ひ。抑も爾は何に依て久しき以前に死せざりし乎、何の御蔭に依てヤルマウス碗泊所に溺死せざりし乎、船がサリー海賊と戰ひし時、何の御蔭に依て殺されざりし乎、亞非利加海岸に於て猛獸に害せられざりしは何の御蔭に依る乎、又此處に於て他の乘組員悉く溺死し爾一人助かりしは何の御蔭に依る乎、然るに尙爾は敢て何か故に此苦悶に陷りたると問はんとする乎。と

余は此自問自答的の答を以て痛く攻撃され、答ふべき一語なく、悲しげに立ち上りて家の内に歸り、眠らんと欲せしが心亂れて眠る能はず、依て燈の光を明くして椅子に坐し、端なく又明日は病氣かと思ひ出して愁然悲くなり、如何にすべきと考えけるに、不圖ブラジル人が如何なる病氣にも醫藥を用ひず、

單に烟草を以て療治すと聞きたるとあるを想ひ起し、辛ひに一の箱に入れ置きし烟草のありければ、起ちて之を取出せしが。疑ひもなく上帝の御指圖によりして箱の蓋を開くに、中には身心を健全にすべき良藥(則ち烟草)あり、又烟草の外に數卷の書冊も入れありて、是までは顧みざりし聖書も其中にありしかば、烟草と共に之を取り出しぬ。

烟草を如何にせば此病氣に適する藥となすべきやを知らねども、余は知らぬなりに種々の經驗をなし、先づ一葉を取りて口中に入れ、之を嚙みしに尙青き葉なれば其氣甚だ强く、一時頭腦を昏惑せしめたり。又數葉を取り、一二時間少許の糖水酒に浸し置き、就眠の前之を飲むと定め、更らに鍋の上に數葉を置き、下に炭を燃やして之を燒きしに、烟炎々として立ち上ると雲の如し。此時ット鼻を差出し、熱氣の堪へ得らるゝ限り、及び呼吸に堪へらるゝ限り之を嗅きたり。此間に聖書を取りて讀み始めしが烟草を嗅ぎたる爲め頭腦錯亂して中々讀むに堪えず、唯何れともなく開て一寸之れを讀む内、先づ余の目に止まりたるは左の一句

「苦痛の日には我を呼べ、我は爾が苦を釋かん、而して爾は遂に我を崇むるに至らん」なりき。

此一句は余が當時の境遇に最も適切なりしかば多少の感情を惹起せり、然れとも未た後日に於て感を深ふしたるが如くならず。何となれば如何に神なりとも絶島に孤居する余を釋放せん事は、事餘りに

緣遠くして、信すべくもあらねば、此語は余の一身に取りて格別の感應なければはなり。故に宛かもエスライル人が肉を與へんと約束せられたるとき、神は何にもなき此荒野に食を供し得る乎と言ひし如く亦「神はかゝる場所より能く余を救ひ出し玉ひ得る乎」と謂ひしなり。果して數年間は此島を出つるの望もなかりければ、余が言の愈々不敬ならさるを覺へたり。然れとも聖書の語は深く心肝に印し、之を思ふて余は數々獨り自から樂むことありき。既にして時刻移り夜となりしが、烟草は全身に影響せしと見え、大に眠を催し來りしかば、若し夜中に必要あらんとを慮りて燈は消さず、其盤寢床に入りぬ。而して眠に就く前余は未だ曾て爲さざるとを爲したり、そは跪て神に祈り「若し余が苦難の時、神を頼まんには神は直ちに來て余を救ひ玉へ」と念せしことなり。此不完全なる祈禱を終りて、かの糠水酒に浸したる烟草の汁を飲みしが、其香氣激しく鼻を衝て堪へられざるを無理に耐へてグット飲み干し、其後は何事も知らず熟睡したり。

斯くて翌日日の高きを覺えず、午後三時過ぎと覺しき頃漸く目を醒ませり。實は翌日も終日終夜打睡り、翌々日の三時頃まで夢中に過さんと欲したりしも能はざりしが、起上れば兎に角精神爽快にして氣力前日に倍し、胃も健全となり食慾頻りなり。要するに此日則ち二十九日は癒氣少しも發せず、漸次快方に赴くが如くなりし。

三十日は勿論良かるべき日なり、銃を携へ出で歩々遠く往くを覺えず、遂に鷲鳥に似たる海鳥二羽を得て歸りしが、却て之を食するの心起ざりしかば、他の美味なる龜の卵を以て食用に當てぬ。次て前日に於て効能ありしと思ひし服藥をなさんと欲し、例の如く烟草を糠水酒に浸して其汁を飲み、他の青煙葉を嚙み及び烟を嗅ぐの二法は略したり。然るに翌七月一日は思ひしよりも悪しく、身體何となく寒氣を覺えしか幸に甚しく病まざりき。

七月二日。今日は前日の略方に懲り、三種の療法を一時に施し、且つ其飲量を増し、身心を魔睡したり。

七月三日。全身の力は未だ前週日前程十分には快復せざるも、病氣は全く快復したり。斯くて余は力めて快復を企つる内、常に心をかの聖書の「我は爾の苦を釋ん」の句に傾け、且つ余が厄難の解除は到底なし能はざるを思ひ、中心頗る失望したりしが、心は專ら其方に向ひ、寧ろ目前の面り病苦の助かりたるを忘れたり。又須臾にして思ひ回し自から問を起して謂らく、「余は不思議にも驚くべき病より救はれたるに非ずや、然るに余は之に對して何等の注意を爲し又は何等の職分を盡せし乎。神は余を救ひ玉へり、然るに余は神に感謝せざりし。此の如くにして焉んぞ更らに之より大なる救助を求むるを得んや」と。一念此に至り、忽ち肅然容を改め、跪て聲高く神の余が病を救ひ玉ひたるを謝した

り。

七月四日。朝、聖書を取て新約全書より讀み始め熱心に之を誦しぬ、余は此時より日課の一として毎朝毎夜聖書を誦するとに定め、且つ其讀むべき章數を定むるとなく、思考力の續かん限り之を讀むとに定めたり。而して此定課を行ひ始めてより幾許もなく、余の心は過去の生活に於ける罪業を思ふて、苦悶に堪えざるに至り、かの恐ろしかりし夢のとさへ再び想ひ出され、「かくても汝未だ悔ひ改めず」の一語、深く余が心裡に徹して寸時も之を忘るゝ能はざるに至れり。偶ま讀んで經典中の

「神は悔悛を與へ、宥恕を與へ玉ふに依て、主及び救主と崇められ玉ふ」と云ふに至り、忽ち感激して、書を地に投じ、精神を凝め兩手を捧げて高く叫びぬ、「イース爾ダビッドの子よ、イース爾主及び救主と崇められる、人よ、余に悔ひ改めを與ひ玉へ。」是れ余が祈禱と云へる文字の眞の意味に適當したる祈禱を爲せし始めなり。何となれば余は此時自己の境遇を熟省して祈り、神の御言葉に依りて眞の聖經的希望を以て祈りたればなり。而して此時より神は余が願を聽き玉ふと云ふ希望、始めて余の心に發したるなり。

今や余はかの「我を呼べ、我は爾が苦を釋かん」の一句を解釋するに、前よりも異なる意義を以てするに至れり。蓋し當初余は「苦を釋かん」の文字に付て何の深き意義をも付せず、余の神に苦を釋かるゝとは單に此島の幽居より救ひ出さるゝとせり、何となれば此島は固より余が身に取りて自由の鄉なれども、惡しき意味に於ては實に余の爲めに牢獄なりければなり。然るに今や余は此苦を釋くと云へる文字の他の意義を悟れり、醒て余が過きこし方を見るに、恐ろしき罪は累々として山を成せり、余は一たび之を見るに及んで、此罪と云へる重荷の苦を釋く事の外、何物をも神に求むるに意なきに至りしなり。此荒涼寂寞の生活余に於て何かあらん、之をかの罪の重荷に比すれば、余は敢て此生活の釋放を求むるの念を起す能はず。而して苟も聖書を讀んで其眞味を釋したる人は何人も厄難の苦を釋かれんよりは、寧ろ罪惡の釋を得たらん方を以て大なる恩惠となすべしと余は思ふなり。議論は姑く擱き、再び日誌に歸らん。

第九回

病氣快愈。島地探檢に出づ。煙草、葡萄、其他種々の植物を發見す。生籬を作る。籠を製す。

余が生活は依然として悲境に在りと雖も、心は甚だ安く、且つ余の思想は聖書の熟讀と祈禱とにより て高尚となり、從來夢想にだも得ざりし快感を覺へぬ。斯くて余が健康も亦從て回復したれば、舊て

生活の必要品を獲來て、出來得べき丈け規律ある生活を營めり。

七月四日より十四日に至る。間は大概毎日少時間宛鐵砲を拵へて外出し、徐ろに病氣後の減じたる力を養ひたり。蓋し當時余が躰力は、衰弱したること想像にも及ばざる位なりければなり。且つ夫れ余が用ひたる療法は、全く新奇にして、此療法を以て瘧疾を治したるものは、恐くは未だ曾て之れなかるべければ、余は斷して斯かる療法を何人にも勸むること能はず、好し假ひ治することあるも、其結果は身躰の衰弱を來すに極まれり。現に余の如きは、之か爲めに時々神經痛と四肢の痙攣を生することありき。余は又瘧疾の煩によりて、雨天に外出は最も健康に害あるを悟りぬ、殊に乾燥期に降る雨は多く暴風に伴て來るか故に、九月十月の候に降る雨よりも一層有害なるを悟れり。

余は既に此不幸なる孤島に十ヶ月間暮しぬ、此處より逃れ出づべき手段は最早や全く絶えたるが如し。而して余は此孤島に於て曾て人類の生活するとなきを信じ、且つ住處に付ては最早や心痛する所なきものから、是より更らに全島を探檢し、兼て未だ知らざる他の生産物を發見せんと決心したり。

さて愈七月十五日を以て島の探檢を始め、先づ余か先きに筏を泊したる小川に至り、次で海岸に沿ふて二英里を歩しけるに、海潮は高からずして、僅かに一條の小流潺々たるに過ぎず、時は乾燥季なりければ清き水少しく流れしのみ、又其小流の岸に沿ふて菁々たる一帶の好牧場あり、而して其小高き

處に煙草の葉青々として大きく且つ強き莖に付きて茂生し、名も知らぬ他の種々なる植物、亦其傍に發生するを見たり。余は此等の中にかの印度人が麵包を作るてふ、カサヴァルート(植物の名)のありやせんと尋ねしが見當らず、大なる芦薈はありしも、余は此植物が何の用をなすかを知らざりき。其他數本の砂糖樹ありしも、耕作の勞を執る者なきが爲めに、荒ちく不十分なる發達をなしぬ。此の日は是丈の發見にて歸りしが、此等の植物も見しばかりにて名も知らず、効用も知らずしては何の用にも立つまじきが故に、如何にもして其菓物或は葉根の効用を知らんと考へしに、遂に考ひ付くこと能はざりき。蓋し余嘗てブラヂルに在る日、野生の植物に就て何の注意する所なかりしかば、少なくもかゝる困難の場合に用立つべき植物學上の智識を有せざりしなり。

翌十六日再び昨日と同じ方向に歩み、昨日よりも更らに少しく深入せしに、小川の流れは茲に止まり牧野も亦此に限られ、地は樹木鬱蓊たる森林となれり。種々なる菓物は此處に發見されぬ、瓜は顆々として地上に横はり、葡萄は房を成して木に懸れり。而して蔓樹木の間を縫ふて其間に懸れる葡萄の實は、今や全く熟了して甘汁滴さに滴らんとするの狀あり。余は此珍らしき發見に依て、喜悅の情躍々として禁ずる能はざりしが、又退て思ふに曾て野蠻國の海岸に於て、數名の英人か葡萄を貪食したるが爲めに、下痢を起し熱病を病み、終に之が爲めに斃れたるとを記憶せしかは、唯其僅少を食し、

多くは之を日光に乾かし、干葡萄となして貯へ置き、生葡萄の盡くる日を待て之を食すべしと決しぬ。」

此日は一日此處に暮らし、夜に入れども家には歸らず、此林間の樹上に一宿したり、之を余が家を離れて宿したる始めとす。翌朝更らに進み、小山に傍ふて凡そ四英里も北方に歩したらんと覺ぼしき頃、忽然として廣濶の地に出で、地勢西方に向て漸次低下の傾向を生せり。かの小山の傍より噴出する水は、東に向て一條の溪流を成し、空氣は新鮮にして土地は肥沃に、草木繁茂し、宛然一箇の植物園なりき。余は此美しき光景を見て徐かに四方を探檢しつゝ谷に下る時、心は何となく愉快の感情を以て滿たされ、私かに謂らく。

此美くしき谿は總て余の所有にして余は此地の王なり、一人の抗する者なき主權者なり、總ての物に就て所有の全權を有す。若し余にして之を他に移すを得ば、英國に於て堂々たる領地を有する貴族にも劣るまじき立派なる家產なり。

かゝる事を思ひつゝ此谿を下るに椰子樹、橙樹、黎檬樹、佛手柑等雜然として叢生せり、左れど樹は概ね荒れて菓を結ぶ者少なし、獨りライム（檬檸屬の果實酸帶に生ず通常の檸檸より形小にして滋味あり）は青々として食して甘味なるのみならず、甚だ健康に宜し。余は此後常に此汁液を水に混し、飲んで衛生上の効用を收め、精神をして夾快ならしめたり。

余は此等の葡萄、ライム、黎檬を貯へ、將さに來らんとする連雨の季候に具へんとを思ひ、一處に葡萄を集め、他處にライムと黎檬を積み置き、一應家に歸り、褒を携へて更らに來らんと欲し、各菓數個を懷にし、家を出てゝより三日目に初めて歸る。然るに窟内に歸りて携へ來りし菓物を檢するに、葡萄は實の澤山なりしと、汁液の重さに依りて多くは潰れ、殆んど食するに絶えず。ライムは良かりしも、携へ來りし數甚だ僅かなりき。

翌日は十九日なり、二箇の褒を提けて彼處に往きしに、何ぞ圖らん作日注意して積み置きし美事なる葡萄は、此處彼處に散亂し、蹈み潰されたるもあれば喰はれたるもあり、其失ふ所甚しく、余は實に一驚を喫したり。左れど須臾にして、是れ必ず此近邊を徘徊せる野獸の所業なるべしと氣付き、持ち歸らんとすれば液溢れて彼が如く、此處に積み置く時は野獸に蹂躙せらるゝと此の如くなるを思ひ、余は忽ち一策を案出し、摘み採りたる多くの葡萄を集めて一束となし、高く木の枝に懸け、其盡其處に日光に乾かして干葡萄を作るとなし、ライムと黎檬のみ持ち得らるゝ丈多く携へ歸りぬ。

窟内に歸りて、かの谿の果實に富み風景美くしく、水あり樹木ありて暴風を避くるの便あるとなど思ひ、現今住む所の巖嶺よりも、かの地の方遙かに優れるを感じ、若し此地をかの地と比して安全なると同じからんには、此荒涼の地に住せんよりは、寧ろ彼の風景と果實に富める地に移轉するに如かず

と思ひ始めたり。

此觀念は漸次に勢力を高め彼の美くしき景色は益々余を誘導して、將さに之れを決行せしめんとせしが、しかも亦此海に沿ふたる住處を去る能はざる一事情ありき。則ち余の心中には、今後若し余の乘りたる如き不幸なる船が或は此海岸に漂着するともあらんかと想ひ居るとなれば、今此海岸を去て島の中央に於ける彼の草木鬱然たる山の中に隱遁するときは、全く此等の便宜を失はさるべからず、依て斷然移轉の議を廢しぬ。然れとて余は尙かの谿を愛するの情に堪えぬものから、住處こそこゝに移轉せされ、七月中は此處に日を消せんと欲し、遂に小さき草庵を結びて、周圍には強く高き二重塀を廻らし、塀と塀との間には一面灌木を植え付けたり。用意堅固なる草庵既に成就したれば、余は安心して快よく此中に眠り、時としては二夜三夜を過すとあり。謂へらく、余は今や海濱の本宅と田舍の別墅と合せ二構の邸宅を有すと、而して此草庵の成りしは八月の始めなりしが、未た永く其ト居の好きを與賞せざるに、穴惡く霖雨降り連りたれば、余は俄かに海岸の舊宅を慕しくなれり。是れ此新宅も舊宅と同く帆布を以て天幕となしたれとも、雨の烈しき時に遁げ込むべき岩穴なく、暴風の時に家を蔭ふべき小山なきが故なり。

八月三日。曾て樹上に懸け置きたる葡萄の全く乾きければ、取て之を撿するに、結好なる干葡萄大房

二百餘を得たり、而して今日之を收めたるは、余の甚だ幸運とする所とす。若し然らずして此儘に置きたらんには、翌日降り始めたる雨のために汚されて、此好ましき余が冬時の食料を失ふと決して少小ならざりければなり、果して取り得たる葡萄を塀内に運び了るや否や雨は降り始めぬ、八月十四日より十月中旬に至る迄、檐に點滴の音を絕たず、時としては車軸を流すが如き烈雨連日に渉り、余をして外出する能はざらしめたり。

此間に驚くべきとの起りしは余が家族の增加なり。始め余は一匹の猫を見失ひたりしが、多分何れかに往て死せし者ならんと思ひ過せしに、八月の末に至りて、突然三匹の子猫を携て歸り來りぬ。余は之を見て不思議に思ふ樣、曾て鐵砲を以て野猫を殺せしとはありしが、是れ素より歐洲の猫と稍々類を異にし、且つ余の許に在りし猫は皆牝猫のみなるに、今伴ひ來りたる三匹の子猫は、共にかの親猫と同種なると眞に怪訝の事と謂ふべし。然るに此三匹の子猫は余を煩はす事一方ならざりければ、鼠又は野獸と同く之を殺すか、但しは放逐するの已むべからざるに至れり。

八月十六日より二十六日に至る迄、間斷なき降雨の爲めに外出する能はず、爲めに食事甚だ乏しくなりければ或日雨を犯かして出で山羊を得て歸り、再び二十六日に出て、大なる龜を得たり、龜は實に余に取て八珍の佳味なり。斯くて玆に食事に付て一の規則を定む、則ち

朝飯。干葡萄一房、晝飯。山羊又は龜の燒肉一切(煮る鍋なき故燒く)、晩飯。龜卵二三箇とせり。

此雨中閉居の間に毎日二三時間宛巖崛内の開鑿を試み、專ら一方に向て堀りしに、遂に小山の外側に達し、廻らしたる壁の外に出でぬ。依て平常は此口より出入することせしが、かくては敵の來襲も圖り難きを慮り、安き心もなかりし。とは云ひ又熟ら考ふれは余が此島に於て見し所の最大の動物は山羊のみなれば、別に恐るべき程の事もなかるべしとて心を安んぜり。

九月三十日。今日は難破して此島に漂着せし一週年なり、海岸に建て、暦代りとなしたる柱の切り目を數ふれば、正に三百六十五日の生活は此島内に過ごされぬ。左れば余は此日を以て宗教に定められたる祝日以外の聖日と定め、地に俯して余が罪を神に謝し、余が頭上に落ち來るべき神の裁判を難有承認し、イエスクリストの紹介に依て、余に恩惠を下し玉はらんとを祈りぬ。十二時間斷食して日の西に沒する頃、乾麵包と葡萄の一房を食し、更らに祈禱をなして寢床に入りたり。

雖に余は安息日を記せんが爲めに暦柱に月日を刻み、中に稍々長き一線を記して之を他の日と區別せしに、元來宗教に熱心ならざりし身の、一日之を忘てより忽ち何日が安息日なるやを辨ずる能はず、遂に以て今日に至りしなり。仍ては今日より過去三百六十五日を一週宛に分ち、精密に計算して七日に一日の安息日を定めしが、其計算一日二日を誤算せり。且つ「インキ」も最早餘り尠なになりたれば、今後は毎日の日誌を廢し、唯生活中にて著るしき出來事のみを記するととなしぬ。

今や余は降雨の季候と晴天の季節とを辨別し得るに至りしを以て、豫め季候を測りて之に準備するとを務めたり。然れとも此經驗は余が千辛萬苦を代償として、纔かに得たる經驗なるが、今就中最も余を失望せしめたる苦き經驗を述べんに。余は曩きに大麥と米との數穗を貯へたることを記せしが、其の莖數は米凡そ三十本大麥凡二十本のみなりしに、今や連日の雨、一時に晴れ、日光新に輝きければ、之れを蒔くに適當なるべしと木の鋤を以て地を穿ち、二箇處に分ちて蒔きぬ。然るに之を蒔くに當りて不圖今が蒔く可き適當の時節なるや、否や確かに判じ難しとの念起り、一時に悉皆蒔かずして、先づ試みに各種其三分の二を蒔きしが、果せるかな、此後は晴天打續き、種子を萠芽せしむべき濕氣悉く乾燥して、蒔きたる種子は空しく地中の埋物となり果てけり。而して余は第一の試驗が失敗したるを見て、更らに別宅の方に近き、濕氣ある土地を撰んで之を蒔きしに、此時恰も春分の前なりしかば、三月及び四月の雨を得て蒔きたる種子は快く萠芽し、甚だ好結果を得たり、素より蒔きたる種子に限りあれば、其收獲は各種僅かに二升餘に過ぎざりき。左れど余は此經驗を得てより遽かに此業の先生となり、蒔くべき時節を知り、且つ此地に於ては毎年二回種子を蒔き、二回收獲するを得べきことを知りぬ。

烏兎匆々十一月となり、雨は止んで晴天の季候となりぬ。數月訪はざりし別宅に往きしに、別に何の異狀もなく、唯かの四邊の木を伐りて垣を結ばんゝ爲めに打ッたる杭は、數月來らざる間に、宛かも楊柳の枝の伐りて植えたらんが如く、再び新芽を發して蒼々たる綠色、更らに伐られたる木と見えざる迄に繁り居たり。余は之を見て歎き且つ喜び、尙益々多く成長せしめんと欲したり、蓋し此分にて繁茂せば、三年後には鬱然として蔭をなし、直徑二十五ヤードの此籬の內は直ちに掩はれて清涼の蔭をなすべく、晴天の季節に掘强の納涼場となるべし。左れは余は又此樹を以て海濱の本宅の壁外にも更らに一重の籬を作ると妙なるべしと思ひ一束の枝を携へ歸り、第一の垣より凡そ八ヤルドを隔てゝ、半圓形二列に植付けしが、是亦須臾にして、美事に繁茂し、獨り晴天の日に清涼なる蔭を生ずるのみならず、亦以て墻壁となすに足るに至れり。

今や余は明かに此島一年の季候を知りぬ、歐洲に於ては夏と冬に分てども、此島に於ては雨季と晴天の季節との二に區別さるゝなり。即ち

二月の後半三月一杯及び四月の前半は雨天。而して太陽は晝夜平分點又は其近に在り。

四月の後半五月六月七月一杯及び八月の前半は晴天、太陽は平分線の北に在り。

八月の後半九月一杯及び十月の前半は雨天。太陽は再び平分點に歸り來る。

十月の後半十一月十二月一月及び二月前半は晴天。太陽は平分線の南に在り。

尤も雨天の季候は風の起るに依て伸縮するとあれども、先づ概して右の如し。

余は經驗によりて、雨中に外出するの健康上甚だ宜しからざるを知りければ、雨天の季候に外出の必要なからん樣に、豫じめ成る可く食物の準備を爲し置き、雨の降り出づるや否や退て戶內に閉居し。他の適當なる仕事を務めて以て、十分に勉强するにあらずんば、容易に作り難き日用品を作り出しぬ。殊に籠を製するには種々の手段を試みたり、余が未だ少年にして父の許に在りける頃、近隣に一軒の籠屋ありて、余は常に其店に至り、主人が樹木の小枝もて籠を作るを見、時としては之が手助けをも爲したるとありしかば、籠を作るの道に於ては十分なる智識を有せしが。何分得るに苦しみしは其材料にして、余が此處に有する小枝は、皆撓め難く折れ易き者のみなりしなり。偶まかの別宅(余はヂー(三樹共に柳の種)の如く、撓め易く折れ難き性あるべしと信じ、翌日早く彼處に赴き斧を以て之を伐り、籬の上に曝らして之を乾かし、其用に堪ふるを待て廟內に運搬し、次の雨天を待ちて之を試みしに、果然幾多の籠を作り得たり。素より美くしくは出來ざりしが、土其他の物を運搬するには猶十分の用をなしぬ。其後破るゝものありて新に作る時は、他日穀物收獲に際して、囊の代りに用ひら

る、樣、強く深き籠を作りたり。

余は多くの時間を費やして籠を作り得るに至りしかば、更らに望蜀の念を起し尙二種の欠乏を滿たさんと望むに至れり。第一の欠乏は液体を容るべき皿と、物を煮るべき鍋を有せざる事なり、余が有する二つの小桶は糠水酒を入れて餘裕なく、數箇のガラスの瓶は、其大さ通常にして水及びアルコールを入れて殘りなし、外に船中より取り來りたる鑵子一箇ありしが、餘りに大に過ぎて、ソップを作り肉の切れを煮るに適せざりしなり。第二の欠乏は烟草を吸ふべき烟管なりき、左れど此等の物は製作する事、甚だ困難なるものなりしなり。

第十回

再び島地を探檢す。鸚鵡を捕ひて之と談話す。聖書の難有に感ず。日課を定む。農具及び陶器を製す。

驚て叙す、余は曩に此島の全部を視察せんとの大志を起しながら、中途にしてかの草庵を作りし處を發見したるが爲めに、空しく長日月を徒費せしが、今や又勃如としてかの森林の地より、進んで前方海岸を巡察すべしとの念を起したり。乃ち鐵砲と斧とを携へ、平常よりも多くの彈藥を用意し、別に二箇のビスケット澤山の千箭竹を入れたる嚢を提げ、犬を率き飄々として出でぬ。草庵の谿を過ぎて歩を進むれば、西に一面渺茫たる海あり。時はうら〳〵と晴れ渡りたる好天氣なりしかば、海上隈なく眺むる內、不圖前方に陸地の横はるを見る。其地勢西より西南西に至り、其距離大凡そ十五海里乃至二十海里あり。地は海上を抜くと高きが故に島か、將た大陸の一端なるかを辨じ難し。

熟ら考ふるに、此處に見ゆる陸地は如何にしても米國の一部なるが如し。若し此考にして誤りなくんば西班牙領に近き處にして、之に住せる者は皆狂暴の蠻族なり。而して此陸地幸に西班牙領ならんには、必ずや何時かは二三隻の船の往來するを見るべく。若し絶えて船の往來なくば、西班牙領地とブラシル間の海岸にして、かの見付け次第人を喰ふてふ蠻族の住處に相違なし。曩に破船したる時、若し誤てかの地に漂着したらんには、そもや如何なる憂目に逢ひけん、思へば神の御心の難有く、猥りに煩惱を逞ふして我心を苦しむるの非ぞ悟られける。

かく思ひつゝ緩々として歩を進むるに、島の此邊りは余が現住地よりも遙かに樂しき處なるを發見したり。茫々たる平原は蕭よき草花に飾られ、其一隅に美くしき樹木欝蒼として繁茂し、珍らしや、茲にも可憐の鸚鵡が林間を翺翔するあり、あはれ此一羽を得て馴らし、物言ふとなど敎えたらんには、如何に樂しかるべきなど思ひては、情緒中々に堪え難く、棒を提げて追ひつ廻はりつ、漸くにして年若き一羽を叩き落としぬ。此鸚鵡後に養ひ馴らし、言語を敎えしに、殊に余の名を呼ぶことを能くせし

かば、之に依て可笑しき事の起りしは後に詳説すべし。

旅行の餘りに樂しきまゝ少しく地の低き處に至れば、野兎山狐の類は群を成して飛び居れり、之を銃殺するの快言ふべからず。左れど其種類は余が知る所の者と大に異なり、且つ食物は他に十分ありしを以て、此等小獸の肉は棄てゝ、顧みざりき。抑も當時余の食物は山羊、鳩、龜の三種にして、之にかの拵へし干葡萄を添へて食せしが、英國の料理街に於ても日常之れより贅澤なる食物を給すると能はざるべしと想えり。余の境遇は素より悲しむべき者なりしと雖も、食料に不自由なく先づ〳〵十分なりし一點に於ては大に神に謝すべき者ありしなり。

此頃は日々二英里より遠くは往かざりしが、其間種々の物を發見せんと欲して、四方に往來せし爲め大に疲勞を覺え、豫め臥すべしと定めたる處に走り歸りて樹下に臥しぬ。臥したる四隣には木の杭を打ち、若し野獸の來り襲とあるも此杭を破る音の余を覺ます樣にこしらへたり。

始め此海岸に來るや龜の澤山なるを見、余が家の邊に於ては一年半の間僅かに三匹の龜を得たるを想ひ、余が漂着したる海濱は此島中の最惡なる處なるを感じぬ。此海岸には又數ふべからざる夥しき海鳥ありて、皆捕獲して食用に供するを得べかりしが、其多くの鳥の中に名を知りしは唯ペンクイン（南極の海濱に住す、驚鬼にして其翼甚短かし故に空を飛ぶ能はず常に水中に在て翼は魚の鰭と同じ川かなす）のみ、他は皆名も知らぬ海鳥なりき。愉快なるまゝに此等

の海鳥を幾羽となく撃ち取りしが、彈藥も聊か乏しきを告げゝれば、鳥よりも一頭の牝山羊を得たしと思ひ、種々に之を試むれども何分此邊は小山の近傍と異なり、土地區なるを以て、我れ彼に近づかんとすれば、彼忽ち之を見て遠く走り、睨ひを定むるに由なくて一頭を獲るにも甚だ困難なりき。

余は島の此方は現に住居を構へたる地方より確かに愉快の場所なるを謂ふ、左れど余は早や現住所に親しみ深く、此邊は旅の空の如き心地にて、如何に愉快なるも居所を此處に移さんとの心起らず。旅行は既に東方殆んど十二英里に上りたれば濱に一本の棒を立てゝ之を記標とし、一先づ住所に歸り、更らに次の旅行に於て道を東に取り、島を一週せんと決心したり。

往くと云ふ觀念はなく只管歸るの心にて東に向て進むほどに、二三英里を歩みける頃段こ下り坂となり遂に一の陰々たる谿に陷りぬ。四方は小山に圍まれ、隈なく茂れる林は森々として暗く、殆んど方角にも迷ふべかりしが、余は太陽の位置を見て方角を知るを得しかば、幸に迷はず進みけるに、不幸にも其谿を出でざる前三四日の間、霞一面に罩めて太陽も影を隱すに至り、心甚だ面白からず彼方に歩む内、漸く往き抜けて一の海岸に出でたり。それよりは容易に方位も分り、間もなく嶋内に歸るを得しが、天氣の餘まりに暑かりし爲め、鐵砲、彈藥、斧等は甚だ重荷なりき。

此旅行の間率ひたる犬は、一匹の子山羊を刼かして之を捕へしかば、余は之を助けて歸り、兼て彈藥

の靈きたらん曉に食料を得ん爲めには、平生一匹が二匹の子山羊を養ひ置きたしと望みしものから、大に注意して之を豢ひ、頸輪を嵌め繩を以て之を牽き、常に身邊を去らしめず、遂に之を別宅の方に牽きもて往き、此處に之を幽閉したり。蓋し余は嶼内に不在勝にて、時としては一ケ月以上歸らざるとあればなり。

今や僅々の間なれども何處を宿とも定めざる旅路より歸り來りたることなれば、住み馴れし舊宅の吊床に寢る其樂しさ得て言ふべくもあらず。四邊に見るもの亦悉く樂しく、遂に今後は決して遠方に旅行すまじと決心するに至りぬ。家に止まると一週間、先づかのポール(鸚鵡の名)の爲めに籠を作りしに、ポールは最早や能く馴れたり、偶ま別宅に幽閉し置きたる子山羊のことを想ひ出し、急ぎ彼を連れ歸りて食物を與へんと彼處に往きしに、彼は外に出づるとならねば食物に餓え、最も哀れ氣に見えけり、即先づ木の枝を折りて與へ、更らに繩もて牽き歸るに、前に牽きし時は中々に從はざりし彼も、今餓えたる處に食物を與へられたるを喜びしと見え、狗の如く大人しく後に從ひ來りぬ。段々食物を與へて之を豢へば、後には愛らしく温和なる性を表はし、遂には全く馴れて余の許を去らずなりぬ。」

秋分の雨天となり第二週年の九月三十日は來りぬ、是れ此島に漂着したる紀念日なれば去年の如く莊重なる儀式を行ぬ、余も早や二ケ年間此島に住しければ、漂着したる當分の如く此地を逃れ出でんとの望みはなく、神が此不幸なる境遇に下し賜ひたる數々の驚くべく難有き恩惠を思ひ續けて此日を消したり。今や余は此寂しき境遇に在りて、自由なる社會幷に總ての快樂ある社會に在るよりも倘幸福なるを得べきを悟れり。神は余の心に現はれ余の心に其恩惠を示し玉ひて、以て余が此寂しき境遇に於ける欠乏と、人間社會に於ける欠乏とを補はせ玉ふを悟れり。神は余をして現世に於ては神意に依賴せしめ、未來に於ては永久、神に事ふるを得る冀望を有せしめ、之を以て余を支へ余を慰め余を勵まし玉ふを悟れり。且つ余は罪多く厭惡すべき過去の生活を取て現今の生活に比し、縱令今の生活は昔の生活よりも悲しむべき事情の下に在りと雖も、尙此の彼に優さると萬々なるを感じ始め、同時に曾て喜びしものは今の悲しむものとなり、曾て哀みし者は却て今の樂しむ者となれり。二年前始めて此島に來りし時と今日とは余の望む所大に其趣味を異にし、快樂は全く別種のものとなりしなり。

想ひ起す、曩に余が此四邊を涉獵せし時、或は森林の中に、或は平原の間に、又或は小山の谿に、突如として感慨を起し、如何に余が身の果敢なさよ、余は四面太洋と云へる錠を以て閉さいれたる牢獄中の囚人なり。住む人もなく荒れに荒たる此孤島に唯一人幽閉せられ、放免の時期なき憐れなる囚人なり、などと嘆息し。忽ち胸迫り心破れて精神的の死を遂げたること幾回ぞ。此の如き感懷は又心

の安靜なる時に於ても忽然暴風の如く起り、余をして腕を扼し、小兒の如く泣き悲しましむるとあり。或は勞働の最中に超り余をして直ちに地に坐せしめ、一時間乃至二時間勢なく地上を注視して嘆息の外なからしむるとありき。而して若し此の如きとありし時、聲を放て泣き、又は此情緒を獨言し盡せば、悲哀は其力を減じて苦しみ割合に少くなりしも、默然として回想し、愁然として悲しめば眞に遣る瀬なかりしなり。然るに今や余は新思想を以て練修を始め、毎日神の語を讀み、現今の境遇に照らして總ての愉快を取るに至れり。或る朝甚だ悲しき念起りしかば、聖書を開きて之を讀みしに偶ま

「余は決して爾を捨てず、爾を孤ならしめず」

の語あり。乃ち謂へらく神に非ずんば如何なるものも、焉んぞ能く此の如くなるを得んやと、遂に聲を放て叫びぬ。「神若し余と共に在らば如何なる惡しき事情の下に在るも何かあらん、之に反して縱令全世界を有するも、若し神の愛と惠みを失はんには、何の喜ばしきとかあらん」と。此時よりして余はかの世界の或地に在りしよりも、寧ろ此荒涼の孤島にあるを幸ひなりとし、遂には神の余を此處に送り玉ひしを謝するに至りしが。既にして又自ら叱して曰く「汝は何故に此の如く僞善なりや、汝は縱令此境遇に滿足し得るとも、尙神に向て此境遇より救ひ出されんとを祈らざるべからざる者なり。然るに汝は今自己の心を欺き、却て此境遇を神に謝せんとす。汝何ぞ此の如く僞善なりや」と。乃ち此境遇に送られしを謝するとを止めしが、而も尙神に向て過去の生活の悲しむべきと、其罪業の悔ゆべきとを見るべき眼を與へ玉ひたるを謝し、且つ我英國の友をして曩に乘船の際、我荷物の中に聖書を入れしめ玉ひたるを謝したり。

かゝる思想を以て此三年目の生活を始め、時々怠るとありしも概して行ふたる日課は左の如し。

一、神に對する義務を行ひ、且つ毎日三回聖書を讀む事。

二、雨天の外毎朝三時間、鐵砲を以て外出し食料を獲る事。

三、室内を整理し、製造し、物品を保管し、且つ庖厨の事を行ふ事。(毎日最も多くの時間を之に費やしたり)

左れど太陽赤道に在り、日中の熱氣旺盛にして勞働に堪えざる時は、晩景四時間ばかり勞働するとあり。或時は又外に出獵するの時間と内に勞働するの時間を繰り返へ、朝働き午後獵するともありき。

余は此短かき勞働時間に非常なる勞働をなさんと欲せしが、如何んせん道具に乏しく助手なく熟練なき余の手二本のみにては、一の道具を作るにも非常の時間を費やしたり。例を擧げて之を言へば余は棚内に長き棚を作らんが爲めに、先づ一枚の板を作りしが、之に費やしたる總日數實に四十二日間

なりき、通常の大工ならば半日に六枚を造り得べけんものを。今左に其事實を詳記せん。

板の廣きを要するが爲めに伐り倒すべき木も大木なるを要し、之を伐り倒すに三日を費し、枝葉を伐り落とすに二日を費やし、さて或は之を伐り或は之を削り、次で運搬し得る樣に幾多の木頭となし、遂に之を轉ばして携へ歸り、更らに之を削りて各厚サ三寸の板となし、其兩面を平滑にせり。此の如き勞働を一人にて爲し得しとは、實に人の想像し能はざる所なるべし。殊に茲に世人に告げんと欲するは、多くの人と完全なる道具の助けに依りて僅々の時日に爲し得る事業も、道具に乏しき一人の手を以て爲す時は、驚く可き時間を要すると是れなり。左れど余は勉强と耐忍とを以て、能く此等の必要品を作り得たりしなり。

今や余は十一月十二月に於て大麥と米の收獲あらんとを待ち居る者なり、曩に誤て晴天の季候に蒔きしが爲めに、空しく幾多の種子を失ひてより、其後蒔きし種子は、大麥、米共に僅々二升餘に過ぎざれば、從て其地も狹かりしが、此等は皆快よく萠芽し、將さに蓁々として成長せんとするに際し、忽ち一の危難に會しぬ。即ち山羊又は山兎類は此等の穀物の新芽を好み、出づるに從て之を食し、少しも發達するの餘地なからしめたると是なり。余は則ち之を防がん爲め、迅速なる働を以て周圍に垣を結ばんと決心せしが、素より至て狹き地なれば、僅々三週間を以て成就せり。而して晝間は此四邊を窺

ふ獸類を銃殺し、夜は犬を此柵門に繫ぎて終夜吠えしめしかば、獸類は忽ち此處を去て穀物は間もなく發達し、穗は早や熟せんとするに至りぬ。

然るに此時又他の一の危害生じ來れり、獸が新芽を食はんとて來りたる如く鳥は穗の實を食せんとて來りぬ。余一日如何に麥及び稻の生長せしかを見とて、常の如く銃砲を携へて近寄りしに、種類も分ち難きほど多くの鳥は此狹き地に集りて貪食せり。余が直ちに發したる銃聲に驚いて此處彼處余の見ざりし處より群り上りたる鳥は、さながら黑雲のたな曳きたらんが如し。余は之を見て此の如くんば數日の內に穀物を食ひ盡され、他日又收獲を得るの道なきに至らんと憂慮し、一種不快の感情は頓に胸を衝きしが。左りとて今更らに此穀物を捨てんとの念なく、若し能ふべくんば余自ら晝夜立番して安らかに培養したしと思ひければ、先づ如何ばかり損害を蒙りしかを見んとて、近付きて之を檢せしに其害素より多分なりしかども、尙殘る所の者少なからず、若し能く之を保護せんには必ず相應の收獲あるべしと覺えたり。

余は又急に一策を案じ、銃砲に彈を込め、四邊の樹上に群を成して恰も余の去るを待つものゝ如き鳥を見ながら暫らく身を隱せば、案に違はず鳥は一羽々々に穀物の方に飛び下れり。余は最早や堪えられず、離に從て轟然發砲しけるに、三羽立ちどころに斃れぬ、依て直ちに之を取り上げ、恰も英國に於

て有名なる盗賊を處するが如く、他を威嚇せん爲めに鎖に繫ぎて高く懸けたり。此擧は意外にも十分なる成功を遂げ、獨り其後籬内に鳥の來らざるのみならず、案山子の掛かる間は近隣に鳥の影だも見ざるに至れり、余の喜知るべきなり。かくて十二月の終は第二回の收獲期なるを以て、穀物を苅入れんとせしに、悲しくも當時余の許には一挺の鎌だになかりき。依て船より取り出したる太刀を以て之に代用せしに、素より土地も狹く、收獲も少量に、且つ其穗のみを摘み取るとなりしかば、別に大なる困難とてもなく、苅り取りたる穗は之を大なる籠に入れて持ち歸り、手を以て之を揉み皮を剝ぎ、さて其收獲の總額を算するに時たる者は僅に二升餘に過ぎざりしかども、獲たる高は、米凡そ二ブッセル（一ブッセル凡我一斗八升に當る）大麥凡そ二ブッセル半ありき。

余は此收獲を見て心大に奮ひ、神は余に麵包を給せんとし玉ふ著なるを想ひぬ。左れど余は此等の穀物を舂くを知らず、之を粉にするの法を知らず、粉を清潔にせん爲め篩と區別するの法を知らず、若し粉を作り得るも之を麵包の如くに固めるの法を知らず、若し又之を固め得るも之を麵包に燒くの法を知らざりしなり。於是乎余は今回の收獲は全然食用せざるとし、悉く種子となして時き、次期の收獲迄には調理の方法を研究し、且つ必要なる器具を整へ、愈かんと決心したり。

今や余は麵包の爲めに働く人となれり、左れど想ふに世間幾多の人は麵包と云へる唯一物の爲めに

余の如く多く働くとあらざるべし。余は則ち之を時き、之を生じ、之を乾かし、之を篩ひ、之を作り、之を燒かざるべからず。然るに自然の簡單なる方法に從て働くものから日々挫折に會し、時としては毎時間失望的の感情に擊たれて驚き且つ歎くとありしなり。

第一に土地を耕やすべき鋤なし、有る所のものは唯かの木製の鋤のみ、之を作るには幾多の時日を費やせしが其端に鐵片なきが爲め須臾にして其端を磨滅し、耕作の業甚だ困難となれり、左れど余は止むを得ざれば之にて堪えぬ。第二には穀物の既に時かれたる後に入用なる耙なし。依て木の枝を伐り甚だ重くろしくも之を曳きて以て代用したり。既に穀物の生じたる後には亦、如何に多くの物を要するかは余が前に述べし所なり。之を保護し、之を苅り、之を乾かし、之を家に運搬し、穀物の殼を打碎き、殼と實とを分別し、而して後之を安全に貯へざるべからず。既に之を爲し了りたる時余は又之を挽くべき舂を有せず、之を振ふべき篩を有せず、之を麵包に作るべき鹽又は麴を有せず、之を燒くべき爐を有せざるなり。余は穀物を得んとは非常なる快事にして且つ利益あるを樂むものなれども、此等器具の欠乏は余をして轉た倦厭の情を起さしめたり。然れども素より一人の助くる人とてはなれば、必ず自ら之を爲さゝるべからざるを思ひ、次の六ケ月間は全く此等の器具を作るに費やさんと決心したり。

左れど此等の器具を作るの前、先づ土地を耕やさゝるべからず、何となれば種子は前に倍するが故に、之を蒔くには必ず一エークル（我四段〇十八歩餘）以上の地を要すればなり。然るに地を耕すの前又先づ鍬を要せしを以て、一週間を費やして之を作りしが、前に用ひたるものよりも重く、殆んど二倍の勞働を要したり。既に地を耕やし了り二箇處の田地を得たれば、之に種子を蒔き、其周圍にはかの別宅より移し植えたる木の枝を伐りて植付けたり、是れ種子の發達と共に發達して、遂に恰好なる生籬を作るべければなり。宛かも雨天の季候來りて外出し難き日屢々なりしかば、此等の業を成し了るに殆んど三ヶ月を費やし。又戸内に蟄居せし間は、鶏鶏に言語を教えんとを企て、先づ彼の名「ポール」と云へる語を教えけるに、須臾にして聲高く「ポール〳〵」と叫ぶに至りぬ。余が此島に來りて、他の口より話す言語を聞きしは、實に此時を以て始めとなす。

余は又永く研究して陶器の瓶を作らんとを企て、氣候の度を考ふるに粘土は必ず此地にあるべければ、之を以て其形を作り、十分に太陽に乾かさんには、穀物又は粉を入るゝに適當なる物を作り得べしと思ひ付きたり。然るに余が之を作るに當りて如何に拙陋なる方法を取り、如何に多くの不規則なる醜き物を作り、粘土の柔かき爲め如何に多くを潰ぶし、太陽の熱氣過激なる處（餘り急に出せし爲め如何に多くをヒゞ割れせしめ、未だ十分乾かざる内に之を運搬して如何に多くを碎きしかを告げんには、讀者は必ずや余を憐み笑ふなるべし。左れど余は實に粘土を發見するに困難したるのみならず之を堀り、之に水を配合し、之を家に運搬するに非常なる困難を取り、二ヶ月間を費やして最も苦辛し作り出したる者は、唯僅かに二箇の醜き陶器物（余は敢て之を瓶と稱する能はず）に過ぎざりき。斯くて此二箇は十分に乾かしたる後、靜かに取り上げ、先きに作り置きたる二箇の大籠に入れ、籠と瓶との間の空隙は米麥の藁を以て埋め、更らに之を日光に乾かしたり、庶幾くは以て米、粉を容るゝに足らんか。

大なる瓶には頗る失敗したれども、種々の小陶器物に至りては十分に成功し、圓形の小壺、平皿、水甕、小土瓶等を手際よく作り、日光を以て頗ぶる堅くなる迄に乾かしたり。左れど尚此等の器物と雖も久しく液體を入れて溶けず、火に懸けてヒゞ割れざる者にあらざるを以て、余は如何にもして水火に堪ゆべき者を作りたしと思ひぬ。偶ま郊外に出でゝ食物を料理し、之を炙らんが爲めに火を焚きしとあり、料理を終りて此火を消したる後に、圖らずも陶器碎片を發見せしが、そは燒かれたる爲めに石の如く堅く煉瓦の如く赤き物となり居れり。余は之を見て驚き且つ忽ち陶器を燒べき方法を思ひ當りたり、乃ち直ちに之に着手せしが、素より陶工が用ふる火爐の事、鉛を以て之に被ぶらすとなど考ふるとなく、唯三箇の小土瓶と三箇の壺を積み重ね、其下に焚火を置き、更らに其外側より盛んに火勢を添えけるに、器物の内部段々赤くなりしが而かも決して破碎の徴候なし。其十分に赤くなりしを

見て、尙五六時間火の中に置きしに、其中一箇は粘土の中に混じたりし海砂のために次第に溶解するを見たり。余は漸次に火勢を減じて終夜之を打守り、朝に至りて之を檢するに、三箇の良き（敢て美くしと言はず）小土瓶と、望みし如く堅く燒けたる二箇の壺と、別に一箇は溶けたる砂の光澤を被むりて恰も泑藥を被けたらんが如く、其周圍光り輝きぬ。

之れにて余は陶器物を製し得、最早不自由を感せずなりぬ、唯其形に至りては實に甚しき不同を免れざりき、其狀恰も小兒が作りたる饅頭の如く、又は製法を知らざる婦人が作りたる饅頭の如く決して一樣ならざりしなり。斯くて此新製の壺中に水を入れ子羊の肉を入れて煮たるに、甚だ良き羹を作り得たれば余の喜び一方ならざりき。左れど余は此羹を一層甘味ならしむるに必要なる燕麥の粉、又は其他の加藥を有せざりしを遺憾とせり。

陶器に次て要する者は穀物を舂くべき臼なりしが、余は到底之を作り得べき望なかりき。然れども尙穴を穿つべき大石のあらんかと島内隈なく巡りて求めけるに、切り出すに難き大なる岩に非ずんば碎け易き石のみにして、此探求には多くの日子を費やしたるにも拘らず、到底望を遂ぐる能はざりしかば、終に此計畫を斷念して更に堅き木を以て臼を作らんとを決心したり。而して之を得るは素より容易にして、忽ち一本の大樹を見出し斧を以て之を適當なる大さに伐り、其中央に穴を穿つに當りては、

恰もブラジルに在る印度人が獨木舟を作るが如く、火の助けを借りて之を成し、別にかの鐵木と稱せし堅き木を以て杵を作り、茲に穀物を舂く道具丈は整ひたれば、之を室の一隅に横へて穀物の熟するを待ちたり。

次の困難は粉を振ひ糠及び殼を區別すべき篩の欠乏なり、若し之なくんば余は決して麵包を作る能はざるべし、然れども余は之を作るべき布類を有せざりしかば、數月の間如何ともすべき樣なかりき。當時余が手に在りしものは麻布と山羊の毛なりしが、麻布は屑のみにて用を爲さず、山羊の毛は如何にして之れを織べきかを知らず、好し此織方を知るも之を織るべき道具なかりき。然るに其後終に船中より取り出したる水夫の衣服の中に、綿紗の襟卷ありしとを思ひ出し、之を以て三箇の恰好なる篩を作り、數年の間之を用ひたり。

次は麵包を燒くべき鍋なり、余は大に之に苦しみしが、遂に一の廣くしてシカモ深からざる陶器の皿を作りぬ。其圓徑は二英尺にして深さは九英寸に過ぎず、麵包を燒くときは之を爐に掛けて爐中に火を熾にすべき考へなり。而して爐は曩に既に方形（精密に方形とは言ふ能はず）の瓦を疊みて作りたるを用ひて役立たせぬ。而して麵包の製法は、かの皿の上下周圍に活火を置きて燒くにありき。

かゝる事を爲す間に穀物は熟しければ、其穗を刈りて大なる籠に入れ之を乾かせしが、穀量頗る多額

なるを以て之を置くべき大なる小屋を要するに至れり、大麥は殆んど二十ブッセル（一ブッセルは凡我一斗八升に當る）米は尙之れよりも多かりき。麵包の貯へは頗る以前に盡きて餓え居りたるとなれば、十分に之を食せんと欲せしが、又先づ毎年若干の麵包を要し、之を收むるには若干を蒔きて然るべきかを算せしに、余の一年間に要する所は、大麥と米と合して四十ブッセルにて十分なりしかば、左らば蒔くとも此前回の量にて宜しく、且つ毎年一回の農事を務めて可かるべしと考え、蒔くべき物の餘は、悉く本年の食用に供すると定めたり。

第十一回

猶木舟を製造す。總ての煩惱を解脫す。神罰の恐ろしきを悟る。

自から衣服、帽子、傘を造る。

余の心の底に暗々裏に走りし一思想は、かゝるとを爲す間にも、決して其働を止めざりき。そは讀者も既に推する所ならんが、かの住民ある大陸の一端を認めてより余の心は常に之に傾き、何時かは彼處に渡航して、此寂莫なる無人の孤島を去るの機會を得ることあるべしと思ひ續けたりしと是なり。然れとも余は此事の至危至險なるを知れり、若し誤て蠻族の手に落ちんには、亞弗利加の獅子又は虎

よりも猛惡なる彼等は、必ずや余を殺し余を喰ひ、千に一も免るゝ途なかるべし。曾て聞くカリビアン海岸の人民は人を食ふの種族なりと、今緯度を以て之を計るに、此地方は實にカリビアン海岸に遠からざるが如し。若し此地の人民が食人の種族ならんには、かの十八二十人の隊を成したる歐洲人すらも敵する能はざりし者なり、況んや唯余一人に於てをや、然らば是れ實に一考すべき所なり、左れど余は一日も彼地に到らんことを忘るゝ能はざりき。

今や余はヂューリーと三角帆の長舟を想ひ起しぬ、余は彼とかの舟を以て漠々たる千里の海を航し遠く亞非利加の海岸より航したりき、彼とかの舟と若し今爰に在ちんには、余の便眞に言ふべからざるものあらん。然れども是れ既に言ふて詮なきとなれば、更らに思ひを廻らし他の方策を考へしに、忽ち曩に暴風の爲めに海岸に吹き上げられたる小舟ありしとを思ひ、往て之を見るに依然として舊の處に在りしが、波と風の爲めに顚覆せられて其上には砂の山を成せり。余は之を見て若し修覆を加へて海上に浮ぶるを得ば、之に乘じて容易にブラヲルに歸るを思ひ、先ず林に赴き木を伐りて槓杆と轉輾器を作り、之を以て船を起し得んには其損處を補修して良き船を作るべしと考定めたり。左れど此業は實に非常なる難事にして、余が此島を動かすの力なきと同じく是亦成功思も依らぬとなりき。猶兎角勘念し難くて三四週間非常なる勞働を試みぬれども、到底余の僅かなる力にては之を引上るとは能は

ざるを見、更らに方案を變じ、今度は砂を堀り其下に木を入れて之を起さんと企てたり。左れど船は磐石の如く少しも動く氣色なければ、止むを得ず此計畫を擲ちしが、物を企てゝ成らざる時は、益々激するが人情なれば、如何に大陸に赴くの手段もがなと日夜肺肝を碎きけり。

遂に此地と同じ熱帶に住する人民が用ふる處の獨木船を造らんと思ひ起し、素より道具に乏しく助くる人もなけれど、若し能ふべくんば大木を伐りて之を試みんかと考え始め、更らに之を熟考するに此業は余に取りて寧ろ難事に非るが如く、かの黑奴又は印度人よりも余は之を作るに付て多くの便宜を有するが如く感ぜられ、林に在る處の大木を撰みて伐り倒し、其外部を適當なる形に削り、內部に穴を穿つと決して爲し難きの業に非ざるが如く思はれたり。然れども茲に一の考ふ可きとあり、印度人又は黑奴の有する者にして却て余に無きものありしこと是なり。則ち舟を作り終りて海上に浮べるに當り、之を動かすべき人力なき是なり。然るに余は當時此舟を作るとを思ひ當りたる喜ばしさに、かゝる問題は中々胸に浮ぶべくもあらず、世の愚人が屢々目前の事のみ見得て、遠き考へもなく事を始め、遂に失敗する如くシカク淺墓なるとを爲しつゝありしなり。左れど又小舟を作る間に時としては此船を如何にして水上に浮ぶべき乎の疑問を起せしとなきに非ず、然るに余は之に愚かなる答を與へて滿足したりき。曰く余は先づ之を作らん、作りて後又如何ともなすべしと。かゝる馬鹿らしき考は

常にあるべき筈なけれども、余の熱心は唯目前舟を作る事にのみ急なりしなり。

先づ森に往て一の大なる檜樹を撰び、嘗てソロモンがゼルサレムの殿堂を建築せしも、此樹ほどは大ならざるべしなど考えて、伐り倒せしが、其根の太サ直徑五英尺十英寸にして二十二英尺の端に至り猶直徑四英尺十英寸ありき。そも此樹を伐り倒すは實に非常なる勞働にして、斧と手斧を以て根を伐るに二十日を費やし、其枝葉を拂ふに尙十四日を費やし、船の形に削るに殆んど一ヶ月を費やし、水槌及び鑿を以て其內部を穿ち純然たる一隻の小舟となすには殆んど三ヶ月を費やしたり。而して成功したる所の者は一の立派なる獨木舟にして、其大サ二十六人を容るゝに足るべし。左れば余は總ての荷物を携へて、之に乘るを得るにも充分なりしなり、斯くて余の之を成就したる時は限りなき愉快を感じぬ。此舟は普通の獨木舟よりも大なるは勿論、一本の木を以て造りたるものとしては、希有のものなりき。されば余にして若し能く之を水上に浮ぶるを得んには、猶豫なく未聞の冒險的狂氣的航海を始むべかりしなり。

然るに余が之を水上に浮ぶるに付ては、幾多の勞働を費やしたるにも拘らず、全く失敗に陷りたり、小舟は海水を距ること僅かに一百ヤルド（一ヤルド我曲尺三尺一分一厘）に過ぎざるも、不幸なるは其間に一の屹たる小山ありしことなり。然れども余は決して之に屈せず、此小高き處を堀りて幾分の傾斜を作らんと決心

し、既に工事に着手しては非常の困難にも打勝ち、遂に之を成功したれども、小舟は依然として動かざりしかば、更らに其間の道程を測量して、茲に船渠を穿ち以て船を水面に導かんと決心したり、而して此工事を始むるの前、先づ開鑿すべき深サと廣サと、之に用ふべき材料とを計算せしに、此海岸は地勢甚だ高く少なくとも二十英尺を埒るに非ずんば水を得ると難きを以て、余一人の手にて此工事を成さんには、少なくも十年乃至十二年の事業なり。かくては如何に遺憾に思ふとも詮方なければ終に此計畫を擲ちたり。余は實に肺肝より之を悲しみぬ、而して又精細なる豫考を費さず、自己の力を慮らずして猥りに事業を企つるとの甚だ愚なりしを悟りぬ、左れど是れ時既に遲きの後悔なりき。

此舟の製造中、余が此島に於ける四年期來れり。乃はち自から慰して胸意を表し、此日は最も安らかに最も愉快に送れり。蓋し常に神の御言葉を研究し、熱心に之を實行したれば余は近ころ著しく神の御惠によりて幾多の智識を得たり。左れば余は最早や世界を見て以て余の關するとはなき者となし、世界に於ては何等の冀望をも屬するとなきに至れり。余は曾て世界の中に生れたり、左れど今や余は世界外に來れり。ファザー、アブラハムがダイヴスに向て「余と爾の間には一の大なる灣あり」と言ひし如く、余と世界の間には大なる距離あるなり。始め余が此地に來るや世界の總ての罪惡より移されたる感あり、故に六塵の業慾悉く解脱し、胸中一點の煩惱なく、目に美しき物を見、躰に柔かき物を着け、榮養榮華に誇らんなどの望さらく〳〵なく、聊かと雖も貪慾の心起らざりけり。是れ蓋し余が得んと欲して得ざる者なきが爲めなり、余は此全島の地主たり、若し之を稱せんと欲せば余は此地の帝王なりと號するも敢て一人の之に抗するものなし。余は此地に穀物を植えて多額に之を收むるを得べし、唯其必用なきが爲めにしかせざるのみ、余は多くの龜を有す、然れども時に一匹の龜を捕ふるときは自家の用に供して餘りあり、余は又多くの船を作るに十分なる材木を有し、且つ葡萄酒となし又は干葡萄として船に滿載すべきほどの葡萄を有す。

余が此處に用ゆる者は總て價ある者なり、左れど此等の物も余の用に供したる殘りは又如何ともする能はざるなり。余若し自ら食して餘るほどの肉を得るも、其餘肉は犬に非ずんば黠鼠の食となるのみ、余若し又自ら食して餘るほどの穀を得るも、其餘穀は徒らに地に棄られんのみ、余若し必用なき材木を伐り倒すも、唯燃料として庖厨の用に供する外は空しく地上に腐朽するのみ。之を要するに世界に於て最も貴重せらるゝものも、余に取ては左程に貴重ならず、如何なるものも余の用に供するの外は、如何ともなす能はざるなり。左れば世界に於て最も吝嗇なる守錢奴も、若し一たび余の境遇に立たんには、忽ち其性質を一變し貪慾の惡質を醫するを得べし。蓋し余の境遇には用なき多くの財産ありて、而かも望む所の僅かなる物をも得る能はざればなり、余は金銀併せて三十六磅を有し又幾多

の貨物を有す、然るに悲しいかな、此等の物は今の余に取て何の用をも爲さゞるなり。左れば今余に敷本の烟管を與ふるものあるか、又は穀物を挽くべき手臼を與ふるものあらば、余は喜で一握の金銀貨を報えん。又若し此處に英國の蕪菁と胡蘿蔔の種子の六ペンニー（一ペンニーは我凡弐錢）價ほどを得、又は蠶豆を手に一杯ほどを得、又はインキ一壜を得んには、同じく金銀一握を與ふるも決して遺憾なし。蓋し此等の金銀貨は唯箪笥の中に在りて、窟内の濕氣の爲めに黴を生ずるのみにして、毫も余を益する所なければなり。此境界に於てはダイヤモンドを以て充たされたる箪笥ありとも、余に取りては何の用をも爲さゞるなり。

今や余が生活は身心共に大に安樂なるに至れり、余は屢々跪て神が此荒涼の處に於て余に食物を供し玉ふを謝せり、余は境遇の輝ける部分のみを見て暗黒なる部分を見ざるとを學びぬ、余の不自由なる處を思はずして余の樂しむべき處のみを考えたり。而して遂に世間幾多の不平家に警告すべき一言を得たり、曰く「公等が不自由に向て起す所の不平は、公等が現に有する所の者を神に謝する心の不足より生ずるなり」と、更らに他の一事は余の心を慰むるに與つて力ありき、想ふに此一事はかゝる境遇に陷りたる人の須らく考ふべき所なるべし。則ち過去に於ける一轉の機に依りて、現在よりも尚不幸なる境遇に陷るべかりしとを想ひ、之を現在の境遇に比較すると是なり。余の境遇を以て之を語れ

ば、神は御慈悲を以て此島の海岸に近く破船せしめ玉へり、若しかの時海上一面茫漠の處に破船せしめ玉はらんには、余が生命なきは勿論、縱令萬に一も島地に漂着するとも、船中より何物をも取り出す能はざれば、決して今日迄の生命を繋ぐ能はざりしならん、然らば神の御慈悲は眞に難有き者と謂はざるべからず。余は「世に私ほど不幸なる者はあらじ」と嘆息する人に向て、切に此等の觀念を會得せしめんと欲する者なり、希くは彼等をして自己の境遇よりも尚一層悪しき生活をなせる人を見せしめよ、而して如何なる悪しき境遇も皆神の心を以て適當に授け玉へる者なるとを悟らしめよ。

余は始め神を知らず、神を畏敬せざる恐ろしき生活の中に在りしなり。父と母は素より余の幼時より神の事を敎へ、神の御力の著るしきとを余の腦に注入するを怠らざりしが。悲しいかな、一たび水夫の生活に入りてより、神を畏るゝの心忽然として消滅し、神が眼前に威嚇し玉ふとあるも之を悟らず。折角父母より受けたる宗敎心も常に他の水夫等に嘲笑せられて、遂には全く之を失ひ、聊かも神を顧みるとなく、良きとを聞く機會なきまゝに、己れに似たる罪深き者共とのみ交りて、其日〳〵を暮らせしなり。余は既に神を捨てぬ、左れば非常なる喜びの時例へばサヅーより逃れし時、葡萄牙の船長に救はれたる時、ブラジルに一家を立てたる時、英國より荷物を得し時の如き時に於て、未だ曾て心にも口にも神に謝したるとなく、非常なる困難の時にも神に祈り又は「神よ余に慈悲を與へ玉

「」などの言を發したるとなし。加之ならず、誓言を爲すか、又は神を罵る時の外は「神」と云へる名さへも之を口にせざりしなり、

既に悟りたる後も過去の生活に於ける、かゝる罪業を思ふて數月間は恐怖の念に堪えざりしが、又たゝ醒りて四邊の情狀を見、神が余を特別の慈悲を以て取扱ひ玉ひ、余の罪業に比して其責罰の輕きのみならず、多くは余を保護し玉へるを知り、左らば神は余が此懺悔を受取り玉ひ、又更らに余を惠み玉ふべしと考え、心裡大に慰むる所ありき。

余の思想は更らに一歩を進めぬ、余は未だ死せざれば過去の罪業に適當したる責罰を受くべき者なるを以て、今日の境遇は決して神に愁訴すべき者に非るを思ひ。かゝる孤島に在りて食料に窮するときは、恰もエリヂアが鴉に養はれたると同樣の奇事にして尙其綿々として永續すべきを思ひ、此無人の地に多くの便利ありて、却て余の厄難となるべき人間社會の此地に在らざりしを思ひ、人を害する獸類則ち狼又は虎の如きものゝ住するなく、余を傷くべき昆虫魚鳥なく、又は人躰を害する瘴癘の氣なく、余を虐殺して食はんとする蠻族の居らざりしを思ひ、余は現今の境遇は神の御心より授け玉ひし者なるを信じ、甘んじて之に服從するのみならず、尙此境遇は神に向て誠實なる感謝を表すべき者なるを確信したり。一言を以て之を盡せば、余の現今の境遇は一方に於ては悲しむべき生活なれども、又他方に於て幸多き生活なり。故に余が愉快を取らんと欲する唯一の手段は、只管神の御心の公平なるを思ふに在り、是れ實に此境遇に於て毎日最も必要なる課業にして、一たび之を思ふて後勞働に着手する時は、最早や何の悲しきともなきに至るなり。

却て說く、船中より取出したる物品は用ふるに從て漸く消耗し、就中インキは最も早やく用ひ盡くし、其少しく殘るものに水を入れて薄くし、屢々かくして用ひけるに、遂には紙上灰白色に映するに至りしが、尙此インキの續かん限り、毎日の著るしき出來事を記したり。而して過去を通じて一閲せしに不思議なるとは、重もなる出來事の皆同じ月日に起り、若し迷信的に之を考えたらんには、或は不幸の日と思はれ或は幸福の日とも見らるべき事皆同月同日なりしなり。余が父と朋友とに分れて海に航せんが爲めにヒウルに赴きし日、サリーの軍艦に捕へられ奴隷となりし日、ヤーマウス碇泊所に於ての破船より免れたる日、其後小舟を以てサリーより逃れし日、及び此孤島に漂着したる日、皆同じ月同じ日にして殊に余の生れたる日、亦是れ九月三十日なりしなり。左れば余が罪業深き生活と寂寥の生活は、共に同月同日に於て其紀元を有する者なり。

インキの欠乏に次て感じたる者は麵包の欠乏なり。最初の間は舟より取り出したる乾麵包を食し、殆んど一年間は毎日乾麵包一箇を以て滿足せしが、既にして穀物を得る一年前に至て、全く食すべき麵

包なくて日を消したり。而してかく麵包を食し盡して、尙食する物に不自由を感せさりしは余の最も神に謝感する所なり。

衣服も亦破れ始めぬ、此地方は常に酷暑なるものから、着すべき衣服はシャツのみにて、貯へし他の衣服は何も用に立たず、久しく乘組水夫の荷物中より得たる碁盤縞のシャツ三ダースを着して日を送りけり。素よりかく暑き地方なれば衣服なくて生活するも容易なりしが、余は裸躰にては却て直接に日光に射られて堪へ難かりしかば、殊にシャツを着して、動く毎に自ら空氣を動かし以て涼しき風を生したりしなり。又帽子も同じ必用なる品たり、若し之なくして外出せんには、忽ち熱の爲めに頭痛を感じ、到底堪ふべからざるに至る、故に余は外出する時は大概帽子を着用したり。

然るに衣服は段々破れて今は早や着るべき著もなきに至りければ、貯へ置きし水夫服を以て幾枚かの短褐を作らんと企てたり。然るに其伎倆の憐れに拙なき、衣服を仕立つるとは言ひ難くて布を綴り合はすと言ふ方然るべき位なりしが、尙能く二三枚の胴衣を作り得たり。服引も此時早や永くは續くまじく覺えけれども、個は暫しの後に作ることゝなしぬ。

前にも記したりし如く、余は鐵砲にて獲たる獸類の皮を悉く保存せしかば、之を棒に掛けて日光に曝らせしに、乾き過ぎ硬くなりて用に立つまじく思はれしは唯數枚にて、餘は悉く有用の者となりければ、先づ之を以て大なる帽子を作り、毛を外にして雨を防ぎ。次に此等の皮を以て衣服一襲を作りぬ、則ち胴衣と襯衣なり。就中襯衣は膝迄垂れしが、素より暖を取る爲ならずして熱を防かん爲めに作りし者なれば、胴衣も襯衣も襟を合はす樣の事なく、實に寬々便々たる者なりき。大工として伎倆乏しき余なれば、仕立屋としても上手なる可き筈なく、其仕立方の拙なきは言ふ迄もなかりしが、左れどこれも當時の余に取ては甚だ良き衣服にて、雨天の日に此衣服とかの帽子を着用なして出でんには、雨は皆蓼々たる毛の爲めに彈かれて、余の身躰は少しも需るゝことなかりき。

次には多くの時間と勞力とを費やして、甚だ必要なりし蝙蝠傘を作りぬ。ブラヂルの如き熱國にては常に之を要せしが、此の地はブラヂルよりも一層赤道に近きが故に、一層の必要を感じ、獨り

熱き晴天に之を要せしのみならず、實に又雨天の日に必要なりき、而して余はブラヂルに在りし日に親しく此製造の法を見たるとありて、之に關する普通の知識を有せしかば、急に之を始めしに其實際の困難は想ひしよりも甚しく、豫じめ考案を定めて、是ならばと考えて作りつゝも、或は形の思ふ樣ならぬもの出來或ひは天晴れ良き者を作りたりと思ひて後に至りて開くとは開きしも、閉づるとの出來ざる者を作るなど、一旦作り毀ちて復た作り代へし者二三箇に及びたり。左れど遂に適當なるものを作り得、布を張るべき處へは獸皮を張り、絨毛蓬々恰も廂の如く、能く雨を彈き又日光を防ぐに足れり、天氣の最も熱き日にも之を以て外出すれば、之なき日の最も涼しき日よりも涼し、而して一たび其必要なきに至れば直ちに之を閉ぢ、腋下に挾んで、何れにても運ぶを得べきに少からざる便宜を覺ひたり。

余の心は神の御指圖を信仰し、余の運命は悉く神意に一任したるより、余は大なる安慰を以て生活しぬ、常に此の如き生活は社會に出でゝ、人と交らんよりも樂しき者なりと思ひぬ。時として人と會話すると能はざるを恨むの情起るも、常に自ら慰め、かく我思想を以て我に語り、又言はんと欲する時は祈念を凝めて神とさへも語るを得る此生活の樂しみは、世界に出でゝ人間社會に交際するの樂しみよりも幾層倍樂しき者に非ずやと我と我心に問ひぬ。

第十二回

獨木舟を沿海に浮ぶ。又々殆んど溺死せんとす。我名を呼ぶものあるに驚く。沙上に人の足跡あるを見て恐怖す。

爾後五年間は余に取て非常なる變事もなく、同樣の場所に同樣の生活を爲して過せり。則ち年々大麥と米を作り、葡萄を培養して先づ一年の食料を蓄へ置き、毎日鐵砲を以て鳥獸を捕獲するを以て常務となし、而して多くの勞働を以て一の獨木舟を作りしが、舟既に成りて後ち更らに半英里を隔てたる海に浮べん爲め、其間の地を穿ちて遂に廣サ六英尺幅四英尺の溝渠を通じたり、曩に舟を作りし時は何の豫想する所もなくて作りしかば、舟成りて後之を海面に浮ぶると能はざりしが、今回は豫じめ之を海面を距る半英里の處に置き、是ならば必ず成功すべしと信じて之を始めたり。果して二度目は初度よりも賢こく、材料に適當なる木もなく、舟も水面を距る半英里の處に在りしと雖も、尙常に成功の期あるを想ひ、二年間一日も屈することなく、終に之を成功したり。

抑も余が小舟を作るの素志は此島より殆んど四十英里を離れたるテラ、ファーマに往くに在りしなり、然るに此二度目に作りたる舟は、其規模甚だ小にして到底此計畫に適すべくもあらざりしかば、終

に斷然テラ、ファーマに航するの素志を飜へし、更らに此小舟を以て島の周圍を探檢し、尙發見すべき部分を檢せんと決しぬ。蓋し余は曩きに陸行して島の一部を見たれば、今度は舟にて未だ探らざる他の部分を見んと欲すればなり、さて此計畫を爲すに當りて余は愼密なる思慮を廻らし、先づ小さき檣を作り、次に乘て貯へたる帆の切れを以て、一の小帆を作りぬ。帆と檣と既に出來たれば之を以て舟の操縱を試驗するに、其成績十分なりしかば、更らに小舟の兩端に小房(寧ろ小箱と謂ふべし)を作り、此内に雨又は海潮の飛沫に濡らす可らざる食糧、器具、彈藥等を置き、別に小舟の中央部に小さく長き凹處を穿ちて之に鐵砲を置き、濕氣を防がん爲めに布を以て其上を掩ひ、船尾の方には檣の如く蝙蝠傘を立て、日光を防ぐと恰も筥の如くならしめたり。

かくて時々船を水上に浮べ、最初の間は決して遠く走らざりしが、余の此小王國視察に熱心なる、遂に全國巡邏の議を決し、先づ船中に航海の間に必要なる物品を備へぬ。

一、大麥製の麵包二十四箇。(余は寧ろ之を菓子と呼ぶ)一、燕米一壺。(余常に此多量を食す)

一、糖水酒の小瓶一本　一、山羊の肉半匹分

一、大なる水夫服二枚(一枚を座蒲團とし一枚を夜具とす)　一、銃獵用彈藥

余が此島を領してより、(寧ろ此島に禁錮せられてより)恰も六年目なる十一月六日に於て、此航海を

始めぬ、先づ東方に向ひて船を進めしに、一帶の岩礁前面に横はり、或は高く水面に出で、或は低く水中に沒して脈々相連るもの殆んど二海里に達し、殊に半海里餘は砂磧堆積して淺洲を爲せしかば、之より前に進まんには必ず岩礁の端を回航せざるべからず。

余は此岩礁を見て若し此岩端より海に出でんには、遂に歸路を失ふとあらんとを慮り、都合によりては最初の企畫を中止し、直ちに引返へさんとを思ひ定め、乃ち先づ此處に錨を投じぬ。錨は曩に船より得たる破錨より作りたる者なり。

投錨するや否や、余は鐵砲を携へて上陸し、小山に攀ぢ上りて、四方を見下しぬ。先づ航すべき前途の海面を見渡すに、勢銳く恰も怒れるが如き激しき潮流、東に向て走り、其餘波流れて余の投錨したる處より遠からざる點に達せるを見る。恐しいかな、余にして若し此處に投錨したるまゝ此小山に登らざりせば、前途にかゝる危險なる潮流ありとも知らで進行し、忽ち其中に吸ひ込まれ、如何なる憂目に逢ひしやらん。見れば島の他側にも同じ激流あり、其濱邊には荒らき渦の恐ろしげに卷くも見えけり、さては若し一たび此潮流の中に陷りたらんには遂にかの渦中にも卷き込まれしならん。

二日間此處に止まりぬ、風は東南東より吹き出で、恰も潮流の方向と正反對なる者から、海上頗る穩かならず、此近邊に泊まると甚だ安全ならざるの思ひあれども、又此處を動かんには、誤て潮流の中

に陥らんとの危險ありき。然るに第三日の朝に至り夜來の風は大に減じ、海も穩かになりければ、余は往々に船を進めぬ、是れ實に大なる過ちにして、余が此經驗は世の無智無謀なる水先案内者流を警しむるに足るものなりき。其潮流の中に入りし時迄も、海岸を距るとは僅かに數尺なりしが、驚くべし此處既に非常の深さにして潮流の急なると恰も一時に水門を開きたるが如し。余は此意外に驚き蒼皇潮流の中を去らんと務めしが、力中々足らず、見る〳〵中に左りの方に押し流され、島の他側なる渦の方には流れずして茫々たる大洋の方に流れ往くに海上最と靜かにして、余を助くべき少しの風だになければ、唯一本の櫓のみにては如何に務むるも詮なく、思へばかの島の兩側を流る〳〵潮流は必ず數海里の内に合流するとあるべく、若し舟の其點に達するときは水力一層烈しくなりもて行き、余は再び島に歸るべき機會なかるべし。左りとて今にして之を防くべき一の手段もなければ、嗚呼、余は最早や前途に死の外何物をも見る能はざるなり。海はかく靜かなれば舟の顚覆せんとは思はねども、食物の欠乏より餓死すると必常なり、今此小舟の中には曩に海濱に於て捕へたる大龜一匹の貯へあり、且つ新鮮なる水一罎(陶製德利)はあれども、シカモ海岸なく島なく渺々漫々として少なくも一千海里に延びたる大洋を航するに、是程の食糧何の用をか爲さんや。

嗚呼、余は今にして始めて神が人生の最も悲しき境遇よりも、尙一層悪しき境遇を作り玉ふの容易な

るを見たり。余は今飜てかの寂寞荒寥の島を見れば、宛かも世界に於て最も樂しき地の如くにて、余が滿腔の企望は唯再びかの島に歸り得るに在り。因て余は兩手を擧げて延び上り、オー、幸福なる孤島よ、余は最早や汝を見ざるべし、オー憐れなる動物よ、余は何處に往きつゝありやと聲を限りに叫び。且つ曩に島に在るの間神に感謝するの精神に乏しく、屢々其寂寥を怨みしを悔ひ、既に在島中此の如くなりし余なれば、今此危險に陥るも何物か能く余を救ふて再びかの島に歸らしむるとあらんや、と、自ら責め自ら咎めて心は亂れ腸は絶ちぬ、嗚呼余は最初余の境遇の眞價を知らざりしなり、かの愛すべき島(今にしてシカ見ゆ)に在るの日に於ては、現に遭逢せる如く二海里の沖に押し流されて再び島に歸ると難きほどの失望に陥るとを夢にも想ひ及ばざりしなど愁然として太息しぬ。左れど余は尙勇を鼓して力の及ばん限り舟を漕ぎ、成るべく北方に向け、少しにても島の方に漕ぎ寄せんと務めたり。

正午は來りぬ太陽は子午線を過ぎぬ、顏に當りてサク〳〵と微風起りたる心地し、屹と身を聳つれば風は南々東より吹き出でたり。こは嬉しやと心に勇み、三十分間も立ちけるに早や快き追手風となりけり。此時余は島より驚くべき距離の處にありければ、若し天氣曇るか又は一面霞立ちたる日ならんには、羅針盤なき身の悲しくも方角を知らで、島の見えざるまゝに如何とも詮方なかりしならんに、幸

ひなるかな、此日一天晴朗些少の雲霧なく、島は彼方に明らかに見えければ、余は直ちに檣を立て帆を上げ、務めて潮流の外に逸せんことを圖り、成るべく北の方に針路を取りぬ。斯くて小舟の走る間に始め混濁なりし水の漸く清明となりしを見て、是れ必す潮流の變化なるべしと推し、能く〳〵見れば果して潮は東部半英里許の間、一の岩礁の前に於て分裂し、一は激烈なる勢力を以て南に走り、他は岩礁に衝突して反動を起し、茲に渦を卷き更らに强き流れをなして、北西の方に走れり。

將さに死刑に就かんとして再審を命せられ、將さに盜刃に殺されんとして人に助けられ、又は之に類したる危難より逃れし時の情を解する人に非ずんば、決して余が此時の喜悅を察する能はざるべし、余が如何に喜んで小舟を操り、風の快きに乘じて如何に喜んで帆を上げ、飛沫紛々たる急潮激湍の上を如何に愉快に走りしかは、居家安眠の人の決して察する能はざる所なるべし。斯くの如く渦は余を戰せて島の方に近かく一海里を運びしが、瞬間に最初余を彼方に逸せしめたるかの激流よりは、北の方殆んど二海里の處に到れり。斯くて余は島に近くに從ひて、島の北方海岸を見ることを得たり。潮流と渦の助力に依りて、更らに一海里餘島に近きし時、潮流の勢力は茲に盡きて最早や余の用をなさずなりぬ。南方に余を走らしめたる島の南側の潮流と、北方に余を奪らし歸りたる此側の潮流は茲に島の邊りに相衝突し、相平均して何れの方にも流れず少しも余を助けざるに至れり。左れど余に取て

便利なる風は依然として吹きければ、余は前の如く力を極めて漕かざるも、舟は駛々として島の方に近づきたり。午後四時頃島を距ること僅かに一海里の處に來りけるに、かの危難の起りたる岩端は南方に突出し、一層激しく潮流を南に走らし、北方は又依然として渦を爲せるを見たり、然れども余の舟は正西に在るを以て潮流に感せず、兎角する間に風も程好く吹き始めしかば、渦上を難なく横過し、北西に向て走ること一時間許りにして、海岸を距ること一英里の處に達し、此處よりは水面平滑にして操縱自在なりければ、直ちに島に上陸するを得たり。

上陸するや否や、余は跪て神が余を救ひ玉ひたるを謝しぬ、心裡には又小舟の爲めに救はれたりとの念も起りしが、無理に之を排斥して只管神の恩惠を謝し、更らに森々たる樹木の下に隱れし曲浦を發見して之に小舟を繫ぎ、過度の勞働に疲れたるまゝ直ちに其邊に入りて眠りぬ。

今や余は歸路に迷ひたり、餘りに冒險的に走りたるが爲めに、殆んど前後進退を辨せざるに至れり、如何にせば島の西岸に出づべきか更らに分らず。且つ最早や此上に冒險を試みんとの氣力もなければ、唯是れより海岸に沿ふて道を西方に取り、安全に小舟を入るべき港灣を求めて之れに入らんと欲し。乃ち翌朝此處を出發して、三英里許西に航せし處、前に殆んど一英里許りもあるべき灣あるを見て喜んで之に入れば、其狹き結局は澤々たる小流となり、余が小舟の爲めには此上なき良港なりけり。依

て之を小船渠と思ひ做して小舟を繋ぎ、次で陸に上りて余は今果して何れの處にか來れると見廻はしたり。

海岸を歩すると未だ數歩ならずして既に其見覺えある海岸なるを悟りしかば、小舟に歸りて鐵砲と蝙蝠傘を取出し、天氣非常に暑ければ他は其儘舟中に殘し置きて此處を去り、危險多かりし航海の後なれば陸地を歩するとの限りなく樂しくて歩みも早やく、晩景朦朧たる頃には余が舊廬に歸着し、垣を越へて内に入りぬ。先きに此處を出立する時に具へ置きたる物品は、皆元の如く順序正しく排列されて、少しも亂されたる迹なきに心落付き、勞れたる足を休めて、後は前後も知らず高鼾、其儘其處に眠りけり。

眠れる内に不思議や、夢か現か我名を呼ぶ者あり、「ロービンソン、ロービンソン、クルーソーよ、汝は何處に在りや、ロービンソン、クルーソーよ、汝は今何處に居るや、汝は今迄何處に居りしや。」舟を漕ぎたる勞れと、長汀を歩したる勞れにて死したる如く眠りし余は、夢の如くに此聲を聞き做せしが、尚ロービンソン、クルーソー〳〵〳〵と呼び續くる聲に驚き、目は全く醒めぬ。左れど何物の來て我名を呼ぶにやと、恐怖の心は悚然として肌膚に粟を生ぜしめ、身は自ら震慄して胸騒ぎ暫時は止まざりき。

漸くにして目を開き恐る〳〵〳〵外面を見遣れば、何の恐ろしきとかや、ポールは籬の上に在りて此方に向けり。さては今の聲は此奴の囀りなりしかと、起き出て、外の方隈なく見廻はすに、恐るべき人も居らねば漸く落付き、ポール〳〵と呼びて手を出せば、可愛や馴れたる彼は嬉しげに飛び來りて余が親指の上に坐し、尚「憐れなるロービンソンクルーソーよ、如何にしてか汝は此處に來りしぞ、汝は何處に在りしや」など叫びぬ。是等の言語は皆余が彼に教えたる者なりしなり。

余は家に歸りて後數日は海上にて遭逢せし危難を回想せしが、尚かの捨て置きたる小舟を島の此方に取り歸りたしと望む事切にして、様々に考えたれども遂に之れを實行するの手段を知らず、過ぐる日回航したる東海岸は小舟を以て歸り來るに難からざるを知れども、余は彼處の潮流の爲めにかの危難に逢ふたる者なれば、之を思ふ毎に身心戰慄して又之を試むるの勇氣なし。左れば他に詮方なければ最早小舟を捨つるの外策なく、幾多の歳月と勞働を費やして作り、之を海上に浮ぶるにも亦幾多の時日と勞力を費やしたる小舟なれども、事の勢止むを得ざれば斷然之を棄つるとに決心し。其後一年がほどは閑散なる生活を營み、神の御心の命じ給ふまに〳〵一任して萬事を面白おかしく、社會交際の樂なき外は何の不自由もなく暮しぬ。

此間は種々に器械運用の練習をなし巧みに必要なる物品を作り得しかば、かゝる僅かなる道具を以て

尙斯く技倆の進歩する上は、他日必ず良き工人となるべしと思ひたり、之に加ふるに陶器物製造の技術も、亦思ひしよりも完全となり、製造も容易にして形も醜からず。殊に余の最も喜びしは、煙草を吸ふ煙管を作り得しとなり、始め船中には幾多の煙管ありしが、當時未此島に煙草の在るを知らねば、煙管に氣も付かざりしに、其後思ひ起して遽かに之を求めしも、此時は早や何處に往きしや見當らず。元來吸烟を嗜みし身の烟草のみありて煙管のなきを此上なき遺憾に思ひしに、此頃に至て始めて之を作り得しかば、其形の醜く製法の拙きに關せず、非常なる愉快を感じたり。

籠細工も亦頗る改良し、必要なる籠數多を作りしが、其細工は美麗にはあらざりしも、物を入れ置き又は物を運搬する等の實用上に甚だ便利なるものとなれり。例へば外にて山羊を殺すとある時は、之を木に掛け皮を剝ぎ、之を料理し籠に入れて持ち歸り。龜を捕へたる時も之を料理し、卵を取出し肉を切りて籠に入れ、其餘の物は其儘其場に捨てゝ歸り。穀物の乾きたる時は、之を舂き篩にかけ、大なる深き籠に入れて之を貯ふ等の如し。

光陰は矢の如く余が此島に漂着してより早や十一年の星霜を閲し、彈藥も將さに乏しきを告げんとするに至れり。此物固より供給するに難きものなれば、愈々之を消費し盡したる曉には、如何にして山羊を殺すべきかを考え始めたり。曩に此島に來りし三年目に子山羊を得て之を飼ひ、且つ如何にして一匹の牡山羊を得んと望みしとありしが、不幸にもかの子山羊は其歳をも越さで死し、今は一頭の山羊だに有せざれば、更らに如何にもして生きながら山羊を捕へ、殊に子を孕んたる牝山羊を捕へたしと色々に考ふる内、端りなくも籠絡の事を思ひ起したり。乃ち直ちに之を作て再三試みしに、用ひたる綱の線金屬ならねば、常に切られて餌をのみ食はれ、山羊は一匹も捕ふる能はざりし。かくては果てじと更らに工夫を凝らし、今度は山羊の能く來る所を擇みて、數ヶ處に陷穽を堀り、簧子を以て之を掩ひ、重きものを其上に置き、其邊りへ大麥又は燒米を蒔き、ワザと始めは罠を置かざりしに幾多の山羊の來りしと覺しく、蒔きたる穀物を食ひ其邊に斑々たる足迹を印したり。乃ち時を計りて一夜罠を置き、翌朝行て成否如何にと見るに意外にも依然として罠は落ちず、餌は空しく食はれて何の獲物もなかりしかば、心大に失望せしが、尙一回にて屈すべからずと思ひ、又も其夜試みしに、翌朝一の穽に一匹の大なる老牡山羊を見出し、他の穽には牡一匹牝二匹都合三匹の子山羊を捕へたり。老獸は勢猛くして中々近付き難かりしかば、之を殺さんとも思ひしが、殺すは本來の目的に非るを以て之を放ちしに、驚いたる樣子にて馳せ走りぬ、左れど余は當時未だ、饑餓は獅子をも馴らすべきを知らざりき、余にして若しかの老獸に食物を與へずして、三四日を過ごし十分に餓えしめて後、少量の水と穀類を與へんには、山羊は元來怜悧にして柔順なる動物なれば、忽ち馴れて子山羊の如くなり

しならんに然かせざりは遺憾なりき。老山羊を放ちし後、三匹の子山羊の方に赴き一匹づゝ之を捕へ、綱を以て之を繫ぎ漸く率きて家に歸りぬ。最初の内は兎角に馴れざりしが、甘味なる穀物を與へて之を導きしかば、須臾にして三匹共に馴れぬ。左れば彈藥の盡きたる曉には、斯くして山羊を馴らし、恰も牧羊の群の如く、家の周圍に徘徊せしむれば、食に不自由はなかるべし、併し此等の子山羊も遂には成長して逃げ去るとあらんと思ひければ、別に土地を限りて其周圍に固き籬を作り、之れより外に出でざらしむめんと案じたり。

かゝる事は唯一人の手には餘るべき大事業なりしが、左りとて必ず爲さゝるべからざるとなれば、先づ彼等の食すべき草と、飲むべき水と、日光を防ぐべき樹木ある場所を求めたり。牧場に經驗ある人は、必ずや余が此地に於てかゝる場所を、容易に見出し得べしと想ふべく、又余が此時少なくも周圍二英里の籬を作らざりしを惜むなるべし。實に余は此牧場の周圍を十里とするも。之を作るの時間を有せしを以て、決して爲し能はざるとなかりしと雖、かくては山羊の性を荒くするの患あり、且つ周圍十英里は餘りに廣く殆んど全島に等しき者なれば、一たび此内に放たんには、復捕獲するに容易ならざるの憂あり。依て余は長さ百五十ヤルド幅さ百ヤルドの地を卜して牧場とし、其周圍に籬を作り、畜類の增加するに從て漸次に其面積を廣くせんとに決したり。

非常に勉强して此工事を務め、三ヶ月にして成就せしが、其間三頭の子山羊は、常に余の身邊に繫ぎて、掌中に大麥と米を置き手より直ちに之を食せしめ、以て漸次に余に馴れしめ、後日此牧場に放つも余を見る時は直ちに傍に走り來る樣にしたり。

牧場成り山羊を放ちてより一年半にして、十二頭の親山羊と子山羊を得、尙二年の後には殖て四十三頭となりしが、此外數頭は既に斃して食料に供したり。かくの如く繁殖し來りければ、別に又數箇の小地を撰び、垣を結んで彼等を分ち入れ、彼此の間に門を設けて交換往來の便にし且つ獸檻を設けて、撲殺に便したり。

かくて余は山羊の肉を常食としけるに、圖らずも又山羊の乳を得ることを想ひ起し、大に喜んで之を試みしに、時としては一日に一二ガロン(一ガロンは我二升五合二勺)を得るとありき、誠や、天は各々の動物に食を給し、又能く其如何にして食すべきかを指示するなり。余や未だ曾て牛乳を搾りたることなく、バタと乾酪の製造の如きは、唯少年の時之を瞥見したるに過ぎざりしが、種々に之を試み幾多の失策を重ねたる後遂に此等の業を爲し得るに至り、且鹽をも製し得るに至れり。(海中の岩上に置て日光に曝らし既に半ば鹽となりたる者を取て更らに之を製す)嗚呼如何に造物主が其生產し玉ふ動物に對するの慈仁なることよ、將さに沒落せんとする境遇に立つ者に迄も、如何に慈仁なることよ、如何に神は最も苦

々しき天運をも和らげ、吾人をして牢獄の中よりも彼を拜せしめ玉ふを得せしむるよ、餓死の外何物をも望む能はりし此荒涼の原野に於て、彼は如何に食物を余に與へしよ。

人或は余が此島居に於て、家族（猫、犬、鶏鵝）と共に團欒して會食するの樣を見ば、思はず噴き出すもの、あらん、會食の坐には全島の王たる余、則ち皇帝陛下あり、余は余が臣下に對しては絶對的の主權を有す、余は余の臣下に對しては殺すも、放つも、自由を與ふるも、壓制を行ふも、一に余の欲する儘にして、如何にするとも決して余の臣下の間に叛逆を企つるものあらず。看よ、余が臣下を會して王の如く食する狀を、ポールは余の寵臣の如く、余に向て語を交ゆるの特權を許され、犬は既に老ひて衰弱したれども、配遇なければ同種を殖すことなくて常に余が右側に侍じ、二匹の猫は食卓の彼方と此方に分れ、坐して時々余が手づから與ふる肉片を待てり、是れ實に彼等に取て特別の恩賜なるなり、此二匹の猫は曾て船中より伴ひ來りたる者にはあらず、彼等は數年前既に死したれば、余は之を家の近傍に葬りしが、其内一匹の牝猫は前に記せし如く一時姿を隱し、何處の猫とや配しけん、幾多の子猫を率ゐて歸り來りぬ、余は其の内二匹を馴らし、他は悉く林中に追ひしに、其の後屢々來て種々の惡戲を爲しける故、止むなく彼等の多くを射殺し、殘りし二匹のみを養ひ、余の傍に侍らしめしなり。斯く余は多くの家臣を從へたれば常に賑々しく暮らし、時としては餘りに多數なりと思ふばかりにて、

絶えて人間社會の交際に欠けたるとを思ひ及ばざりしほどなりき。

左れば余は最早や此上の冒險を試みんとの念はサラ〳〵起らざりしが、尙聊か小舟をかの儘に打捨て難き心ありて、時としては島を回航して此方の海岸に携へ來るべきかと思ひ、又時としてはイヤ〳〵最早や小舟なくて暮らすべしと思ひ返へせしが。遂にかの突出したる半島の處に往き、曩に登りたる小山に登りて、海岸の狀景と潮流の模樣を見んと考ふるに至りぬ。乃ち旅裝を整へて出發せしが、若し此姿を我英國人に見せたらんには、如何なる人も大に驚かずんば大に笑ふべし、余自身にも我姿を見て、此儘ヨークシヤアの邊りにても歩みたらんには、如何に奇異ならんと思て獨り大笑したりき。試みに今其風裝を記せば、

頭には山羊皮製の大にして不恰好なる高帽子を戴き、其後部には紐の如き者を垂れたり。此の地方にて衣服の下に雨水の浸入するほど身躰を害する者あられば、此帽子は頸より入らんとする雨を彈き、且つ之を以て强き日光を防ぐ爲めにするものなり。

身に着けたる短褐の裾は山羊皮にて作り腿の中部に垂れ、其下には廣く曲りたる股引を着す、是れ亦老牡山羊の皮にて製したる者にして其毛長く垂れ女袴の如く脛の中部に達す、而して靴、及び靴足袋はなければ、其代りとしてかの俳優又は獵夫の穿つ半長靴に似たる者を作り、之を着けしが、其狀最も

不恰好にして恰も脛袢を穿ちしが如し。

廣き山羊皮製の帶を占め、劒の代はりに小鋸と斧とを携ひ、肩には少しく狹き皮帶を掛け、其端に二の小囊を結び、一には、火藥を入れ他には彈を入る。

背に籠を負ひ、肩に鐵砲を掛け、頭上には鐵砲に次て必用なる醜拙なる大傘をさしかざせり。

余の顏色は、此の如き赤道を距ること九度乃至十度の熱帶に在りて、色の黑白に注意せざる生活なれば、必ず黑白雜種人位に化したるべしと、誰れしも想像する所あらんが、實は左程に變りたるとなく、鬚も一度は七寸ばかりに延びしが、其後剃刀を以て之を剪り、鼻下のみ殘し、かの回々教徒の鬚の如くに美く延ばし、其形と日ひ長さと日ひ、英國にても驚かる可き美くしき者なりしが、此の如き鬚の延ばし方は、かのサリーの土耳其人が往々にしてなす所なりき。左れど余がかくの如き風裝をなし居たるは、誰れにも見られたるとに非るを以て、更らに之を喋々せざるべし、唯此の如き風裝にて、此四五日間の新旅行を始めたるを一言するのみ。

海岸に沿ふてかの小舟を碇泊したる處に達し、漸く岩を攀ぢて小山の上に至り、前の如く海上を一瞥するに、不思議なるかな、海面一望平滑にして微波なく、急潮激湍の如きは其影にも見るとなし、之を前日に比すれば殆んど別種の感あり。余は之を見て且つ驚き且つ迷ひ、若しや海潮の然らしめしに

非るやと、暫時は此處に止りて其如何に變するかを視察したり。果せるかな、今まで退きたりし潮は漸く西の方より滿ち來り、濱の方より流れ來る水と合して、一大激流となり、北西より吹き出でたる風は益々之を激して海面頓に一變し、曾て見たるが如き形狀に復しぬ。余は此海面の變化を見て、熟〻其潮流を考へ、かの捨て置きたる小舟も之を干潮の時に取り來らんには、容易に之を成功し得べしと氣付きしが、尙之を決行せんと欲するに當りて、忽ち曾て遭逢たる危難を回想し、身心悉く慄靡して到底之を斷行するの勇氣なかりしかば、遂にかく一小舟の爲めに苦しまんよりは、寧ろ別に一舟を造りて島の兩側に一隻宛を排ち浮べんに如かずと考へ出し、又直ちに勞多しと雖もシカモ安全なる此考按を決行したり。

却て敍す、讀者も知る如く余は此島に二ヶ所の邸宅を有せり、其一は則ちかの巖嶺にして、周圍には壁を築き、背後には洞窟を負ひ、內に天幕を張り外に柵を結び、嶺內は漸次に開鑿して、今は數箇の室に分たれ、就中最も大にして空氣の流通良き室は、大なる陶製瓶壺を以て滿たされ、壁には十四五の大籠あり、各穀物の五六ブッセルを貯ふ、或は穗の儘にて入れたる者あり、或は莖のみ切り落として入れたる者あり、或は又手を以て揉み碎きて入れたる者あり。

外に結びたる柵の生籬は、今や成長して鬱蒼たる林を成し、一見して其後に人の住處あるを知る能は

さらしむるに至れり。而して又此住處の傍に二項の田畝あり、毎年正しく耕やし、正しく蒔けば、其期に至りて常に正しき收穫を生ず、穀の少しく多からんとを欲せば、更らに少しく其近傍の地を增し耕へして之を蒔くなり。

他の一邸は余の別宅なり、始めは眇たる草庵なりしが、漸次に之を修繕裨補して今や堂々たる一箇の邸宅となれり。周圍に籬あり、其高さを測りて製したる梯子は、常に其内側に立てり。始めは數本に過ぎざりし生杭も年々繁殖し、其枝葉は繁茂して邸内一面を覆ひ、以て日光を防ぎ、兼ねて雨を防ぐ、其下に棒を立て帆布もて作りたる天幕を張り、幕の下には獸皮を以て製したる臥床と毛布を敷きたる水夫用の臥床を置き、床の上には夜具となすべき大なる衣服の外種々なる柔かき物あり、而して余は本宅に不在の時は常に此別宅に閑居するなり。

別宅の近傍には牧場あり、牧場の籬は實に限りなき辛苦を以て作りし者にして、最初之を作るに小さき枝を以てしたれば或は山羊の之を破りて奔逃せんとを恐れ、成るべく其間を密接して些少の間隙なからしめしに、其後漸く成長して遂には通常の墻壁も及ぶべからざる堅固の生籬となりしなり。而して余は此内に澤山の肉、乳、バタ、乾酪等を有するなり。

此近傍には又多くの葡萄を生ず、以て干葡萄となして冬日の食に貯ふべし、余は常に之を保護し常食中の最も滋味となせり、干葡萄は其味甘美なるのみならず、又衛生に少なからざる益を有する者なり。而して余が別邸は本宅より舟の繫ぎある處に至る中途にして、近日は小舟の中に具へたる物を整へんとて、屢々之に往來せしかば、其度毎に此處に休憩したり、時としては又鱗を散せんが爲めに小舟に往くとありしが、シカモ決して海岸より遠くへ漕がず、一擲石距離か二擲石距離の間を往來したるのみ、蓋し潮流暴風其他不意の事情に依りて、再び余が力の及ばざる結果を生ぜんとを恐れてなり。」

偶ま余が生活に一生面を開くとの出で來れり、一日正午に近き頃小舟の方に赴かんとて往きし途中、砂上に何やらん足迹の如きもの見えしかば、不審に思ひ、能く〳〵之を視るに何ぞ圖らん、明らかに人間の足迹なり。余は之を見て雷に擊たれたらんが如く、又妖怪に出逢ひしが如くに驚き、急に耳を聳て目を閃かして四邊を顧みしが、別に何の異狀もなければ更らに高き處に上り、或は濱邊に出で、人やある、人影やあると探り求めしが、彼處に彼一ッの外は足迹だに見えず、さてはかの近邊には尙多くの足迹のありやせん、然らずんば足迹と見しは或は余の妄想にてやありけんと思ひ、取て返へしてかの足迹ありし處に至れば、依然として唯一ッ、其形は指と云ひ踵と云ひ間違ふ方なき人の足迹なり。余が心は之を見て打驚ぐと一方ならず、何の考えも浮べばこそ、唯一概に恐ろしくなり、遽かに駈け出して我家に歸らんとするに、木の葉の颯と落ち、草の風に動く形まで人の居るかと驚かれ、二

三歩毎に振り返へりつゝ走るに、果ては我歩む足音迄、誰れが追ひ來るやらんと身の毛立ち、想像は恐ろしき方にのみ走りて、目に觸るゝ者悉く余を驚かし、數ふべからざる幻想は余を切かして、城郭（此時より余は余の家をシカ呼ひぬ）の見ゆるや否や、飛ぶが如くぞ馳せ入りける。

此足迹果して何物の足迹なりや、クルーソーは是より如何なる奇事に遭逢するや。其奇事に逢ふて彼は如何に之を處するや、讀者乞ふ之を第二卷に徵せよ。

ロビンソン・クルーソー **絶島漂流記卷一** 終

明治廿六年二月七日内務省許可
明治廿七年三月六日印刷發行

版權所有

世界文庫定價
一冊（百六十頁）金拾五錢
六冊前金八拾五錢
十二冊前金壹圓六拾錢
廿四冊前金三圓拾錢
郵税一冊六錢

編輯兼發行者 大橋新太郎 日本橋區本町三丁目八番地
印刷者 愛敬利世 京橋區西紺屋町二十六番地
印刷所 株式會社秀英舍 京橋區西紺屋町廿六七番地
發兌元 博文館 東京日本橋區本町三丁目

大賣捌所

神戸 全名古屋 全京都 全坂 全大 全 全 全 全 全 全 東京
熊谷 片野 新潟 川中治 田枝 東律 中村 平井 岡島 梅原新 柳原喜 吉岡 盛文 上屋田 石川兵 信濃文 東々 水海 東野 東京
久榮堂 東四郎 文代助 兵衛 中齊藤 律房 村雄 平阪 井阪 島鶴 新鶴 原亀 喜兵 岡平 文本 屋商 田店 川堂 文堂 々次 海郎 東京堂
千葉 東ノ 鴻巣金 全横濱 甲府 沼津 全濱松 岡崎 津日 四市 全本 松野 長島 鹿兒 熊本 全 全 神戸
全田 多島 長見屋 丑屋 丸屋 柳正 蘭新 林屋 谷島 愛屋 河島 伊藤 高久 水野 四澤 吉田 長崎 船山 吉次 舟岡 井支 新阪
支店 屋本 爲一 孝太郎 書店 契書 阪屋 源三郎 友書 九右衛門 善太郎 奚書 琴太郎 幸喜 太郎 兵次 南郎 次郎 支堂 岡店 阪舗
弘前 全岡 盛岡 石巻 全島 仙臺 全河 福島 白都 平宮 柄木 宇都 前橋 飯田 小瀬 上諏 全訪 大津 水戸 佐倉 佐原
野崎 野村 便勘 佐藤 山口 佐久 木村 上野 奥屋 清彦 宮村 內川 煥山 皆光 廣川 坂庫 宮文 太田 澤支 川二 朝又 吉野 田利
九兵衛 益兵衛 庄之助 德兵衛 書 文書 書 書 書 港三 乎三 文星 日新 支堂 二堂 銀藏 兵衛 德兵衛
全高田 全長岡 新潟 高田 宮崎 小松山 金澤 武生 福井 酒田 增田 横手 全田 秋澤 米形 全山 青森
高橋 室直 目黑 覺書 櫻井 學海 清明 宇都宮 靈源 安根 品川 立庄 太 木 鈴海 東林 大忠 澤四 木穗 見秋 成清 紫兵 月衛 牧長 八太 文野 字德 屋太 書郎 田商
書店 三郎 十平 治作 盜堂 堂 平堂 郎 三郎 門 右衛 書八 店郎 郎堂 穗平 郎 書店 店
全函館 全佐賀 全札幌 全長崎 大分 久留米 全博多 德島 歌山 和島 廣島 姫路 岡山 松江 水原
笠間 小野 前橋 家野 魁河 內野 蛯屋 虎正 山內 菊池 森 積善 阪舘 平井 宮井 松川 朝村 武榮 川內 四岡
問屋 左衛 自治 文 文 內 及 野 與 川 銀 竹 岡 善 舘 萬 文 臣 音 川 村 榮 鋼 三 清 六
右治 太郎 堂 長 書 古 書 社 堂 正 商 三 店 支 吉 助 書 助 社 郎 助 平

世界文庫

文學は能く人種の氣習精神事業を示す西歐人の科學に深く推理に長じ冒險の氣象、偉大の事跡に富むは遙に東亞人種の上にあり故に其文學は精緻、壯大、怪奇、消魂駭魄、人を恠殺し慈殺し絶倒せしむべきもの多きも亦其所歟。今此世界文庫と題し英、佛、獨、魯、伊、墺、陸各國の名家等西歐文學の英華を拔き精粹を擇びて豪傑の流が一生の精神を傾け滿腔の血瀝を濺ぎて成したる世界の奇書、一代の傑著名作と稱せらるゝものゝみを採り我が有名なる文學家に托して之を譯述し廣く江湖に頒んとす。「世界文庫」中に收むるは探險記、小說、傳記、等を首め文學各種の好書なり。之に由て西歐人種の絶大なる精神事業を察せば獨り無限の樂みを覽ゆるのみならず又實に審興啓作の實益あるべし

毎月二回發兌　洋製大判

四六木版密圖挿入

正價一冊(百六十頁)拾五錢〇六冊前金八拾五錢〇十二冊前金一圓六拾錢〇郵稅一冊六錢ッヽ

亞非利加探險者スタンレー原著　矢部五洲君譯述

◉自第壹編至第六編　**闇黑亞弗利加**　全六冊

世界未曾有の大冒險家スタンレー氏、深く亞弗利加內地に入り、食人殘忍の蠻族に接し、猛獸猛獸の棲窟を探り、屢々死して、屢々蘇す、當時氏の一擧手一投足の消息は、世界各國に電報せられて、一世の耳目を悲けり、幸にして奇出度英國に歸るや、其の實蹟したる所を著はして、世界の大喝采を博せるもの、即ち本書なり、本館之を譯して、發刊せし以來、非常の歡迎を受く、其怪奇壯絶天下の珍書たるは、贅言を俟たざるなり。

英國ヘスチング、マルクハム原著　幸田露伴君譯述

◉第七編　**大氷海**　全一冊

闇黑亞弗利加と相俟つて、水陸冒險に於ける、世界の壯觀を極むるものは、本書大氷海なり。英國海軍アレルト艦長、大佐ヘスチングス、マルクハム公が、原文凡そ歐洲に亦く。抑も一千八百七十五年英國に於てアレルト、並びにダスカベリーの二艦を鑣し、全地球極北の氷海に大冒險を試みんとす。前人未だ曾て踏破せざる、如何に狙等は世界的偉丈夫として其面目名譽を發揚するや、奕心昏絶すべき悲境、拍手大聲すべき、快事は譯者の巧筆敏腕により、共に一段の大精彩あり。時勢歷然として冒險の奇談なる、の今日豈に此書の精讀を怠るべけんや。

露國レフ、トルストイ伯原著　田山花袋君譯述

◉第八編　**コサック兵**　全壹冊

高加索嶺の北、露領の最南端、一國あり、「コサック」州といふ、多く美人を產す、世界第一の稱あり、是を以て當國士官の「アブリック」人防禦の爲めこの州に送られたるもの、大概鴛鴦の盟を兵馬倥偬の間に締せざる者なし、レフ、トルストイ伯は露國の詩人十九世紀鉾々たる大詩人なり、而して其作「コサック」兵は實にこの間の消息を陳べて、神來の詩想を婉麗なる筆に描出したるものなり、讀來れば忽ちにして砲聲忽ちにして美人、忽ちにして葡萄園下の逍遙となり、忽ちにして「アブリック」人攻擊の出兵となり、忽ちにして戰鬪大叫喚、少女の大血涙となりて了る、實絶世絶、眞に不可言の妙なり、

西班牙セルバンテス著　松居松葉君譯述

◉第九編第拾編　**鈍機翁冒險譚**　全貳冊

英國の大批評家が所謂『最高なる天才が作り爲したるもの〻匹一』として、其名全世界に高く、殆んど三百年以前にありてすら、出版後一年を經すして三版を累れ十年にして八版に至り、英國のみにてもその飜譯十回に及ばんとする世界の一大奇書『鈍機翁』は今や松居松葉子の筆によりて諸君の面前に現はれんとす。盖しこの書の變幻奇怪鬼神驚り妖魔舞ところ西遊記を讀むが如く、勇武剛健長蛇を斬り大軍を破るところ水滸傳と相似たり。その縱橫の詼諧忽地人をして國を解かしむるは三馬一九に勝り、この纏綿たる情緒人をして腸を斷たしむるは琵琶行想夫憐も遜色あるべし。想ふに讀者一度この書を繙かば、再讀三讀、幾讀を重れて趣味いよ〳〵深く、實に消閑の好伴侶たらん。

雄峯高橋光威君譯述

◉自第拾壹編至第拾參編　ロビンソン、グルーソー　**絶島漂流記**　全三冊

世若し一大奇絶の談あらばロビンソン絶島漂流記ほど奇絶なるはなく世若し一大冒險の事あらば又ロビンソン絶島漂流の事跡ほど冒險なるはあらず氏海上圖らずも惡風に逢て難船し萬死を出でて孤島に漂着し幾數年の間或は野蠻を侶とし或は蠻族と交はり殆んど死して復た生く奇絶險絶に生く者は世に出でんとす洛陽の紙價爲めに貴からん是本館の私かに期する所なり讀者諸君請ふ親て購求せよ』此書嘗て邦語に譯流せられたるものなきにあらず然ども未だ必ずしも原文の妙を寫さず且つ中途に廢絶して全編を見る能はざるを遺憾とす本館茲に新に飜譯の名手雄峯高橋君に囑して之を譯出し日ならず刊行せんとす譯文の妙は書中の奇構と相映して一段の光彩を放たん。

英國ライダー、ハッガード著　宮井安吉君譯述

◉自第拾四編至第拾五編　**大寶窟**　全二冊

ライダイ、ハッガードは當今英國の文壇に於て有數の偉物而して其の傑作の一を冒險小說「大寶窟」となす其の蘊きに世に出つるや諸新聞雜誌爭ふて其の脚色の奇と文章の妙を稱し篇末の辭盡さゝるなし是に於て英人誦み米人誦み英語を解する各國人誦み倫敦の「サーキュレーチン、ライブラリー」五百部を藏して猶ほその不足を感するに至る謂つべし偉なりと錦中沈勇の士爵あり佐羅のクオーターメーンあり黑奴王あり魔法使あり金を鑄す沙漠去りて雪を頂く山來り奇辭の奴僕化して金冠の王となり流血惨の漂す戰亂華の現はれ血線の古國三百年前の屍骸日蝕荒狂白晝神祠珠堆なす暗窟化石古金等愈よ出で〻愈よ奇起伏變縱の妙讀む者をして照接に暇あらざらしむ卯の歲今之を國に紹介すと小說の英を語るに足らざることなし知れ四千萬の兄弟此の「大寶窟」を誦まずんば未だ冒險の奇

43
2111

世界文庫

毎月二回發兌　第拾貳編　正價金拾五錢

高橋雄峯譯述

ロビンソンクルソー

絶島漂流記

中卷

東京博文館藏版

明治文庫

短篇小說

毎月壹回發兌●毎篇讀切●彩色密畫挿入●洋裝大判本

正價一冊（二百頁）拾五錢●六冊前金八拾五錢●十二冊前金一圓六拾錢●郵税一冊六錢

最も短篇なり、最も詩趣多きもの
は短篇なり、最も簡潔なもの
雅致なる、最も壯快なる
奇絶なる、最も壯快なる
簡なる、最も短篇なる
り、雖も短篇なる
的に、捨て抽なる
染む、美を發揮す
る、精を發揮す
もの、短篇なる
り、怡も霞中の花
の如し、水底の月
の如し、瀧車の響
り、富岳の下を流る
ぐり、て過る
ぐる、が如し
潮を走る、松島の
杜鵑の如し、電光
しの如し、瞬間の
大觀を示す、天
地の奇絶壯快之に出づ
る治文庫は最も短篇
明治文庫に得意なる諸名
篇家の傑作を集め、
千紫萬紅、一たび
逐月之を刊行すす。

◎第壹編目次
巖谷漣山人著
辻占飴　竹内桂舟密畫
秋の蝶　けなげさ
黒衣白面鬼　梢上月
山時鳥　京自慢　花の旅

◎第貳編目次
川上眉山雪折竹　村井弦齋福の神
廣津柳浪佛魔一紙　嵯峨の屋源命の鈴子
石橋思案姥櫻　江見水蔭驚く鴉

◎第參編目次
江見水蔭著
劍客　嵐疝癖太守
骨董師　武内桂舟密畫
信玄翁　故家水紘
天武　畫師の妻
初蕾　楓
わかれ霜
雲烟過眼
漁郎
一夜の宿

◎第四編目次
幸田露伴緣外緣　巖谷漣媒介人
多田流山新學士　川上眉山風流狂盲記
田山花袋隅田川の秋　嵯峨の屋庭の敎子
渡部乙羽都土産

◎第五編目次
山田美妙齋著
みゝずは　三島蕉窓密畫
れ　月花の見立
曙の　雪折れ竹
春の　古切手
墓　母のなさけ
紅　月蝕山紀行
墻　大龍王　田舍聖者
くされ緣　なか娘
春の花鳥　鴉の道行

◎第六編目次
武内桂舟密畫
櫻痴居士忠義お安　學海居士當世二人女婿

◎第七編目次
三島蕉窓密畫
中村花痴著
俄長者　狂蝴蝶
俠魂　合ノ歡花
片時雨　破鏡

◎第八編目次
巖谷漣若　富岡永洗密畫
山田美妙村上義光　水
嵯峨の屋國民大帝　田山花袋廿日月
西森骨皮滑稽二人男　松聲庵夜行汽車
眠花道人江戸舞踏會　原抱一庵青春夢

◎第九編目次
寺崎廣業密畫
渡部乙羽著　邪正一如
浮田一蕙　捨扇
戀今樣　京屋娘
こぼれ梅
神田七不思議　新奥の細道
故郷の錦繪　玉川河童泳記
吉野花揚衣
初瀬

◎第拾編目次
富岡永洗密畫
櫻痴居士僞稱紳士　漣山人評判一人娘
嵯峨のや世の中　松居十八公子錦花緣
田山花袋渭川　松聲庵銃
暮山

◎第拾壹編目次
武内桂舟密畫
思案外史著
羽扨島　わが戀
青大將　秀木魚
斷腸花　可愛い子
美人車
片破月

都門雜興

ロビンソンクルーソー

絶島漂流記二卷目次

第十三回　足跡に關して種々の憶測を試み。喜憂交こ到る。
蠻人の來襲を防禦するの用意をなし。穴を穿ちて食用品を秘藏す。
小山に登りて小舟を見る。島の他側に蠻族の人を食へたる迹を見て恐怖止まず。
深く閉ち籠りて外出せず。

第十四回　蠻族來襲の防禦方法に付き種々思考を費やす。余より加ふるの不理なるを考ふ。
神の裁判に一任せんと欲す。居恒屏息して蠻族の視聽を避く。
新に大洞窟を發見す。

第十五回　鸚鵡に言語を教ゆ。犬及び猫を養て家族となす。
再び蠻族の人肉を食ふを見て驚く。外洋に難船あるを見て之を救ふの方法を講ず。

帝國圖書館藏